

【按】六月五日幕府新撰組をして浪士の池田屋に聚合するを圍み肥後藩士宮部鼎藏長藩士吉田稔磨等十數人を斬り古高俊太郎等二十餘人を捕へ市中探索日に嚴なり同日京師火あり隆盛等時に捕公社の敷地を相せんが爲め大阪より兵庫に行かんとし伊丹に宿せしが京師の事變を知り急遽歸京す此書池田屋事變及長藩の舉動を報じたるなり御兩殿様とあるは久光忠義を指す

木場傳内に贈る書

(元治元年六月十一日)

御國元より上坂致居候商人之内宇治六角堂邊茶屋にをひて過分之茶買入候段相聞得自然長崎へ相廻異人交易之方に振向候ものと相聞れ候就而は右買本之茶屋是迄異人交易取結世間之聞得も不宜者之由に候得者尙更御名目に相係り色々難說相起候儀に御座候定而姦商共利慾に迷ひ右等取企候儀不届之次第に御座候如何様辨無之ものとは乍申先度綿一條に付惡評申觸し今以切齒之事御座候處其邊之儀は疾く存ながら商人勝手は不構又は賣買向御禁止之事にも無之故不苦抔との所存に而御惡評は不顧所業可惡者共御座候何分名前等慥に不相知候間巨細に被相糺買候品は都而本々へ差返右之商人直様罷下候様御取計可被成候當分不容易御時節少々惡しき御評判も相消候模様之處又々相重

候而は如何にも無致方仕合に御座候に付嚴重御取調可被下候、歎息之至に御座候、
、、、分而申越候以上

六月十一日

大島吉之助

木場傳内殿

【按】此書不正商人の取調方を命じたるなり木場は當時の大阪留守居なり

大久保一藏に贈る書

(元治元年六月十四日)

向署之砌御座候得共御兩殿様御機嫌能被遊御座恐悅の御儀奉存候次に貴兄無異議御勤務之由奉賀候陳ば御當地物騒の次第は先日申上越候通毎日一兩人づゝ捕方にて拔身を携市中往來人間違にても不苦との譯にて氣味わるき事に御座候土州人を間違鎗にて突股に疵付け大に六ヶ敷成立居候由に御座候長州におひては早速早打を以國元へ申遣御末家又は大臣の内一人早々被罷登候様急を告候由に御座候其内差迫り候事も有之候はば速に可打破との決心と被相聞申候畢竟何等かの企有之浪士召捕相始候哉段々手を付

候處正親町三條へ申含有栖川様へ打合達叡聞前關白鷹司様の御復職を相計り候由に被相聞申候又一橋御付原市之進等の説にては洛中に火を懸御遷幸の節鳳輦を奉奪候謀計と申説に御座候是等の處は實に拙策と申ものに極り候事に御座候へば決して名を替へ候半か一橋其外目差處を燒打可致含かも不相知事に御座候近來長州にては頻に討幕の説相起り候由に御座候間異人襲來に付援兵各藩より不差出様朝命相下候處を願置候事件餘程怨深く成立候譯と被相聞申候今當分にては禍蕭牆の内に相起候半かと晝夜安き心も無之次第に御座候

尹宮の處一橋邊の御結合深成立居候故暴客類に怨み居候姿に御座候何様之暴發可致かも不被計との説にて大に苦心仕候事に御座候右に付太夫へ得と申上外に可奉救の道も無御座候間いづれ御辭職被遊候て暫時の處鋒先御避不被遊候ては外に道も無之如何様評判惡敷成立候迎夫形被捨置候御場合も不出來御間柄に御座候へば御辭職の處私より御進め可申上筋に極め置申候間左様御思召被下候て其邊の處宜敷被仰上置可被下候○浪士召捕方に付同腹の處は一橋桑名彦根加賀會津五藩の由に御座候○長國へ異人襲來

の儀はいまだ不相分候得共江戸におひて幕役より長留守居へ相達候付異人へ何様相諭候ても聞入候丈けに無之候に付異船參り候ても不苦やと爲申由に御座候○園田五助とか申して亡名いたし居清明と名乘法體の者大坂留守居へ長州邊聞合内命を蒙り候譯申出候由にて私方迄參り候へ共何分慥成儀も不相知其上大津邊にて盜等いたし候次第おそろしき者に御座候て大津より爰許御留守居方迄訴出候事も有之儀に御座候へば又欺謀かも不相知と不審を懷き候事に御座候間何も打合不申御國元にて御承知の通御手を付られ候て可宜と申置候事に御座候間聞合方に被差出候者に御座候哉爲御知置可被下候○中村半次郎と申者追々暴客の中間にも入込長州屋敷内にも無心置召入候て彼方の事情は委敷相分り外に段々手を付候へ共夫程相分り候手筋も無之中間と見込候故内情相分候事に御座候處長州襲來に付長州國元迄踏入度との事に御座候間太夫へ申上差出候事に御座候本道の暴客に相成かは不知候へ共又々罷歸候へば委敷情態の相分事と相考申候間左様御含置可被下候いづれ脱藩の姿にて長州へ入込候手段にいたし候様相達申候先度申上候通松田東園と申者脱藩の姿にて差出置候へ共埒明不申第一私を落し暴

論を立候様申込置候へ共とふも中村程には請かなき筋と相見得申候此旨形行迄如此御座候恐々謹言

六月十四日

大島吉之助

大久保一藏様

別簡

晒御買下の一條太夫へ御申越相成候處公子御迎として大坂迄罷越候様被仰付下坂の節御留守居へ引合御買入一條可取計旨承知いたし候付大坂にて得と吟味仕候處商人手にて買入爲致候てはいづれ成手術は差見得候間詰見聞役吳服所へ踏込直様買入候へば法外の事も無之御買入可相成候付反布差出候様相達候得ば直に正札を繰替候事も有之由に候間踏入買入候へば右等の手術不相調候付左様の計可宜と吟味いたし縞白晒千五百反丈御買入近便より御方へ振向被差廻候様大坂御留守居方へも談置候間左様御納得可被下候自然太夫より御申越相成賦には御座候得共今日病氣にて出勤も無之候付爲念此段も申上越候以上

六月十四日

大島吉之助

大久保一藏様

追て時節取後不相成様早便より差廻候様委敷相達置候

【按】此書池田屋事變後長藩の舉動及浪士暴舉の真相を報じ且つ尹宮に辭職勸告の事及桐野利秋(中村半次郎)をして長藩の事情を探らしめたる事等を報じたるなり別簡に太夫とあるは家老小松清廉(帶刀)を指す

大久保一藏に贈る書 (元治元年六月二十一日)

暑氣相募候得共御兩殿様益御機嫌能御座被遊恐悅之御儀奉存候陳者去十五日より打立伏見一泊にて十六日着坂いたし御待申上居候處十七日晝過御着被爲在兩日御滞坂に而十九日川御登に而伏見御一宿二十日二本松御屋敷に御着被爲在御着掛御花園御屋敷に爲入首尾能御着被爲成候御儀御互に恐悅之御事に御座候
中將様御儀指宿御湯治被爲入候段承知仕御、被遊候御事大慶之御儀與奉存候扱御當
地之形勢におひて日々變亂に傾候次第に而致方もなき世態與罷成申候

一朝廷にも内亂到來いたし候向にて平岡並原市之進逢切害候由廷中之事に候得ば何様之譯に而如斯場に相及候哉委敷始末不相分事に御座候獨木に而は皆烏合之兵に而御座候處内亂到來に而は定而暴威を振候も六ヶ敷可有御座歟天下之人心は相離連も意氣込通暴權を握られ候も相調申間敷歟此末之處如何形行候歟與相考居申候會津之儀も獨木の助與相成一向暴を助居候處土佐人間違に而槍突候より土人頻に憤り兩三日跡にも會人を五六人切捨候由右等大混雜與罷成候付今に而は會人もあぐみ果たる由に被相聞申候○伊東萬次郎長州邊開合方として被差出候處罷歸候唐物締土持方より御國元に御届相成候向與格別相變候儀も無之中村半次郎與申者も先度申上越候通是非長州へ入込候様申付候而差出候處境目におひて決而不入込由に而是以立歸申候第一賣船に手を付候而大坂に相廻候船には決て不洩由に御座候右に付御國元より上坂之商人共茶買取候聞得有之大坂え聞合方間越置候處別紙之通申出候間無往來之商人は都而差下候様相達蒸汽船えは茶等之品物積入不致候様蒸汽船方役々え相達置申候商人手本に而取扱候儀も悉く御名目に相拘實に込入候次第に御座候付屹と御取締向

御達相成候様御計可被下候勿論御物之御船に無往來之者便船被仰付候儀甚以不相濟儀に御座候間深取調候様蒸汽船方掛御役々えも御達置可被下候いづれ此形勢連も暴論鎖國いたし候儀は相調申間敷候間自然開國之勢に相成可申與相考居候其節は茶生蠟等之品は餘程御益相成可申事に而商人共え被任置候品にては有之間敷候付只今之處嚴敷取締置公然與相成候節御國産御賣出相成候様思召被下候而此涯之處深く御締向被下候様御願に御座候異人交易一條に付而は色々惡評共有之候得共委敷は不申上越候間御察可被下候只今外に何も御評判申上事も無之候得共交易一條而已惡評申觸候事に御座候間暫御取締向有御座度儀與奉存候○太夫御歸國之一條も來月二十日より内には御出立之舍に御座候間左様御納得可被下候左候而蒸汽船御遣之處被申越候由相聞申候付夫等之御都合被成下度小倉邊え御着共相成候而は懸念之譯も有之候其内便掛之場所も悉不宜事に御座候間宜敷御計可被下候右に付先便申上越置候岩下氏跡に被相居候處御願申上置候間何卒相運候様御都合被成下度私一人に而は實に氣細く公子も被爲在候付而は旁案勞仕居候付何分早々御申遣可被下候若御返答不相達内

京着相成候はゞ引止置御返答相待候様可致候間左様御納得可被下候此旨公子御着之御祝儀迄如此御座候恐々謹言

六月二十一日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】隆盛公子鳥津珍彦出迎の爲め十五日再び下阪せし十七日公子着阪せしを以て二十日歸京す此書公子の着京を報じたるなり書中原市之進殺害せらるゝとある事實にあらず獨木とあるは一橋慶喜を指す

大久保一藏に贈る書

(元治元年六月二十五日)

去る二十日より追々長州人着坂いたし候段相聞得候に付方々探索方いたし置候處相分候次第柄全五日晚長人召捕一件より相起候儀にて多人數出張之趣に御座候大體千人與申事惣宰は福原越後と申者之由に御座候左候て二十三日着坂にて牧方一泊二十四日着伏相成申候暫は滞在に候半大坂にては町奉行方へ届申出候趣は江戸表へ罷通候筋に御座候へ共決して左様の含にては無之由に御座候然處二十四日晝過留守居御呼出有之淀邊

へ人數差出し警衛いたし候様御達相成候處即刻御書付を以て御斷相成候儀に御座候此度之戰爭は全長會之私闘に御座候間無名之軍を動候場合に無之誠に御遺策之通禁闕御守護一筋に相守候外無餘念事に御座候間左様御含可被下候いづれ長人之儀内には外夷の襲來を待外は出軍之次第實に死地に陥り候窮闘と申ものに御座候へば定て破立候儀歎と相考候舊怨を懷き候事は素よりの儀に御座候得共差迫候處を幸にいたし兵を動し候儀誠に無名の軍と相成候ては後來迄之汚名と相成儀に御座候間斷然御斷切に相成候筋に申上其通届相成候事に御座候一度長州挫候はゞ幕命を不奉處を以難論相成候儀は差見得候得共夫等の煩を顧て無名之兵を舉後來之耻辱と相成候儀共にては却て其罪も可重と相考居申候此上は朝廷如何様之御災難到來いたし候ても御安慮に相成候丈けは相盡賦に御座候間左様御納得可被下候いづれの筋長州より若や朝廷に奉對御怨申上候様之儀も御座候はゞ其節は不戦して相濟申間敷と相決し罷在申候右等の趣意は御賢慮を以宜敷御執奏被成下候様奉願候尤も幕府より之御達書並御斷之御書付は表通之御間合可相成候に付文略仕候然處宮之城公子之御儀二十八日御出立之筋に御極り相成居候

得共劔鎗或は切火繩等にて陸地又は船上より罷登候に付御下坂之處御見合不相成候而相濟申間敷儀と吟味仕置候處公子思召も此變動御見捨御立歸被爲成がたくとの御趣意之事御座候へば却て幸之事與奉存暫時御扣相成候方可宜少し居合相付候はゞ早々御歸國相成候様御都合可仕儀と吟味仕申候此一舉に付御國許より早々御人數被差出候時機にも有御座間敷候間左様御舍可被下候若御人數不被差出候而不叶機會も御座候はゞ其節は蒸汽船も罷居候に付急に申上候様可仕と差圖致置候間是又同様御舍可被下候此旨要事迄如此御座候恐々謹言

六月二十五日

大島吉之助

大久保 一 藏様

追而若又長州勢を得候事も御座候はゞ朝廷に相迫候儀は差見得候に付是でも又難題は到來可仕儀與相考居申候しかし死ものくるひ與申鹽梅に御座候間逆も尾をとり候考與は相見得不申候

【按】是より先池田屋の變長藩に達するや久坂義助等直に兵を率ゐて上京し尋ぎて家老福原越後もまた兵二千を

率ゐて山口を發し二十四日伏見に到るより幕府在京の諸藩に命じ兵を出して之に備へしむ薩藩は陸盛未だ兵を出すべき時機にあらずと爲し藩論を決して出兵を拒絶す此書福原等着伏の状況及び出兵拒絶のことを報じたるなり宮之城公子云々島津久治(圖書)疾ありて弟珍彦と交代し歸國せんとせしが會々長藩兵上京し京阪の間騷然たるを以て姑く歸國を見合したるなり

國許側用人及側役に贈る書 (元治元年六月二十五日)

於其御許大守様中將様暉姫様益御機嫌能被遊御座其外御惣容様彌御安康被爲成御座恐悅御儀奉存候於爰許貞君様益御機嫌能被遊御座重疊恐悅御同意奉存候今日表より御用候付足輕兩人極々急飛脚被差立候付御左右申越候條宜敷被申上可被下候以上

六月二十五日

大島吉之助

御 國 許

御側御用人衆

御側 役 衆

【按】此書公用書なり暉姫は齊彬の女後忠義の夫人にして貞君は島津家より嫁せし近衛忠房の夫人なり

大久保一藏に贈る書

(元治元年六月二十七日)

先便申上越候通禁闕御守護丈之處一筋に可相勤賦に申上置候處今日に到り候處長州暴横相顯れ有栖川宮並正親町等を相かたらひ朝廷を八月十八日已前に打替我意を働くの趣意と相見得申候次第に御座候共いづれ勅命を以征討之旨相下り候得者長と不相戦候て不相叶時機も可有之決心致居候に付蒸汽船の儀は大阪へ相滞候ては懸念は勿論の事に御座候間早々御差返し相成候方可然事と吟味いたし居候處既に今日は九門御差固相成長州勢伏見より押來候段相聞得大騒動之事に御座候間早速援兵御差出相成候處蒸汽船を以表通御問越相成候に付荒増大意迄申上候間左様御心得可被下候成丈相忍び可申含にて罷在候處暴威を以朝廷を取崩候仕方におひてはもうはだまり兼候次第に御座候八月十八日已前を眞の叡慮其後之處は都て僞謀のものにいたし成し候事にて堂上方も過半長州同意の向と相見得申候此上は何様相こらへ候ても必ず我國打崩され候儀無疑いづれ朝命を奉じ相戦より外は無致方事に御座候間能々御合點可被成下候恐々謹言

六月二十七日夜認

大島吉之助

大久保一藏様

【按】二十七日福原越後兵を進めて嵯峨天龍寺に入る京師騷擾を極む隆盛長藩兵の暴狀顯然たるを以て遂に兵を動かすに至るべきを察し出兵を要求したるなり

大久保一藏に贈る書

(元治元年六月二十八日)

近比長崎より御取寄の本込小銃其許御格護相成候由内田吉井一挺づゝ拜借仕度願出候間此節蒸汽船便より御差登可給候此旨御願申進候已上

六月二十八日

大島吉之助

大久保一藏様

追て税所にも一挺拜借願出候間可然御願申越候

【按】小銃の送附方を依頼したるなり内田は政風、吉井は友實、税所は篤を云ふ

大久保一藏に贈る書

(元治元年七月四日)

去る二十四日長州之大臣福原越後多人數引列れ着伏之次第は追々申上越候間相達候半
漸々六ヶ敷勢ひに成立候付最初より之始末細々不申盡急々之事に御座候間得と申上越
候付深く御勘考之上御申上に相成候儀共宜敷御計可被下候扱越後より歎願書差出候儀
共は蒸汽船便より寫差上置候通之事御座候處去月二十七日晩方長州勢より伏見におひ
て會津之堅人數を驚かし押して踏通上京可致との趣に御座候處京地大騒動いたし九門御
鎖閉に相成各藩堅人數相増甲冑にて切火繩拔身等にて出張之形勢直様戰爭之姿に御座
候間早速物見として三手差出候處爲何儀も無之御所邊騒動不一方次第に御座候堂上方
は勿論一橋所司代守護職も大病ながら押して參内いたし候事共に御座候處正親町三條公
より之御議論之趣は長門宰相父子上京被仰出其方御不審之廉は無之事に候得共家臣之
者共三條等へ相迫り候趣も有之夫故御勘氣を蒙り居候得共勅勘御免被成候段被仰出候
はゞ平隱に相鎮可申七卿方之儀は如何にも御免被仰付候儀も無之脱走之罪不輕候付其

邊は御許容被遊節も無之段御達に相成候はゞ無事に可相濟との趣に御座候處朝廷其儀
に決し居候由然處一橋夕方より參内いたし申上候は此節長州歎願之筋御採用相成筋に
は無之兵器を携へ來り朝廷に相迫候儀臣子之分を越甚以不都合之事に御座候朝威悉衰
候御事にて斷然と御採用無之長州は歎願之筋も有之候はゞ夫々歎願のいたし様も可有
之繩にてもかゝり至誠を開き申出候はゞ如何にも御採用相成候廉も可有之事に御座候
得共兵を引て相迫候儀は決て御取揚無之早々人數引拂候儀御達相成候方至當之御事と
申上候由若此儀を御採用御座候はゞ今晚會津を始一橋にも御役斷可申上候間長州を被
召入御勝手に如何様共可被遊と演舌に及候處朝廷駭然たる事にて一言を被吐候御方も
無之由御座候其夜四ツ時にも御座候や内府様より御所へ早々罷出候様私へ御達有之
候付早速罷出候處右兩議の議論何れか至當に候や無伏職申上候様承知仕候付一橋より
言上之趣如何にも尤之議と奉存候付其處を以御達相成若不奉承知候て暴發いたし候は
ば其節は長州之罪狀を明白に相記し朝廷よゝ各藩に追討之勅命下り候はゞ名義正しく
朝威も相振ひ速に攻滅し可申儀と御答申上候て罷歸候處朝議一振之論に相決し和戰共

一橋之見込を以所置可致旨御委任相成候由に御座候是より先因州より廻文を以長州之歎願筋御採用相成候様周旋致し可吳との趣も有之候得共一圓不取合會津よりは是非援兵差出吳候偏に申來候得共此御方様御儀に付ては禁闕御守衛朝命を以て被仰出置候て夫丈之人數殘し置候間迎も分配いたし候儀不相調處を以無據も御受合出來兼候趣相斷朝廷遵奉之筋屹と突立可申一筋に御座候處御屋敷にても長州を救ふより會津を助けんにやならん抔との議論も紛々と相發し候得共名義正しく朝廷遵奉之道不相立候ては決して不動義絶て申切候もうは御屋敷中一躰之議論と罷成安心此事に御座候何様議論沸騰いたし候ても筋合を亂し候ては不相濟儀とひとく持張候事に御座候一橋殿より長州へ朝命を傳られ候儀に付ては幕府の大小監察を以被相達幾時限に伏見引拂候様其時を過し候ては彌朝命不奉に相決し違勅之罪を正し可申と相達し諸方へ人數繰出し堅め付置急速に不相掛候ては敵方より先をいたし都て害を引起候も難計候付堅人數差出候儀一橋より小松家呼出し直達に相成候得共前論通筋を正しく致し名義を不亂處を以被相答何分にも各藩へ朝命を以追討之命を下され候はゞ堅陣を此方一手に引受可打破段も申

述候儀に御座候由右等之處は太夫より直に御申越に相成候半と存候間文略仕候然處長州へ御達之筋今日明日と相待ち居此上は朝命を奉じ征討可致事と明め居候處昨日之朝議今日内府様へ相伺申候處昨夕四ツ時分一橋參内いたし申述候趣は關東において混雜之儀到來いたし候其譯は水戸中納言殿より鷹司關白へ被仰越候は大和守儀水戸殿へ何之相談も不致閑老始小監察迄九人之人數退役申付候次第不束之致方に付早速退役申付候段申來已に安藤久世之兩人再職之向に御座候由就ては水戸殿には屹と御譴責相成大和守復職被仰出度との儀にて即夕御書付等も相調候處得と勘考之上明日言上可仕との趣に御座候由就ては長州へ相達候儀も出來兼候其譯は攘夷鎖港之儀と相尋候節答様無之と申居候由に御座候前夜一橋より御議論申上候事と甚以相違致候攘夷等之儀可相拘譯にも無之此節之儀は兩事に相成候譯に御座候得は是等を以て相延候處一橋之意底不被計長州へ組し候か又は勅命を以尾張越前阿波土佐藤堂等之諸侯御召相成居候由御座候間其邊の處待合候儀か關東の破れを聞て既に我身も被退候間暫見合候賦か何分不相分事に御座候いづれ大亂に傾き候半かと相察居申候私共の吟味此度長州挫け候ても此

末の處一橋に兵權相まし可申候間是非筋を正しく致し朝威相立候處を趣意にいたし居候處此期に相成此ことも遺恨之儀無御座候事精細に書取かたく御座候間何卒御深察可被下候長州勢も嵯峨天龍寺に三百計伏見に四百餘山崎天王山に三百計と申事に御座候多くは浪士輩と被相聞破る日には忽ち踏禿す事に御座候三ヶ所之兵皆應援も出來不申一方づゝ崩立候外は無之事と奉存候因州は一向ら相助け候筋と相見得備前は些と控居候姿に御座候其外の藩は少々づゝ面々見込有之由被相聞申候堂上方之處長藩一味の方多く込入りたる事に御座候尹宮も此節は餘程御はまりに相成是丈けは大幸の事に御座候正親町三條にも説が替り是非福原を入京被仰付候方周旋可致吳様柳原殿より申參候由内府公の御咄に御座候今日は傳奏衆よりの御狀相達候付決て御召の事には有之間敷やと相考候付内々内府様迄御伺申候處急速之御事には無御座候由承知仕安堵此事に御座候私共にも相考申候處いまだ御上京相成候儀は些早く候には有之間敷や今少し時機を御見合被下候方可宜儀と相考居申候いづれ大破に相成べく事ながら今の處を以御立直し相成候處六ヶ敷いづれどちらでも相極り候上御出張被遊候方御宜敷者有之間敷や

と愚考仕候得共其邊の處は思食次第之儀にも御座候間何分にも宜敷御取成可被下候此旨荒々奉得貴意候恐々謹言

七月四日

大島吉之助

大久保一藏様

別紙伏見に於て服部政次郎より探索いたし候書付差出候與力方よりの書面かと被察申候長州へ御達相成候儀無相違一橋より一昨日朝廷へ被申上御振合とは相違ひ候に付如何の譯かと聞糺候得共其邊の處委敷相知候へ共御達相成儀間違は有之間敷やと相考居申候就ては返答振りに依り御所置の品も可有之不遵之儀申立候はゞ速に征討之命相下り可申事と相待居申候直様人數を引拂ひ候て此節迄は戦に不相成様と相考候得共つまり戦に不相成候ては不濟勢と相考居申候明日中之舉動唯相待計に御座候恐々謹言

七月四日

大島吉之助

大久保一藏様

書翰

追啓上段々一橋之處疑念起り勝に御座候得共長州へ組し候譯とも不被思候乍然心體不被計候尙々動も不動も信義名分上に於いて間違は不仕候間是丈けは笹安心可被下候

別紙(探索書)

貴墨拜承仕候如命暑氣凌兼候得共益御壯榮御勤勞奉拜賀候御申越之通今日は目付永井主水正御目付戸川鉾三郎同小出五郎左衛門其外御徒目付等當御役所へ被差越長藩福原越後御役所へ被召寄候處同人儀不快之趣にて明早朝迄延し吳様申出候に付其段役々も承知にて孰れ明朝には御役所へ越後罷越可申儀と奉存候罷越候はゞ應接之模様相分次第御洩し可申上候將又即今之動靜等其外模様御洩し可申旨差て相變る儀も無之實は過刻より暑邪に當り在宿罷在孰れ明朝早天より出勤可仕候間猶相變候儀は從是可得貴意候

右御受勿々以上

七月三日

【按】此書福原越後等入京後の状況、朝議確定の始末、關東改革につき一橋慶喜の舉動等を詳報したるなり隆盛

が當時近衛忠房の詰問に答へて朝議を確定せしめたる如何に大義名分を重じたるかを知らべきなり書中内府様とあるは内大臣近衛忠房を指し大和守は松平直克を云ふ傳奏衆より御狀云云は久光に御召内旨を傳へられしを云ふ

大久保一藏に贈る書 (元治元年七月九日)

殘暑甚敷御座候得共御兩殿様益御機嫌能可被遊御座恐悅之御儀奉存候次に貴兄御同慶奉賀候陳者長州御處置に付而は名分大義御當然之譯に而決して御異論之筋無御座候處長州荷擔之堂上尹宮并陽明殿杯を奉刺杯との説相起候處例之御持病恐怖直様起り立段と建言仕候而も難被行勢に成立殘念之至に御座候此機會不可失時にて朝威可振立之處如何んとも難致血涙を吞候事共に御座候一橋にも初日の議論も稍變じ何分不斷之姿に相見得申候關東表大破に相成候處より如此次第暫く勢見合候事歟或は長州へ内應之説も相發候得共いまだ夫程には參り申問敷乍然安心は出來不申事に御座候久世安藤再職との説も近々相響候得共いまだ慥成事には無御座候川越復職之儀朝命を以御沙汰相成候而は如何に成立可申哉安藤等再役いたし居候而は逆も奉じ申問敷與相考候次第に

御座候右等之舉動も不相分候に付様子を伺居候ものにては有之間敷哉安藤權を握候ては一橋も危き事に候へば夫より氣後れいたし候半歟と推察いたし居申候昨日は幕より御留守居呼出有之長州人數引拂候様朝命を以て相達候付各藩よりも説得可致旨御達し被成候右は畢竟一橋草稿相認にてケ様に御沙汰相成候様建言仕候譯に御座候へば何篇一橋之手限り與申ものに相成朝權衰へ行候事に成立可申歟宮方陽明殿杯之處一橋に任置候得ば後難無之との事にて朝威之振ふか振はぬか全御構無之御事にて意恨之事に御座候御察可被下候右に付大道之筋を以て説得之處御斷申上候儀は表通御問合可相成候間文略仕候右説得之一條に付因州より出會いたし吳候様御留守居方へ申來候得共右同様の振合を以出席斷申遣候至當之御處置を以朝廷より御達之筋不奉候而は違勅之名を蒙候儀に御座候得ば決して説得可致筋も無之別に餘論無之候間可及御斷との事にて一向打合不申因州は長州荷擔之巨魁に候得ば決して取込之策も難計當分は朝廷遵奉之筋を一圖に立込少しも不動候處外分は動靜不被計双方より望を掛味方に可引入との事に幕府の方よりは十人位にても守衛を出しさへ候へは諸藩振はまり可吳との譯に御座

候得共初度之舉動不容易儀にて勢に乗り俄に人數共繰出可申時態にては無之無據兵を動し候ものに無之候ては不相濟勿論筋合を慥にいたす處肝要之儀與奉存候付些とも動搖不致英氣を養ひ居候事に御座候此十一日限に引拂候様御達し相成候に付ては此度迄不立退候者いづれにも追討之勅命相下り可申儀與奉存候付其節は正々堂々之兵を以長賊を驅り盡し可申與相樂居申候長州後詰之勢三千人追付着坂之段注進候由如何様に致しても京地において暴を働きて關東之様に者參り申間敷只今の處にては會津の一手を以可打破與相考居申候近方の諸侯へ御召し相成候勢追々馳來越前侯も十日には御着京之賦に御座候由藤堂並尾張邊之人數は日々集來候間迺も長州より攻付候儀無覺東こと申迄も無之事に御座候去月二十九日には下の關邊に二艘之夷艦相見得候由慥に相知れ申候此儀は關東より先達て英夷横濱出帆之砌申遣相成候儀に御座候上海より長州人兩人を列來居候處右を乗せ幕役人乗込致出帆候由就而は此二艘の軍艦と長州表に於て不戰候處を見れば決して和を取り組候ものに相違無之砲發いたし候得ば直様横濱より數艘の軍艦を可差廻與申來居候和戰之處慥に相分不申如何之模様にて御座候哉一左右相

待居候儀に御座候个程無謀の攘夷論を唱居候而和を講候而は長州には天下之人望も相離れ可申彌戰に決し候而は追付襲來可致事にて内外差迫候事に御座候此旨當地之形勢荒々如此御座候恐々謹言

七月九日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】此書一橋慶喜の長藩處分を遷延する理由及び福原越後等を説得すべき朝命を辭退せし事情其他長藩の状況等を報じたるなり當時薩藩の進退は朝威の消長に至大の關係ありしを以て降盛藩論を制し自重して敢て動かざりしなり

木場傳内に贈る書 (元治元年七月九日)

楠公社御建立に付石類見合候様被申越候趣相達候宮城公子御下坂無間も事候間其節は兵庫邊迄差越賦にて扣居候處此度騒動紛れに失念いたし居始末不申越御斷申上候右石之儀は其許御藏御修補方に御仕ひ相成候而可宜迎も急に一社御取掛難相成事に御座候間差當の御用途に罷成御當然與吟味いたし太夫へ申出候處其通可取計旨御差圖有之候

付宜敷御取計可給候以上

七月九日

大島吉之助

木場傳内様

【按】楠公社建設用石材の處置方を通達したるなり楠公社建設の事は是年二月薩藩の建言により許可せられたるなり

大久保一藏に贈る書 (元治元年七月二十日)

先度より申上越置候長州之一條に付堂上方荷擔之御方々多く色々と議論紛々之事にて追て勅命等下り候處六ヶ敷殊に長州違勅之事に付ては罪狀明白の譯にて色々と手をつくし已に勅命下る一段と罷成候處もうは致方無之逆相起り候哉一昨晚より人數繰出し中立賣より攻登未明戰爭相始候處諸藩之御固打破公卿御門迄攻入候處此御方様一手を以て打破追退烏丸より一手押出し大砲を以て互に打合室町よりも一手繰出し攻打候處無程此御方様より砲隊並二組之人數を以て打挫火攻に及候處たまり兼更に退去候國司信濃益田右衛門介等之面々罷居たる由に御座候得共打洩したる事残念之至り御座候乍

然國司儀者旗昇具足等打捨逃去候に付ては首級同様之譯に御座候伏見之儀者福原越後
 主宰にて御座候處大垣之手勢を以て打破り候由に御座候今日は又々天龍寺へ攻懸候様
 御達相成御人數被差向候處不殘退散跡にて一人之生捕有之候計にて御座候處巢穴を破
 置賦にて火を懸燒崩申候山崎之方も皆崩立逃去候故今日之合戦は何事も無之引返し候
 事共にて御座候此度之薩勢之鋒は衆人耳目を驚し候事共にて大慶之儀に御座候備後様
 に者日の御門内圖書様には乾御門御固御出張相成殊勝なる御旗合にて難有事に御座候
 此旨急々申上候間島山方より細事御聞取可被下候後便委細可申上候恐々謹言

七月二十日

大島吉之助

大久保一藏様

追啓烏丸通之大砲攻合に長方より散彈をつるべて打込候處怪我人も段々有之長藏儀足
 に少々疵を受候得共決して御念遣之儀に者無御座候疵を蒙りながら少しもひるまず矢
 種の盡るまで打込候次第恐る計に御座候

尚々鳳輦を奉奪候謀計にて實に薩兵あらずんば危き次第にて御座候此度は御所へ向ひ

砲發いたし候に付ては天下之人望を失ひ候而已ならず大逆の罪を得其上異人と和議を
 結び旁是迄之詐謀一時に相顯れ天罰を蒙り候事共に御座候

【按】此書禁闕戦争の顛末を報じたるなり是より先長藩家老益田右衛門介國司信濃等兵を率ゐて京師に入る其勢
 甚だ熾なり堂上また之を庇護せんとする者多く爲に朝議一變せんとす時に一橋慶喜關東に於ける反對黨の反抗
 に依り長藩處分を逡巡し將に機を逸せんとす薩越土尾肥等の諸大藩乃ち朝廷に建言し速に處分を決すべきを以
 て是に於て朝議決し七月十八日勅して追討の令を發し諸軍の部署を定む同夜長人其他の急激黨は大變革を企
 圖せしが事成らず十九日拂曉遂に各所の兵を以て一時に京師に進入すより薩會越其他諸藩の兵討て之を却く
 此役隆盛薩軍の參謀として烏丸通方面に在り大に奮闘して足部に負傷す書中長藏は故子爵稅所爲の舊名なり

木場傳内に贈る書 (元治元年七月二十四日)

長藩藏屋敷之儀無難引拂候而賊之巢穴を取毀候由仕合之事に御座候北條と申ものも去
 る者と承居候處餘り拙き仕業一城を暗々と明渡候儀人臣之義を誤つものに御座候此度
 に付而は義死之者相少く一國之風推計られ候藏屋敷も破れ落武者連も一人か二人之事
 に可有之候間奈良原一隊は歸京いたし候様御通し可給候此旨荒々如此御座候以上

七月二十四日

大島吉之助

木場傳内殿

追而先度より申越相成居候御米品々御差登相成候様御取計可給候大津米御買入之儀も段々故障有之纒計に而出来兼殊に此度の災火に付及拂底候間御留守居方よりも可申越賦ながら此段も申越候

【按】七月十九日長藩兵京師に大敗するや薩兵は其一部を以て大阪に追撃せしが長人已に其藏屋敷を撤しました影を留めずよりて隆盛奈原喜左衛門の率ゐる一隊を歸京せしむべき旨を通じたるなり

小松帶刀と連名にて中根鞞負酒井十之丞に贈

る書 (元治元年七月二十八日)

爾來御疎情相過候得共酷敷秋暑無御厭御勤仕之筈奉恐賀候陳ば去十九日御當地大變之始末疾く御聞取相成候半九門内之戰爭未曾有之形勢殊に砲彈を以玉座を奉驚候事共可惡之甚敷者に御座候其節に臨ては朝廷の御危き事何共難申盡畢竟彼等之底意相探候へば御所中を騒がし其紛れに乘じ終鳳輦を西に促奉之奸謀と相見へ不容易企絶言語候次第に御座候就ては尊藩堺町御門御固之御人數天晴之御忠戰各藩之耳目を驚かし候事共

天下之爲御祝詞申上候右等之反謀相巧候付ては本國追討之勅命相發不日御征討之場に相成候處老公様には御所勞のやに傳承焦心苦慮此事に御座候乍然非常之節は禁關御守護之尊命も被爲蒙たる御事に御座候得者朝廷之御威權被爲振候之堺に至り御盡力不被成下候ては不相濟場合と奉存候勿論天下人心之希望する處弊藩に於ては尙更之事にて一向御上京之處奉懇願居候事に御座候御國費之儀は深く御察申上居候事ながら人心之居合且朝威不相立との時機に於ては深く心痛致居候間追討之處迄御向ひ不被遊共急に御上京被遊朝威を御援助被成下候儀小生等之赤心に付直様罷出奉願度御座候へ共繁忙に任せ不得止事海江田武次を以右等之事件奉願候間細大御聞取被下小生等至誠之眞情宜敷御汲取被下御盡力被成下度偏奉合掌候恐惶謹言

七月二十八日

大島吉之助
小松帶刀

中根鞞負殿
酒井十之丞殿

【按】七月二十三日勅して長藩征討の命を下すよりて幕府は諸藩に出兵を命じ征長總督を一橋慶喜に副將を松平

慶永に命ぜんとし慶永の出京を促す薩藩また幕府の内訌に依り海江田信義を越前に使す薩藩乃ち小松清廉と連署して越前の家老中根等に慶永の上京を促したるなり書中老公様とあるは慶永を指す

大久保一藏に贈る書 (元治元年八月朔日)

御兩殿様益御機嫌能遊御座恐悦之御儀奉存候次に貴兄御同慶之筈と奉恐賀候隨而小第無異儀相勤居申候間乍憚御放念可被下候陳は追々退散之賊黨探索方有之堂上之家内迎も探索致候様にとの儀にて洛之中外共に大穿鑿に御座候段々と捕候者も有之今當分は先づ靜謐之姿に御座候去る二十四日には兵庫表へ人數操出候様御達有之諸郷四組御城下一組被差出矢張守衛中に御座候へ共迎も大舉之氣力は有之間敷との評判に御座候戰爭相濟候と直様加治木之竹内半右衛門岩崎仙吉の兩人を長國へ探索に差出し吉川其外末家之面々内情如何候や萩表の人氣何様に候や若し吉川等之面々異論之向も候はゞ委敷論説いたし本家へ相離れ候策を用ひ降表にても早く奉り候はゞ本領安堵可致事に候間其邊之處深く相探り周旋いたし候様細々相達差出候儀に御座候吉川等之者相離れ

候處肝要之策と相考申候獨立之勢相成候はゞ餘程攻め安く二三之末家一つにかたまり候ては中々六ヶ敷分にも有之事と相考候儀に御座候此度之征長は總督一橋副將春嶽公と申論決之由に御座候就ては幕より御監察御使者にて越國へ被差遣早々御上京を促し會よりも使者差遣候間此御方様よりも御使者御遣しに相成候様分て相談之向に有之候に付細細書面相認中根雪江へ向海江田被遣候事に御座候もふは御上京相成可申早々征討無之候ては如何之奸謀も難計候付速に御征討之處相責候儀に御座候○三日後には暴論の堂上方頭立候分は出仕御止に相成宮様方にも御所へ每晚御泊にて御座候へ共是以御ひけに相成申候乍然九門内之御固は今以騒々敷御座候○天龍寺において長人圍置候米五百俵計有之候付京都市中燒失之者共甚困窮いたし居候に付都て施行に出候處餘程難有がり候向に御座候當分は因循之名も一戰限にて洗流候鹽梅にて氣味能事に御座候○戰功或分取等は伊地知正治取調中御座候處兵庫へ差越陣場等相定め近日罷歸賦に御座候間追而跡より表通之御問越に相成可申儀に御座候左様御納得可被下候○兵庫にては蒸汽船を以て海上之應援に備一艘は繫居候處御乗せ付之大砲も七百目杯之筒にて間

に合兼候品も有之候由申來候間是非船臺筒御乗せ付相成候處有御座度いづれ六封度以上之筒にて無之候ては用に立兼候由に御座候以來之處御吟味可被下候○長崎にて異人之軍艦借入之手段は出來申間敷哉二艘位も相調候へば攻破候場には餘程可宜事に奉存候何分御勘考可被下候爰許においても幕人ともへも申入候手段も御座候○兩藩(四州備後)長州へ應援之儀もいまの所にては出來兼候向に御座候因は至極膽を寒し居候由備は前以より些にげ心地にて有之候由に御座候加州も組し居候處十九日砲聲とともに國元へ逃下不届之所業にて御座候只今加州人數市中杯にて長人之探索者なりと町家でさへ大笑と相成居申候○攻口攻懸り日限等之儀は越候御上京之上かと相考申候早速相發可申儀と御扣被成居候處些延引相成候付今日飛脚被差立候間荒々形行申上候日限相分り候はゞ直様蒸汽船御差立相成賦にて幕船御借入相成居申候胡蝶丸之儀は江戸表大砲積下り方に被差遣候今に歸坂不致何方へ相滞居候や不相分候○尹宮様之處長人等忌み居候姿に相見得此機會に不振直候ては益御はゞかいかも到來可致もうは安心と之思召に罷成候ては尙更御癖も出來候半かと吟味仕太夫同伴にて得と申上込伊丹被召仕候様絶て御

願申上周旋中に御座候間左様御心得可被下候若宮様に御失徳有之候へば直様其責は此御方様に相掛事にて及ぶ限りは盡し可申事に御座候間此度は至極に責掛可申含居申候勝て甲之緒を締候場合と相考居申候恐惶謹言

八月朔日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】禁関戦争後の一般状況を報じたるなり戦後竹内等を長藩に派し藩内の形勢を探りつとめて吉川等の末藩を宗藩より分離せしめんとしたる隆盛が早くも自己の意見たる長人をして長藩を處分せしむるの策を實行せんとしたるかを知るべし

木場傳内に贈る書 (元治元年八月八日)

宮之城公子來る十三日御發足之筋相決申候間御借入之幕船仕廻方等之義共御談し置被下度天保山沖え相廻候はゞ積荷等之都合も可宜哉六ヶ敷模様候はゞ兵庫に而も格別混雜致間敷候へ共其邊之都合前以能相調候様御計可被下候いづれ川御下りに付而は御船差登せ不相成候而は不濟義に御座候處當分は餘程淺瀬に有之哉にも承居候付其等之

處深く御吟味被成下候而御召船通行不相成候はゞ町屋形船に而も相調候様御取計被下候而早々御申越可被下候○長州表へ異船差向可申とて横濱去月廿九日出帆いたし候由申來候就而は見掛次第異船へ幕人乗組長州へ差向候儀は御差止相成候義に相運小監察被差出候由に御座候就而は大坂邊へ異船相見得候義も不被計候付右等之節は早々御申越被下度態々前廣申越置候此段御問合申遣候以上

八月八日

大島吉之助

木場傳内殿

追而濱村儀は是非此度は御伺通相運候筋に御決相成先日御差止之處迄御申越相成居候御運新番格迄被仰下置候者に候へば御國元へ一往御伺不相成候而は不濟事故早々御下坂相成居候付追而御返答相分候半左様御納得可被下候○先日御頼申上候朱粉御遣合御座候はゞ早々御世話被成下度御頼申上候

(按)此書島津久治歸國につき乗船の準備を打合せたるなり長州表へ異船云々は月五日既に英佛米蘭四國軍艦下關を砲撃し交戦三日に亘り長藩利あらず八日遂に和を講ず此書八日附なるも未だ當日迄戰報京師に至らざりしものならん

大久保一藏に贈る書 (元治元年八月十七日)

御兩殿様益々御機嫌能被遊御座恐悅御儀奉存候陳ば公子御下坂に付御供に而參居候處森岡等之人々着坂相成御問合之趣一々承知いたし候御褒賞之儀に付而は引續戰爭相成模様にて一戰之處は直様被賞置候様之事に不運候而は兵氣も不相振御名代之兵權丈は非常之節は不相付候而は一體之御指揮もおくれ候事而已罷成へく候付戰功丈は當座被相賞軍威相立候様御所置爲相成事に御座候處些早まり候譯に到り候半歟細事は太夫より御直に御聞届可被下候○兩公子御褒美に付ては先年龍伯公御ふたりの御舍弟様へ御褒美之御例に被準候而は何様可有御座哉其邊之處太夫御相談可有御座候半相略申候○兵庫表出張之人數故障申立御免相成候處段々御申立相成引拂候付至て大幸に御座候異船も必攝海へ乘廻候半との趣に候へば若哉變を生候儀到來いたし候へば兵庫眞一番に破れ候場所柄其上兵庫へ乘廻異人事を破らず迤も横行を見て居るさへも又因循之名を蒙り候半唯今に而者因循之名はどこかに飛び去たる事に御座候間餘計に念を遣候事に

御座候○御國元よりは筑前之内へ御出軍之由就ては爰許よりも救應之一隊は被差出度ものにて段々手筈仕居候此度之戰迄目覺しき軍をいたし候はゞ天下之人も如何程か恐れを成し候半か軍威四方に輝き候事と奉存候○中將様御上京之儀いまだ御早く御座候半如何様とも見留之付候上ならでは御宜敷有御座間敷と奉存候將軍も此度は上洛之筋にも有之攝海異人之參る説も有之事にて段々大難差迫候儀に御座候間太夫之處此度は何卒早々御歸京相成候處平に御願申上候○長州之儀異人より攻禿候而は人心之居合誠に六ヶ敷相成可申後難今より世話を焼候事に御座候定て幕吏之策を以異人を募り候事歟與被相考申候又是より暴客盛に起立候半始終世運をちゞめ候策計に御座候右之通荒荒奉得御意候細事太夫より御聞取可被下候恐惶謹言

八月十七日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】隆盛八月十三日鳥津久治の歸國を送りて大阪に下る此書大阪より大久保に贈り功賞につき意見を述べ且つ兵庫警衛兵の引拂及び救應隊の出陣等を報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (元治元年九月八日)

尙々一橋幕府之嫌疑を避御戴物も總督より被相渡候筋に申上候半歟誠に拙策を行ひ申候

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳ば長州征討之儀遅引之事残念無申計候尾張老公へ關東より御目付兩人被差遣金之采配御戴相成是非總督を御受相成候様申參候由に御座候迎も御受相成丈けに無之模様被伺申候尾州は士民一向之徒東本願寺焼失に付徒黨を組混雜之向に被相聞申候會藩故に焼亡いたし候故佛敵と相唱是非通行は不被致との説も有之由に御座候西本願寺を焼拂候様戰爭涯も山階宮様より御沙汰有之候へ共決して不取合尤西は長州へ組し居落人も相圍居候由に相聞へ候付會へ相通探索いたし候様申上置候處又々此頃は乃見織衛等潜伏之由相聞得是非此御方より火を掛候様宮様より御達有之候得共今更ヶ様之事を謀候ては佛敵と唱られ却て手之延兼候基に御座候間此儀は不宜段御斷申上置候段々壯士之者焼き度申立候へ共引留置候處尾張之

説共承りようこそ火攻を取止候と相考居申候後難之處を打返し勘考仕候事共に御座候一時之愉快を欲し候ては跡之難儀に被取返候事に御座候間折角念を入れ候事共に御座候○天朝より之御褒賞最初は御所へ御家老御呼出有之御品等直様御渡相成候賦に御座候處一橋より是非總督へ御渡被下右より諸藩へは可相渡との段申上俄に其御運に相成候由實に朝廷に御人無之諸藩之人氣を被失候事共可歎事共に御座候委細表通御問越可有之森岡才領にて被差下申候○小蝶丸之儀攻懸等之儀總督之指揮を受慥に相定候上差下賦に御座候處何分延引之譯に相成候付一遍は足輕兩人被差立候處淀川口にて難船に逢ひ御用封等都て流失相成當分は飛脚等も遲着勝之事に御座候小蝶丸差下候間翔鳳丸にても小蝶丸にても御差返相成儀は相調間敷哉いづれ太夫御歸京に付ては決して蒸汽船よりと相考候へ共爲念御願申上候いづれ軍勢差出候に付ては蒸汽船より被差出筈に御座候得共引船等之御手数數相成候はゞ隨分御都合出來させられ候半歟幕船借入も當分にては出來申間敷海軍方之船迄も取揚候由に御座候間相成儀に御座候はゞ一艘は御遣に相成候様御働可被下候此度も守衛方人數流行病にて多人數參居渴氣又は疫病相流行

死亡多く看々難儀之者は不差返候て不相濟譯にて守衛方は専戰場を主といたし病難に差迫候者は御愛士之廉も不相立候ては不被爲濟との譯にて幸御國船參候付御雇人にて引船之都合にいたし小蝶丸へ爲引難澁申立候分は御下し相成候間左様御汲取可被下候攝海へ異船相見得候間早々木脇方へ手を着させ候處別紙之通申出候付異情探索不致候ては不相濟外國奉行談判に依事柄も相分候儀に候へは速に手を不着候ては間後れ相成攝海へ參候儀も有之候間有馬新助江戸より參居候處東郷罷下候付跡へ被殘置候へは高山等被差越候付少しも差支無之候故海江田武次差添横濱探索は勿論幕情承合候様被差遣候明日出立と申場合之處内府様より會肥後久留米等申談將軍上洛を早々急候様周旋可致旨御達御座候付明日人を關東へ差下賦に御座候間其邊之處申付可差遣候間外藩へは内府公より御達相成候様御願申上置當月朔日爰許出立致申候○南部彌八郎等着いたし承候處四國灘にて難船に逢餘程難儀いたし乍漸助來候由に御座候夫故遲着相成候付御問合之趣承知仕南部へ相尋候處年賦之處も無口能相談出來そな模様候得共異人は餘程利にかしこいもの故中々大體之事にては受合六ヶ敷可有御座候付若相談出來兼

候はゞ別に策を承來候哉相尋候得共左様之儀は一圓無之車船之儀は誠に當時態要用之
 第一に候得は御買入不相調候ては屹度不相濟候付六ヶ年賦にいたし年々御産物之品を
 以琉地に於て可相償との約束を内々にて取究候はゞ異人之好む處いづれ破れ立候はゞ
 迎も可救道も無之候付早く此方より先をいたし候て爰へ來れと呼掛候はゞ跡々之處も
 いたし安く幕府之嫌疑は可相掛事ながらも隨分しのぎ方も有之候間若談判不相調候は
 ば右之一條を申込候様相達置候間宜敷御勘考可被下候又手付金壹萬兩にては承知不致
 候はゞ平運丸を差遣置是にて質物相成ものにては無之哉其邊之處までは相働候様相達
 置候付宜敷御汲取可被下候琉地に産物を以て軍艦之代品引結相調候はゞ不及ながら私
 被差遣候はゞ隨分弊害のなき様に取組可致賦にて振切て相達候付宜敷御汲取可被下候
 拾七萬兩之現金を被差遣候ては迎も補ふ道も無御座候付是非品を以取組候手段に無之
 候ては不相濟儀に御座候恐惶謹言

九月八日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】始め征長の朝命下るや京師に於ては一橋慶喜を征長總督と爲すの議ありしが關東に於て幕閣等之に反對し
 徳川慶勝をして總督たらしむ然るに慶勝辭して之を受けず幕府よりて監察を遣り金の采配を與へて之を從通し
 たるなり西本願寺焼拂一件山階宮より屢々從通されしを隆盛不可として應ぜざりしなり御褒賞云々朝廷禁闘戰
 争に参加せし諸藩に褒賞を下賜せられしにつき隆盛朝廷の斯の如き事まで一橋慶喜に動かさるゝを憤慨したる
 なり小蝶丸云々京師の状況を述べて廻遣方を要求したるなり攝海へ異船云々横濱外人の動靜探索及將軍の上洛
 を促す爲め海江田信義等を江戸に使せしを云ふ南部彌八郎云々隆盛軍艦の購入を大に必要とせしが當時藩の財
 政困難なりしを以て琉球産物を年賦にて代償するの策を南部に授けたるなり

勝安房に贈る書 (元治元年九月十一日)

彌御安康被成御座珍重奉存候然者分而御談合申上度儀有之今朝下阪仕候御場合に依何
 れ之御旅亭に參上仕候而宜候哉刻限何比御手透之譯何卒乍御面倒御示諭被成下度奉願
 候此旨奉得貴意候以上

九月十一日

薩藩 大島吉之助

勝安房様

【按】隆盛幕府征長の事を遷延するを憂ひ越藩士青山貞等と大坂に下り勝を訪問して將軍上洛の周旋を依頼せん
 とし此書を勝に贈り會見を申込みたるなり

大久保一藏に贈る書 (元治元年九月十五日)

書翰

八月二日發之飛脚相達候處貴兄之御書面不相見得煩居方々爲相尋候處一向不相見得翌朝長藏より承候處御賢母様御養生不被爲叶段驚入候仕合に御座候追々承候處御難症之由は承居候へ共例之御持病強き方にて肌持も罷成候付追日御快方と相考居候處在外之次第嘸御愁傷之筈と想像やる方なき事共に御座候毎年之御不幸打續御悲心之處私さへ難堪事に御座候貴兄御旅中共にて無御座候かよかつたと是のみ申居候位に御座候一箱御悔爲可申上進上仕候付御靈前へ御供被下度奉合掌候頓首

九月十五日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】此書大久保の母死去の報に接し差出したる悔狀なり肌持は氣候の方言

大久保一藏に贈る書 (元治元年九月十六日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座候由恐悅之御儀奉存候陳者御當地之形勢は可行候鹽梅更に無之越前侯去る六日御着京相成直様村田巳三郎等へ引合候處非常之備にて御出張相成候譯にても無之平日之御上京にて御座候得共何れ副將之命を御受被成候事故總督之

場を御勤可被成と之御事に御座候間是非征長之儀總督を不俟御出張相成候様戰者諸藩より可相勤候得者征討之御處置被成下迄に候間御願申上候様可致越藩よりは被仰立難き事と進言候得共振切兼候模様被伺申候畢竟御國內之混雜も有之斷然之御策出來兼候事と奉存候然處越藩より勝安房殿へ相談致し幸關東へ下向之由に候間將軍上洛を盡力致し呉られ候處を兩藩より願入候ては如何可有之哉との趣直様同意いたし吉井と私下阪いたし越藩よりも兩人被差遣之直書を以て被差出候に付問掛候處幕府之内情も被打明候に付承候處誠に手之附様も無之形勢と罷成候事に御座候畢竟幕吏之處此度の一戰にて暴客恐縮いたし候もふは身の禍を免れ候心持にて太平無事之體と相成好威ほこり立候向と被相聞申候左候て幕吏も餘程老練いたし何方に權有之とは知れぬ様にいたし成し一同して持合居候姿に御座候其内にも諏訪因幡守と申者魁首と相聞へ申候色々正義を立込候得者御尤と同意致し何となしに正論之者を退候に付迎も盡力之道無之との譯に御座候然らば奸吏を遠け候策は無之哉と問掛候處一小人を退くるには譯もなき事ながら是を受繼もの無之つまり議論を立候者の倒るゝ外無之との事にて如何とも運

の付模様は無之事に御座候此上諸藩より力を盡し候儀は有之間敷哉と今一段間掛候處
是以て受續ものあればこそ行はれもいたし可申候得共薩摩より個様之議論有之候と役
人へ持出候へは直様薩摩より被欺候人と申成し落し付候様子に御座候諸藩より盡力い
たし候ても無益之事に相成との説にていたし方無之次第に御座候幸阿部閣老上阪之處
にて御座候に付爲人相尋候處餘程ほめられ何と歎計策を勝氏より被授候模様にも閣老
一昨日京着相成候勝氏も上京之筈に御座候間此機會を見合候事に御座候處私にも閣老
へ申入置候間篤と談判いたし候様昨夜書面を以て被申越候に付是非拜謁を願一問答い
たし可申合に御座候阿部其人に候はゞ諸藩より相助幕奸之四五輩は斷然勅命を以打落
し候策に無之候ては迎も埒明申間敷事と相考申候それ程之氣力も無之候はゞ必無策に
陥り候事に御座候決て口を閉可申儀と相考申候

一勝氏へ初て面會仕候處實に驚入候人物にて最初打叩賦にて差越候處頓と頭を下申候
どれ程智略有之やら知れぬ鹽梅に見受申候先英雄肌合之人にて佐久間より事の出來
候儀は一層も越候半學問と見識に於ては佐久間拔群之事に御座候得共現時に臨候ては

勝先生とひどくはれ申候攝海へ異人相廻候時之策を相尋候處如何にも明策御座候唯
今異人之情態に於ても幕吏を輕侮致居候幕吏之談判にては迎も難受いづれ此之節明賢
之諸侯四五人之御會盟に相成異艦を打破之兵力を以横濱並長崎兩港を開攝海之處筋
を立談判に相成屹と條約をも結候はゞ皇國之耻に不相成様成立異人は却條理に服し
此末天下之大政も相立國是相定候期も可有御座との議論にて實に感服之次第に御座
候彌左様之向に成立候はゞ明賢侯之御出揃迄は受合て異人は引留置との説に御座候
右に付ては今より個様之議論を立てては決て破に及可申又離間之策を用ひ候儀無疑
事に御座候に付攝海へ異人相廻候節初て此策を唱出急速に相決し候様不致候ては相
成申間敷一度此策を用ひ候上は何迄も共和政治をやり通不申候ては相濟申間敷候間
能能御勘考可被下候若此策御用無之候はゞ斷然と割據し色を顯はし國を富すの策に
不出候ては相濟申間敷儀と奉存候乍然、として申さば長征之處第一之譯に御座候間
折角促し立油斷は不致候間左様御納得可被下候昨朝は肥後藩着にて面會致申候處肥
薩之兩藩を以長征を相願ひ勅許を得て速に可打との議論有之候に付私方にては頓と

諸藩之受も不宜候に付肥後さへ御差はまり御座候はゞ肥後に因て如何様共可致其儀は直様御同意之段申入候處段々六ヶ敷故障言出候次第に御座候是迄之肥後之情態より相考候處餘りよふ過候間却不安心之事に御座候兩藩にて引受被申儀は連も六ヶ敷と申出候はゞ如何程激論を起候半早速に同意之段申出候處故障出來致し未だ本氣之者歟不相分候攝海異船處置之議論は本文勝之策同意之段に御座候御國元へも肥後より御使者も參候由如何之説にて御座候哉征長之事共烈敷申たる哉爲御知可被下候一御金操之一條實に難澁之御時節にて莫大之費用相重候付南部へ御取結も有之候間唯今蒸汽船を以砂糖並藥種煙草鯉節様之品替候ては何様御座候哉今月來月迄か絲之賣出にて餘程値も引下り候次第にて一箱に付百兩之違にも相成候に付御國元織屋の御用も年々三百貫目は御買下相成由御座候間爰許にて唯今買入之手段致居申候もふは嫌疑所之事に無御座候間振切て澤山買占兩度とせぬように大こと致度ものに御座候御内用金二萬兩は御座候付夫大けは如何にもして買入可申十萬兩計買占度ものに御座候へば現在私面を突出し商法をやり度ものと相考申候暴客之天誅を蒙るか又は幕

吏の刺客を蒙るか何かにしてもしれた敵に御座候間此儀は是非相企度折角手を付置申候間左様御得心可被下候御用金も來年砂糖代に右續間は何も見當無之由御座候間のるかそるかの仕事を致度相合居申候此旨荒々大略迄如此御座候恐々謹言

九月十六日

大島吉之助

大久保一藏様

別簡

今朝越藩堤五市郎參横濱より異船當月九日に出帆いたし攝海へ參談判可致幕吏へ應接いたし候得共一向取占候儀も無之との由にて餘程見限り候景氣と相聞得申候間もしくは明賢候御集會に相成皇國之御耻に不相成様屹旨致たる談判有御座度ものと評議も有之越藩肥後は悉く同論に御座候間阿部閣老又は一橋邊之模様不相分候付折角下こしらへに御座候間左様御得心可被下候異人之手を離れ候而は幕好も手段盡果必天下之大政相立可申此一機會大事の場合に御座候追々模様次第には急飛を以可申上候得共何分早目蒸汽船一艘は御遣相成候様御周旋可被成下候此旨荒増如此御座候恐惶謹言

九月十六日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】勝及肥後藩士と會見の始末を報じたるなり隆盛十一日吉井友實青山貞と共に勝を訪問するや幕府の内情を知るを得大に勝の人物識見に推服し殊に其開港意見には非常に感動し直に勝の意見を實行せんとしたるなり之に反し肥後藩士との會見には從來の同藩の態度に照し其意見を信用せざりしなり御金繰云々藩の財政窮乏を憂慮し自ら商法を引受けんとしたるなり

大久保一藏に贈る書

(元治元年九月十九日)

先便申上越置候處無難先に立廻候向にて差迫たる處より相掛賦に申上置候處急務之筋も、いたし候鹽梅にて大きに大慶之事に御座候阿部豊後守様え越候御會に相成家老本田修理酒井十之亟も同席に相列當時勢差迫候譯より段々説込候處餘程相談相くるまり是迄之閣老にては無之との事何篇打明之相談に及候由に御座候然る處夷船之一條も急々攝海え相廻候向にても無之いづれ阿部閣老關東元罷歸候上ならでは出掛候向に無之候間いづれ成長征直様不相連候ては不被爲濟との議論にて尾張老候來る廿日御京着之御模様と被相伺申候此度之處總督は御受不被爲出來御上京丈は被成との趣に御座候得共爰許にて押て御受之都合にいたし速に長征を相初候見込と相聞れ候に付此度は相

調譯歟與相樂居候事に御座候夫に付今日より藝州へ伊東萬次郎差遣し料米之手當且陣取等手當爲致候事に御座候萩表え海路より御國兵政掛候様御達相成候得共第一難海之遠干瀉と承居候間一艘之軍艦にて直様打破候事は難澁之譯には候得共懸口等之儀前以色々申立候ては薩兵の慮を取候杯之説直様相起候儀に御座候間態と難澁不申立候て罷在申候若幕府より問掛候はゞ此方之人數を以て陸路より萩表之方に進發いたし御國兵乗上げ候様可致段申切合に御座候間左様御含可被下候自然着到之場所も不相分候得共いづれ御人數揃へ等之御手数も可致、に御座候間筑前若松邊之陣取も土師吉兵衛爲致候由被相聞候付其御手筈可被下候左候て此方之御人數を以て藝州へ踏込掛場之處見物を以御陣所へ御注進可仕候付其御賦を以御都合可被成候右に付攻掛日限相分候はば直様私共には藝州え飛込吉川徳山邊之處引離し候策を盡申度内輪餘程混雜之様子に御座候間暴人之處置を長人に付けさせ候道も可有御座候かと相考居申候吉川又は末家等悉く死地に追込候ては打破るながらも大に怪我等いたす事に御座候間兵力を以相迫候て右等之策を用ひ候はゞ十に五六は背立候半其處を以突然と乗込候はゞ容易に攻落

し可申歟と相考居候に付彌征討之御決着に相成候はゞ速に藝州へ飛入可申候間左様御得心可被下候

一大樹公も彌上洛之模様には御座候陸地より出軍にて大津より直様伏見へ出下坂と相成長征を督し攻滅し候後に凱歌を奏して入京之賦に御座候由當月廿日方發足之筈と申事に御座候得共當月中には打立出來候半夫より内に尾老公御上京相成候はゞ速に長征可相發との含に御座候と被相聞申候

一此方より御人數先詰一陣丈被差出惣物主之處高橋縫殿へ被仰付可然段小松太夫御出帆前承知仕居候間其御都合相成候様可仕候間是又御含可被下候

一別冊二部越藩より買入寫取差上申候越藩一人異軍艦へ乗付京へ差遣候由にて戰爭之次第日記にいたしたる由に御座候是程手之廻り候處誠に感心のものに御座候此儀は秘置吳候様承申候外一冊は江戸表へ聞合候て申遣候向と相見得申候

一軍目付三人御國攻懸口之人達と被相聞昨日御用談申來御留守居罷出候處誠につまらぬもの共に軍致さる船へ乗せ吳候と之事にて歎きも腹立も出來ぬ次第に御座候

笑ふより外に致方は無之候

右之通江戸より御使到來飛脚差立候間形行申上候彌長州征討相決御日限相分り候はゞ直様急飛を以申上候様可仕候恐々謹言

九月十九日

大島吉之助

大久保一藏様

【按】當時外艦攝海に來らんとすの説あるを以て隆盛勝安房の意見たる明賢諸侯の集會を計らんと策する所ありしが其後上洛せし關老阿部正外の談を聞き急に攝海に來らざるを知り速に征長の師を起し以て自己の意見を長入して長藩を處知せしめんとすを實行せんとしたるなり

大久保一藏に贈る書 (元治元年十月八日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳者去る廿九日飛脚被差立候賦に御座候處帶刀様廿八日御着坂相成候段相分候に付暫く御見合相成居候處長征之儀もそろそろ御運び相付候模様成立尾老候總督御受も相調一昨日御達相成候儀は表通御間越相成候事と奉存候間文略仕候此以前尾州之田宮並長谷川惣藏與申者へ引合ひ色々攻立

候處最初之程は將軍進發之上差圖を得て可相發との向に御座候處追々關東よりも將軍進發を不待可相發旨申來候由にて越藩よりも嚴重責付候處少しは腹も居り候て諸藩杯の情實も相分り天下又動靜も吞込み相成候鹽梅に成立何れ各藩より力を添へ尾藩を助け長征の急務を辨し可申旨肥後越前と申談し此儀を差向急ぎ立候儀に御座候其内には段々異論緩急之論も相起候得共長征急務第一に相決し一向にせり立候儀に御座候就ては萩口懸り場之一條に付ては爰許にて吟味仕候處先便申上越候通り掛口替之儀を申立候ては臆病之様に申觸し俗説發り立候儀別條なき事にて御當地之戰爭に出來候間少しはふでけかせ候心組にと態々幕府において見立候事歟與相考へ候儀に御座候間攻懸之舉動に依り如何にも可相變との趣意に御座候間總督にも萩之儀者地理御案内も被爲在候半遠干瀉且北受之難海之段承及居候間決して難澁かる譯にて無御座候得共難場と知りながら敵之意中に陥り候ては誠に拙き業に御座候に付御當地へ罷在候人數半分丈は國兵之救應として藝州地に懸り陸地より差出度候間聞置吳候様申置候勿論御達替に相成候節直様閣老へも相通置候旨相斷置候間帶刀様御國許にて御論決相成居候懸り場之

儀申立之一條は御見合相成藝州地へ乗込敵之舉動に依り御懸り口之儀は若松之御本陣へ御注進申上候様可仕候間左様御汲取可被下候初ての戰に出來候處此長攻においても餘程心を用ひ候場合に於て又此一戰に仕損じ候ては初戰之勝もむだに相成り天下之膽を挫き候儀も出來不申候に付至極念を入れ候事に御座候纒之事なりとも勢を張ると衰との場合も御座候に付久留米其外之藩々は懸り口故障申立被相替候様申出候由に御座候得共此儀は勢にも相拘る譯に御座候間御見合相成候方御宜かるべく奉存候自然機に應じ懸り口は不相變候ては濟まじくとの總督之存慮に被相窺申候間仕合之事に御座候大坂にて征長之軍議は不宜人心にきざはり致候間御當地にて決議相成大坂は一二泊にて繰出候様越藩より頻りに議論相立候間定て是丈は其通り可相成與相考候處大坂に於て軍議と御達相成申候畢竟尾藩においては幕府より之責を塞ぎ候迄之趣意に相見得申候乍然ヶ程やり立候故是非長征を不仕掛候てはもふは不相濟勢に成立候間少しは延も致せ彌相調候儀は別條もなき事と奉存候大坂にて懸り口等之談判に相成候者萩與不究機變に依り攻掛候様申立べく候間右様御含可被下候○長州之動靜追々承候處吉川至極正

論を立一應は六ヶ敷場合も御座候處近來は一同吉川之論に歸し官兵へ向ひ戦を致し候向にては無之國境迄政服にて出張致し號泣哀訴可致との存慮に相聞得殊に暴激者は悉く幽閉申付候て三人之家老は萩において牢込に相成嚴重之番兵に相成候由徳山にては色々不堅固之廉も爲有之由にて右等之次第與相成候付墓々敷戦も有之間敷乍然其邊之處は御處置振に依る譯與相考申候若し何も御採用無之如何に降を乞ひ候とも殺し盡すと申す譯に成立候而は決して暗々と首を差出し中間敷又死兵と相成戦争致し急に攻禿しは六ヶ敷かるべく相考申候先便にも申上候通私には藝州へ早く踏入吉川邊之處を説き立候賦に申上置候處筑前藩喜多岡某吉川へ面談致し候而上京仕吉川情實具に申述藤井杯へ相談も有之候由にて高崎兵部を右人へ差添差遣候はゞ餘程可宜與之譯承候間早速望に任せ被差出候間左様御含可被下候是非長人を以て長人を所置致候様爲致度ものに御座候いつれ成り兵を以て相迫り候處にて降を免すとも征伐之御扱は不相濟儀に御座候間夫等之處に纔五六萬石にて國替與不相成候ては國を消候迄にては往先御國之御煩ひも出來候半與相考居申候元就之功勞を思召有之社稷は不相立候共ひといに逢せ

すては相濟間敷苦戦をいたし候はゞ論は無之事に御座候先度も申上越候通十餘人の擒ものは兼て禮を篤くいたし御養ひ置被下候間打入之日に至り丁寧に説得し放ちやる賦に相決置候是又左様御含み被下宜敷御取成奉願候恐惶謹言

十月八日

西郷吉之助

大久保一藏様

別簡

水府之大混雜沙汰之限りに御座候有志連も三つに相分れ俗黨激黨與相唱候由一方は奸黨にて幾度も合戦に及候由に御座候然處宍戸候爲御目代水戸表へ被差越候得共奸黨之者城中へ不相入是又合戦いたし既に一城踏破る勢に成立候處田沼侯へ加勢を乞ひ幕府之人數を繰込候に付無據野州邊之一城に陣を居へ宍戸侯は唯安然として傍觀いたし被居候由に御座候水戸侯は奸黨を御用ひ相成幕府へ阿從いたし此所大破に及候事と被相聞申候幕府においては此機會に乘し水戸を打て崩すの策に相見得兩虎相争はせ候謀與相聞申候迎も水戸は今通にては倒れ候外無之様に御座候筑波之黨も別に相分れ候様子

にて天狗連か三派に分れ候向に御座候然れとも奸幕よりは三黨ともに相惡み候姿に相聞得申候實に歎敷次第に成立申候○異人へ先月七日江戸に於て談判之趣意去る廿四五日方阿部閣老より朝廷へ被申立候由右者長州にて朝幕之命を蒙り異船へ砲發之次第にて決て暴發之譯に無之趣異人へ申述其段を押し張り候向にて是非此度は攝海へ乘廻り帝王與條約不成候ては人心之折合も不宜向に被相聞候間左様に可致當時諸色も高直之處を以て相考候處鎖港之様子與被案候間是を鎖候存慮に可有之哉得與承度與之事に御座候由然らば開港可致與速に返答も難致又鎖港可致候朝命を以て被仰出候儀とも不被申實に込入候次第に御座候段被申上候處關白様より御返詞之趣は大樹自ら鎖港之御受にも相成候譯柄に候得者只今開港可致との御伺も難出來次第に候得者朝廷よりも御即答相成事件にても無之唯御咄いたし候事哉與被仰候處卒度御咄申上候段申上置夫形歸參仕候て一橋へ相詫び迎も朝廷之御受不宜十分之處難申上罷歸候に付幕府に於て都合能取計候様に與之朝命相下り候處盡力致し呉れ候様阿閣より承候段一橋より朝廷へ又又申立候由に御座候處關白様より御返詞之譯は何分にも重大之事件に候得者速に御返

詞被遊譯にも無之いづれ長征を速に爲相運將軍上洛之上屹度御達可有之唯今決して御達は無之段押切りての御沙汰に御座候由然處最早異人は談判之日より三十日之内返答可致約定に御座候處七月よりは期限も可相過候に付是非此度は何與か被仰出度又々相願候由然共期限を定め候儀は朝廷より之御達にても幕府に於て勝手に取究め候事に候へは其邊之處に御構被遊譯更に無之與之事に御座候由乍然攝海へは當年中には相廻り可申事與奉存候乍然幕府に於ても吟味有之攝海へ差廻朝廷より異人御處置被爲付候はば幕府は其節限りにて禿れ可申との評議も御座候て大心配之筋と相見得申候右阿閣より言上之事件は内府公より承知仕候事に御座候○岩下佐次右衛門早打にて罷昇り申立之趣は將軍上洛之儀は得と大久保越中守與相談候處唯今にては閣老邊幕役之者可遮人も無之候得共唯因循にて急速不相運候に付閣老邊へ相迫候様可致與申居候由就ては天璋院様より一口御出し被成候得者閣老邊にても遮る事も不出來何邊行れ候勢にて候間此御方へ盡力可致與之事御座候處御國元へ伺越候而者急速之間に逢ひ兼候に付近衛様へ申上御内書御遣し相成候而備後様よりも御直書被遣候はば其御都合も可宜與之存慮

に御座候故直様内府公へ御直書御渡相成内府公より備後様へも御達し相成候處を以て御書被進候筋に内府公へも申上其運不相成候ては中将様思召之處も如何與御案し可遊さる御疑之廉も可有御座與之譯にてかく迄は相盡し候に付左様御汲取可被下候右等可申上ため飛脚差立候に付宜敷御取成可被下候恐々謹言

十月八日

西郷吉之助

大久保一藏様

別簡

奈良原氏上京之事に付歸國之一條に付ては私には御受仕儀何とも難申上次第にて恐入候譯に御座候間衆議に任せ居候處段々相考候へば攝海異船之譯も御座候付得與形勢情實之次第一往は罷下候て言上仕候方宜敷は有御座間敷哉與愚考仕候付其段も申上候處此儀第一朝廷え危急に候間帶刀様より委曲申上越相成候處來月中は見合候様可致段承知仕候間左様思召被下候而宜敷御取成可被下候決て私之物好にては無御座候付其邊は深く御汲取可被下候貴兄御獨之御心配是又苦察仕居候何分にも帶刀様より細事は申越

相成事與存不能詳悉候間左様御汲取可被下候頓首

十月八日

吉之助

一藏様

追啓上戰爭に付御威狀並御刀等拜領被仰付其上御役替をも蒙仰何とも恐入次第に御座候

【按】此書本文は徳川慶勝の總督就任、攻口の變更事情及吉川等説得の事を報じ別簡は水戸藩の近狀、外交問題及近衛家島津珍彦等將軍の上洛を促せし事情等を報じ最後の別簡は歸國の事につき述べたるなり

大久保一藏に贈る書 (元治元年十月十二日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悦御儀奉存候陳者長州御征討之期限御發し相成奈良原被差立候時機に罷成爲天下安堵仕候此度之處は迎も可戰勢にも無之模様與相見得候へども關東に於て末家又は吉川等之者悉く官位並に屋敷御取揚相成死地に追はめ候御所置誠に拙策に出候事に御座候第一長州に於ては吉川等之者直進等之手段も個様之節に勢を分候家康公之趣意にて之れに被背一途に攻込候儀は實に馬鹿等敷次第に御座候上

攻懸候所にて死守するものにおひては寄手大勢とは乍申易く攻破候場合にも參兼候半
 歟乍然攻口に乘掛候ても離散之道も可有之如何にもして長人を以長人を所置いたし度
 ものに御座候可戰日に到りては尤可勤軍に候得者至極差はまり居候次第に御座候若此
 一戰に失し候而者前之戰は無に成り御國威も奮兼候譯に御座候間誠に世話を焼居候事
 に御座候萩口懸場之儀御吟味も爲有之由に御座候得共閣老又は總督方も救應之譯を申
 立置候外藩には悉く故障申立候由にて立花丈は懸口を振替候得共餘は御免にも不相成
 由に御座候就ては最初より難澁を申立候はど何とか名を付難説起立候儀計難候に付態
 と差控候儀に御座候總督に得と及示談候處臨機之御掛場如何にも御尤と之事に御座候
 間蘆屋之御本陣へ救應之陸軍より御注進可申上候様可仕候間左様御含可被下候越前副
 將之儀は九州に御渡之筋に相成候由尙更懸口等之談判も致安御座候半か一二艘之蒸汽
 船を萩表之遠方へ浮べ攻寄之勢を見せ掛十餘里下之關方へ能き船付之場所等も有之全
 く海防之備も無之由に御座候間是より陸戰を掛て萩口掛り手段も可有御座かと存奉候
 いづれ成敵之舉動に依り御策無之候ては相濟間敷儀と相考居申候細事幸五郎より委敷

可申上候間文略仕候○私罷下候一條に付ては段々御吟味も六ヶ敷成立候向にて最初よ
 り衆議に従ひ居候如何様共進退可仕存慮に御座候處此度は長州へ被差遣夫より直に御
 國元之様可罷下段承知仕候間宜敷御取成奉願候去る十五日より總督下坂之段も御達相
 成候付十四日より私には大坂之様先立て罷下賦に御座候何分長州之御所置長延候ては
 御國費にも相係る事に御座候間とふか早く落着相成候處願居候儀に御座候精々相働可
 申候間左様御得心可被下候恐惶謹言

十月十二日

西郷吉之助

大久保 一 藏 様

【按】長州征討の形行を報じ且つ攻口につき意見を述べたるなり

島津久濤に贈る書 (元治元年十月二十三日)

此節長州征伐に付來月十八日攻入被仰出候付ては其内彼地舉動相究候上何分御注進
 可致候間左様御含置可給御軍役奉行もへ御達置可賜候此段申上候以上

十月十三日

西郷吉之助

島津主殿殿

【按】長州攻撃の期日を薩軍の先鋒總督島津主殿久壽に報じたるなり

小松帶刀に贈る書（元治元年十月二十五日）

尾藩若井歙吉演達之趣は申上置候處晩前書狀到來いたし御旅館へ罷出候様老侯御逢に相成との事に御座候故早速參樓仕候處初に田宮如雲面會いたし候に付得と事情申込候處永井主水正にも跡より參上いたし候様子暫談判も有之賦にて相扣居申候處老侯御逢被申との事に付罷出候處御丁寧之御挨拶振にて打明て存慮御承知被成度との事に御座候間吉川邊内情之次第委敷申説其上御策略に付敵方兩端に分れ暴黨正黨と相成居候儀誠に天之賜と可申譯譬一致のものにもいたせ策を廻し兩端に相成候様致可こそ戦法に御座候處兩立のものを一に死地に追はめ候儀誠に無策のものと可申實に拙之次第に御座候左候て謝罪の筋を立歸順の者悉く賊人といたし成し候儀御征伐の本意とは相考不申歸順致候様御扱被成候こそ御征伐の本旨と奉存候段理を盡し申説候成瀬隼人正も御前へ被召呼是の御質問に御座候且偏に御頼思食候間一張盡力致吳様分て御頼被成との

事に御座候右に付救應の人数藝地へ暫足を止其上機會に乘じ岩國へ乗込候見込の處申置候處老侯よりの御達に諸藩悉攻口の難澁を申立繰替の事計申立居候て總督府は是に御困之様子戰略の事は先づ次にいたし攻口の事計に涉り居候向に御座候夫故只今攻口之儀御達相成候ては諸藩の氣受にも相拘一同動立事に御座候勿論御達なくては只勝手に岩國へ人数を繰出候ては諸方も一同崩立自分々々勝手に攻懸候ものに可相成候間總督藝地へ御着相成候て俄に總督の見込にて萩の攻口を繰替岩國と達替相成候ては如何有之候哉との趣に御座候間何ぞ差支の譯は無之全體救應隊之儀藝地へ踏入陸軍を押候賦にて藝州へは陣取もいたし置候間是迄人数を繰込置候て御下知に従ひ岩國へ乗入候場に相心得可罷居と申置候處右様なれば此儀は至極秘し置候様承り及委細承知仕候旨相答置申候然處老侯様より御脇差拜領被仰付一向盡力いたし吳様との事に御座候尾藩にても胸一杯と相成諸藩の處攻口等難澁いたし弱め計相見へ候故もふは薩州を取込不申候ては尾の取れ候事には無之との見込に相成候半歟と被相考申候夫故近來せと涯相成候處尾州の會釋も格別相變依頼と計申居候位に御座候右等之都合相成申候間今日

は早速藝州地へ差向出帆仕候間左様思召可被下候御當地よりの人数は矢張藝地へ差向候様御下知被成下度奉願候此旨荒々形行迄申上候謹言

十月二十五日

西郷吉之助

帶 刀 様

【按】十月二十四日征長總督徳川慶勝諸藩の重臣を大阪城に會し軍議を開く隆盛吉井友實と之に列す同夜慶勝隆盛を其旅館に招致し征長の方略を問ふ隆盛長防の事情を告げ長人を以て長藩を處分せしむるの意見を陳ぶ慶勝之を納れ吉川等の説得及交渉に關する一切の事を隆盛に委任し副刀を賜ふ隆盛乃ち二十五日吉井及び税所篤を伴ひ廣島に向ふ此書其始末を在京の小松清廉に報じたるなり

香川諒山田右門に贈る書 (元治元年十一月八日)

一筆致啓上候追日寒冷相募候處御揃御安泰被成御座珍重御儀奉存候次に小生共にも一昨六日夜當所へ歸着仕候扱御地へ罷越候折は段々御丁寧被成下御手厚御取扱之程千萬難有奉存候然ば去る七月十九日弊藩手へ生捕相成候者共此度召列當所へ罷越候就ては右者共口柄相調へ候處元來卑賤陪從之輩にて是非も不相分全無罪之者共に候間是迄弊藩召置御宗藩平定の上御引渡申上銘々家族共へ御引渡之上苛酷之御所置不相成様致度

との存意に有之未成否も不相決議に候得共當所迄列越候處生國も耳目に近き所に候へば各歸心難留は通情之儀に付遅速に不拘此節宰領之者相付御引渡申候間御請取可被下左候て御取扱之被爲及時機候はゞ何卒弊藩之趣意御汲取被下助命之處萬々御周旋之程吳々奉願候先は右爲可得御意如此御座候以上

十一月八日

西郷吉之助

香川 諒様
山田 右門様

追而其御地新湊にて御引渡可申候間於同所御受取相成候様致度候

(按)隆盛等十一月四日廣島に着し直に岩國に至り吉川經幹を説得し六日廣島に還る會々救應隊廣島に着す隆盛豫め京都に於て打合せ置きたる禁闕戰爭の長人捕虜十人もまた隊中に在りよりて八日人をして之を岩國に護送せしめ長藩に交附す此書岩國の重役香川山田の兩人に此の事を通じたるなり

喜入攝津に贈る書 (元治元年十一月十五日)

先度吉井幸輔奈良原幸五郎より當表之形行御聞取相成候半爾後去る十一日長州家老草

津驛迄御呼出にて御討伐之儀御達相成候處昨十四日福原越後國司信濃益田右衛門介三人之首級差出嚴科に取行候由にて直様御實檢之式も相濟候就ては恭順之道を以伏罪之筋相立決て官軍へ不奉刃向段申出尙又吉川盛物より歎願愁訴仕候に付御軍門へ罷出候儀御免被下度別紙之通願出御免相成候右に付攻口期限被召延との事にて尾州藩より兩人其元へ被差越候に付蒸汽船より早目相達候處取計吳候様長谷川惣藏より承候に付正治被差越候間御聞取可給候尤期日御延引之儀は御達不相成候へ共右兩人より其元參集之諸藩へは御達可給候何分吉川之盡力にて今日迄之時機に相成申候細事は正治より御聞取之上御兩殿様へ被申上候儀共可然様御取計可給候此段御掛合に及候以上

十一月十五日

西郷吉之助

喜入攝津様

【按】十一月征長總督府の監察戸川安愛草津驛に至り長藩の家老を招致し征討の令を傳達す是より先吉川經幹隆盛より總督の眞意を聞き直に宗藩に赴き大に盡力する所あり是に於て長藩福原等三幕臣に自刃を命じ首級を總督府に呈出し謝罪の實を表すよりて十四日總督附家老成瀬正肥等廣島國泰寺に於て首級實檢の式を行ひ即日令して進軍を中止し九州出陣の諸藩に通達せしむ薩藩もまた軍役奉行伊地知正治をして小倉及蘆屋出陣の薩軍本

營に通ぜしむ此書蘆屋本營附參謀たりし喜入久高に報じたるなり

植田乙次郎に贈る書

(元治元年十一月十五日)

今朝承知仕候吉川面會之儀明朝國泰寺におひて大小監察成瀬等出席可相成候間尊藩へ御引合申上都合同可取計との趣に御座候間疾く御承知之筈與奉存御打合旁參上可仕筈御座候へ共色々御手数にも相掛却而御面働筋可罷成と態と差控明朝國泰寺に而御話可仕候付乍略義以寸楮奉得御意候間宜敷御含置可被下候頓首

十一月十五日

西郷吉之助

植田乙次郎様

要詞

【按】十六日征長總督徳川慶勝廣島に着し吉川經幹を國泰寺に招致し成瀬正肥をして長藩の禁闕を犯せし事由を詰問せしむ此書其前日廣島藩吏植田乙次郎に打合せをなしたるなり

小松帶刀に贈る書

(元治元年十一月十九日)

大野四郎助儀被差遣候御趣意諸軍も實に難有がり矢石を犯候ても何共思わぬ氣相彌増

爲皇國大慶之事に御座候此上者御、被成下候御、も御差下に相成一同難有がり候次第に御座候士之身上難有ものとは斯様之世態に因て始て思ひ當り候、と存申候就ては私共へも別段御送被下御芳志之御厚き次第實に奉感佩深く御禮申上候坂元儀は是迄之形勢爲可申上早速被差返諸軍一同より之御禮も可申上候間宜敷御汲取可被成下候此旨是迄之形行御答申上候恐惶謹言

十一月十九日

西郷吉之助

帶刀様

【按】京都より大野等を廣島に使出征兵に慰勞品を送る此書之を謝したるなり

島津主殿同求馬に贈る書 (元治元年十一月二十日)

去十五日迄之形行は伊地知正治より御聞届被下候半然處三條初五人之公卿方去十五日暴激黨五六百人餘相率長府の方へ動座有之候由相達子細不相分候得共定而同類を集暴擧之企に而有之との事に候就而は今日別紙之通總督府より御達相成一先筑前より五卿

方へ説得致し其上承引無之候得者可救道も無之左候はど臨機之所置不相成候而者相濟間敷右に付拙者には早く其許之様致渡海筈候得共伊地知正治にも未歸着無之爰許も差支候間幸今日越藩某兩人飛船取仕立渡海之賦に付形行荒増得御意候而當所之人數も總て其元へ差渡合力之賦候間蒸汽船二艘早々御差廻可給候大阪より當所迄荷方船四艘にて乗船相濟候得共當時之天氣柄難取究候間二艘丈御差越給候へば都合三艘にて可也相濟可申筑前へ者今日御達成候間暫者、可有之候間當所引拂可申左候而蘆屋へ當所人數入込丈陣取御手當御取計可被給候飯料者當所より持越申候左様御舍可被給候此旨旁御掛引申進候以上

十一月二十日夕

西郷吉之助

島津主殿
島津求馬殿

廣島より

追而前以飛脚差立是迄之事情も委細申進筈候得共折節幸便有之御托申候間此仁より何も御聞取可被給候當所より之人數は上下千人位にて候

【按】十八日陸盛長州處分案を總督に呈す總督之を納れ十九日三條實美等五卿を出さしめ山口城を破却すべき旨を吉川に令す會々長藩諸隊兵五卿を擁し將に暴發せんとするの報あり陸盛よりてまた總督に進言し五卿を九州の五大藩薩摩、筑前、肥前、に預けられんことを以てし自ら行きて諸隊兵及五卿を説得せんことを請ふ時に筑前藩士喜多岡勇平もまた廣島に至り五卿移轉のことを建議す總督よりて之を納れ五藩に令し五卿を請取らしむ是に於て陸盛は救應隊を蘆屋の本營に送るの準備を整へ廣島を發し小倉に向ふ此書出發の前日救應隊廻送の事を小倉滞在の先鋒隊に報じたるなり書中別紙は五卿筑前移轉の令を云ふ

小松帶刀に贈る書 (元治元年十一月二十一日)

別紙之通相認昨日坂元歸京之筋相決置候處一昨日夕方岩國香川諒參三條初五人之公卿激黨六百人餘相具し長府の方へ動座有之萩より追々鎮靜之者も差出候得共承引無之子細不相分候得共長府を語らひ萩之政府を動し岩國を打滅と之風説に候由就ては此上は逆も吉川之手に及候儀に無之詰り干戈を不動候ては不相濟時機に相及申候然る折柄筑前藩喜多岡勇平參合今一往公卿方へ説得之儀周旋仕度表立筑侯へ被仰付候はゞ精々盡力可致見との事にて人事之限は相盡其上承引無之候得は致方も無之義に付總督へ細々申込候處漸今日別紙之通御達相運申候五六百人之内浮浪は纔百五六十人内外其外は總

て長人にて二男三男之輩尤過半卑賤之者共之由に御座候就ては爰元之人数も蘆屋と一手に相成萬一事破候節は彼方より攻懸之手筈にて蒸汽船三艘差廻之儀も掛合いたし置候伊地知正治吉井も未歸着不仕候付歸次第下拙には蘆屋之様渡海彼是之都合共取計心組に御座候昨日より之形行右之通御座候間書添奉申上候恐惶謹言

十一月二十一日

西郷吉之助

帶 刀 様
別紙

松平修理大夫

去年脱走致し是迄長州へ滞在之三條實美初五人之輩長州より受取り一人宛御自分並び細川越中守有馬中務大輔松平美濃守松平肥前守へ預置筈に候間夫々請取候上引渡方共專被取計尤も請取方難行届候節者美濃守初申合兵力を以速に臨機之所置可被有之候其段美濃守初へも申渡置候事

【按】此書陸盛廣島を發する日在京の小松に贈り狀況を報じたるなり書出しに別紙とあるは十九日の書を云ふ

大久保一藏に贈る書

(元治元年十一月二十五日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳ば長征之一條吉川邊之情態奈良原歸府詳悉御聞取被下候半其後三家老之首級御實見も相濟參謀之徒四人穴戸佐馬介、中村九郎、佐久間佐兵衛、竹内正兵衛斷斬に相行ひ御托之條理も相立暫攻懸之處御猶豫と相成五卿並浮浪之輩所置を付其上如何様之罪をも可奉待段末藩迄も書付を以申付其上山口之新城破却を被命相濟候上兵を解かるゝ筋に相決し候折柄暴徒蜂起し五卿を押立暴動之様子相知れ總督府に於ても區々之議論故いづれ此上は五藩へ御預と申ものに被仰出得と五卿へ説得を被命其上承引無之候得ば人事を被盡候儀其上は打破候外無之屹と長評議に日を送寒中に兵をさらし候義天下之物笑と可相成誠に濟ぬ次第と事を分け理を盡して申立候處急速相運びいづれ五卿浮浪之輩へは私踏込候て利害得失を論じ納得出來候様是迄は可盡と相決居候處筑前藩喜多岡勇平と申者廣島表へ參此説得は筑藩へ御委任相成候得ば差はまり盡力可致十に七八はやり付可申との事故早速督府へ申込是非是迄之處は人事を盡され度

一體説得之處は筑藩へ御委任之處御當然之儀と建言仕候て都て申立候通相運別紙之通御達相成申候故去る二十一日晚廣島出帆仕二十三日晝時分小倉へ着仕申候自然廣島へ在陣之人數も蘆屋へ合し可申賦にて蒸汽船廣島迄差遣手筈に仕置候事共に御座候只、今之處にては激黨も千人位は有之との様に相聞得長府の方へ寄候との説も御座候得共虚實難知小倉にては長府より歎訴、様申立候由と相聞れ申候萩之政府岩國徳山此三所に於ては三人之首を刎候故決して激黨に與し候譯にては無之慥に暴正引分候故制し安き事に罷成申候肥後越前邊之處開城束縛と申迄不參候ては不相濟との議論頻に起居候處得と情實の次第も申述此儀は戦究矢盡ての極まり之事と申ものいまだ戦も不起候て極之手を致そうとは心之外之事右様之御見留に候はゞ速に攻懸候外無之と段々世態紛擾之處より列藩費弊之次第夫より又々官軍にも混雜到來いたし頓と統伐之御成功遂させられざる場に成立可申事歎も難計委敷前後之處申述候處兩藩共に同意致し小倉表に於ても議論も一致相成大慶之事に御座候此上は速に相運不遠兵を解き候場合に相成可申千位之激黨は一時に打破可申候に付左様御心得可被下候此旨大略形行迄申上候謹言

十一月二十五日

大久保 一 藏様

西郷吉之助

【按】隆盛二十三日小倉に着し征長副總督松平茂昭に謁して長藩處分の意見を述べ且つ越前及肥後藩士等を解諭して意見に従はしむ此書十四日以来の事情を在國の大久保に報じたるなり

喜入攝津に贈る書 (元治元年十二月四日)

先日御答之趣委曲承知仕候夜具等調方手當之儀に付策略を廻し候與之御疑問も相見得申候得共定而策略に而者有御座間敷月形長州に參掛於黑崎手當申付候儀歟と推察仕候爰元に而の議論も手早く黒崎え五卿方を御廻し可申上與之含をも申居候事に御座候得ば決而右等之品用意仕置候儀與奉存候喜多岡與は全く之別手に而示合て計り候儀に者無御座勿論月形與勇平與は行違に相成候而面會も不致由に相聞得申候然處勇平には先日申上候通説得も出來兼もふは手切之向申居候得共昨日月形より之一左右相分候處餘程議論も能相立五卿方は彌長防を御離れ相成候丈は御斷決相成激黨之折合も付けさせられ動搖不致様御扱ひ被成置趣與相心得別紙之通御書取迄も申下し候都合に相成候由

就而者是より月形激黨之者共に説得に打懸賦之處一左右も遅引いたし候付かく迄之形行可申入賦に而筑藩早川養敬と申者を差返候間右等之形勢荒増申上置候何れ惣體一決之上は尙又一人相返し可相通與之譯に相成候間兩三日中に者何與歟相分り可申其上は早速可申上候間左様御含置被下度奉合掌候喜多岡之説與は大に模様相變事之成そふな向に被相聞申候此旨疎略之働に御座候得共以書面如此御座候恐惶謹言

十二月四日

西郷吉之助

攝津様

【按】別紙は三日五卿より月形早川の兩人に與ふる書を云ふ是より先喜多岡勇平馬關に至り五卿の附士土方久元等及長藩諸隊長等と會見し隆盛周旋の眞意を告げ五卿の移轉を説きしが諸隊長等服せず却て薩人來らば生還せしむべからざるを以てし五卿もまた長藩を慮りて移轉を肯せずより喜多岡は小倉に歸り旨を隆盛に告げて歸藩す尋ぎて月形洗藏(筑前藩士)等また馬關に至り五卿に謁し大に説得す五卿稍々之を納れ手書を月形等に與ふよりて同伴せし早川養敬(筑前藩士)小倉に還り之を隆盛に告ぐ此書隆盛之を蘆屋本營の喜入久高に報じたるなり

喜入攝津に贈る書 (元治元年十二月十四日)

馬關へ罷渡月形並長州激黨等談判之趣者御聞届被成下候半昨日早川罷越別紙之書面持
 參仕候五卿之儀も最早長州之激黨與は斷然御立分れ相成居候得共調和之御手数丈は御
 盡し不被成候而は御信儀不相立與之譯に而鎮靜之効驗相成次第與は難出來候得共成否
 に不拘筑前に御移座與申儀は相決居候事に御座候間細川藩長谷川仁右衛門申談五卿御
 預之五藩より調和之道相盡候儀は御受合申上早々御開相成候處又々押返早川罷渡候付
 今夕には何と歟相分申筈に御座候間左様御得心可被成候此節は十に七八は相調可申と
 相考居候次第に御座候此一條相運候得者跡之處至而致安可宜御座候付直様岩國え罷越
 調和之道相盡候はゞ忽解立可申何分速に人數操揚候儀專要に御座候間早々差急可申賦
 に御座候勿論尾藩若井鐵吉にも昨日着に而承合候處五卿一條相運候得者山口城破却之
 爲見分大小監察被參筋に相決居直様兵を被解候所御内決與被相伺申候間旁大幸之事に
 御座候先づ是迄之形行申上置候恐惶謹言

十二月十四日

西郷吉之助

攝津様

別紙

西郷吉之助え極密談合之件々委細聞届候當藩内輪之紛亂鎮靜之効驗相立次第筑藩え渡
 海之儀令決定候付吉之助儀早々出帆岩國え立寄反正之説得相盡藝州え罷越此上精々周
 旋致吳候様通達頼入候事

十二月十二日

月形洗藏
早川養敬 敬え

【按】十二月十一日隆盛吉井友實、稅所篤を伴ひ馬關に渡り五卿の附土土方久元、中岡慎太郎等及長藩高杉晋作
 其他諸隊長等と會見し五卿移轉の事を論說せしが諸隊長等も稍之に服せしを以て隆盛等は小倉に歸り月形等は
 更に功山寺に至り五卿に謁し隆盛諸隊長等と會見の始末を陳べ速に移轉せんことを促す五卿より書を與へ深
 く隆盛に依頼する所あり十三日早川は小倉に還り五卿の書を隆盛に示す隆盛乃ち細川藩長谷川景隆と議し再び
 早川を功山寺に遣り長藩激黨の事は五藩より調和の道を盡すべきを以てせしむ是に於て五藩遂に移轉の期日を
 明示す隆盛よりて十五日小倉を發し岩國に向ふ此書其形行を盧屋に報じたるなり

小松帶刀に贈る書 (元治元年十二月二十三日)

嚴寒之砌御座候得共先以御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳ば先度申上置候以後は五卿之一條不相運色々筑藩よりも心配仕月形洗藏と申者差はまり盡力仕候處五卿も御開と申義も相決諸隊之處半方は折合も付纏に一二隊之過激之論も有之候得共餘程説付候向に成立私にも一篇は下之關へ罷渡吳候様月形より申遣候付吉井稅所兩士不開入同道にて罷渡候處諸浪之内四五輩も參一夜議論も有之候諸浪之隊は一同歸順之運にも成行隊長之者とは兩度も論判仕候處合點も出來一向五卿之御開も相盡候次第にて實に大幸之事に御座候大概激黨も降伏之勢成立相樂居終五卿も諸隊へ斷然御離れ切と相成御書取を以十日之期限も相極候付萩之政府と諸隊とは寇讐之如相成居候付其邊調和之道相立候へば一同解立譯に相成候付早々岩國へ志し出帆仕候處去二十日朝着致し候て吉川へ得と談合仕候處能々汲受此節自ら張出し長府邊へ直様踏込説得之合勿論萩府に而之俗吏兩三人を退け激黨より望を掛居候者兩三人も引上げ調和之筋も相立賦に御座候處二十一日朝萩表より使者岩國へ相達變動之向相聞得候折柄岩國より差出置候人々罷歸得と承合仕處長谷川惣藏萩へ參居餘程せり立打取之策を立候向勿論戸川鉾三郎山口

城破却巡見として參居色々被責付候向と相聞得十八日晚七人之者を入牢申付翌日は直様斬罪に取行ひ候由前田孫右衛門、檜崎彌八郎、山田又助、大和國之助、渡邊内藏太、松崎剛藏、毛利登人此七人に而御座候左候而未藩等へも人數差出候様相達千人位之勢萩表より押立候由激黨之内には蒸汽船二艘を奪撫育金と申を掠取候由何方へ乘廻候歟いまだ不相分繫場より届申出候迄に御座候頓と調和之道も絶果残念之事に御座候右等之拙策用ひられ候ては實に込込事に御座候何分にも右様破立候ては施すへき策も無之勿論督府之見込不承候ては如何ともすべき様無之候付昨日廣島迄參着仕候岩國にて説得之道も相立候はゞ五卿受取之儀も相決候付速に解兵之策を督府へ説込合にて御座候處案外之次第に成行申候岩國にて承候には京師にても水人入込候との風説粗承候間速に駈登舎にて小倉表へも書面岩國より差出尤人數繰登之儀も荒々申遣置候而廣島迄參候處御手洗より伊地知正治書面相達居頓と安心仕候兩三日も見合候はゞ長州之模様可相分候付時機次第には早々罷登候様可仕候間左様思召可被下候何分爰許之處も不見止候而者不相濟候付暫時相扣居申候此旨大略形行迄申上候恐惶謹言

十二月二十三日

西郷吉之助

帶刀様

【按】隆盛二十日岩國に至り激黨調和の策を吉川經幹に説く經幹之を諾す會々萩に於て前政府員前田孫右衛門等七人を獄に斬るの報至る隆盛大に其拙策を憤慨し二十二日去つて廣島に行く此書其形行を在京の小松に報じたるなり

黒田嘉右衛門に贈る書 (慶應元年正月元日)

今日長府より使者參候付致出席吳候様越藩より承候處拙者には蘆屋之様差越候付御方御出席可給候下宿大和屋と申所之由に候此旨及問合候以上

正月元日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

【按】慶應元年正月元日隆盛廣島より小倉に着し斑軍の令を同地滞陣の副總督府及薩軍の先鋒隊に傳へ直に蘆屋の本營に赴く此書小倉に於て長府の使者に會見のことを黒田に依頼したるなり黒田嘉右衛門は今の子爵清綱の
前名

蓑田傳兵衛に贈る書 (慶應元年二月五日)

兩士之書面連中に而開封いたし候處段々兩人に而きまりを付居候様子に御座候間仕合之事に御座候乍然是非參掛候間一往は是非不參候而相濟儀與相考候付吉井出立不致内やり付候舍に御座候此旨一筆啓上いたし候頓首

二月五日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛殿

【按】一月下旬大久保利通、吉井友實等上京の途福岡に至り五卿のみに付盡力する處あり大久保等其形行を在國の隆盛及蓑田傳兵衛に報ず隆盛よりて大久保等の書を蓑田に廻送し自筑前に赴かんとするの意を告げたるなり

關山新兵衛三原次郎左衛門に贈る書 (慶應元年二月二十三日)

尙々集議所之儀は明朝も可相定候間其段も爲御心得申上候
唯今筑紫衛等參着いたし候間明日は會議爰許に而可相決候付其段細川等に御掛合置可被下候此旨早々奉得御意候頓首

二月二十三日

西郷吉之助

關山新兵衛様

三原次郎左衛門様

【接】二月十八日隆盛鹿兒島を發し太宰府に至り始めて五卿に謁す時に幕府は五卿を江戸に護送せんとし尾張總督は守衛の五藩に分配せんとす爲に五藩適從する處を知らず隆盛大に幕府の令を不當とし二十四日五藩の守衛士を會して五卿の進止を議す隆盛説を爲して曰く五卿の處置は元尾張總督の命する處なるを以て幕府の命のみを奉すべきに非ず宜しく各藩より代表者を上京せしめて尾張總督の指揮を受くべしと衆之に贊す此書薩藩の守衛士關山等をして會議の事を各藩の守衛士に通ぜしめたるなり當時隆盛は太宰府より福岡に至り同藩家老矢野梅庵及び月形洗藏等に會見し三條實美等の人物を推稱し復職を謀らんことを議す其際同席せし右筆某が隆盛の演説を筆記せしものあり左の如し

方今天下の形勢たる尊王攘夷は三歳の小兒迄も能く唱ふると雖も其實を解するものとは甚だ稀なり

主上英明に渡らせ給ふと雖も憚ながら輔弼の臣に賢才なく年來の叡慮今以て貫徹せず當時の堂上方多くは懶惰柔弱にして淫逸貪婪の風甚だしく之ぞと申すほどの人物は更に聞き及ばず然るに獨り三條中納言殿のみは故内大臣實萬公の遺志を繼ぎ眞に尊攘の志深く聰明發達の質材を抱かれ隨て主上の御眷遇も淺からざりしに何ぞ圖らん不幸にして一時流離零落の身と爲らせられたり去れば諸藩力を戮せて速に其復職を計り輔弼の任に當らせらるゝ様周旋するは最も當今の急務たり堂上方に賢臣なくては尊攘の實行は到底行れ難るべし云々

土持政照に贈る書

(慶應元年三月二十一日)

春暖相成候處愈以御家内中様御息災尙御元氣御勤仕之段追々承申候其上與人御役に御昇進之段誠に結構之御仕合御悅申上候次に拙者にも不相變罷在候間御懸念被下間敷候

然れば其後書狀も不相遣甚以て不本意之次第にて嘸御立腹之筈と相考候得共麿着の處中四日有之早々出立候位にて何も取込候仕合殊に足不相立津端より自宅迄不歸付駕籠にて歸候事共に哀なる爲體にて御座候翌々日福昌寺參詣仕候處漸々這付候事にて難澁之事にて御座候御察可被下候夫形京都へ直様登掛候處色々難題勝之事にて苦心之次第に御座候追々私にも昇進いたし當分御側役被仰付相勤居申候牢屋者の箇様之仕合夢之様なる心持にて恐入候計に御座候昨年夏には京都に於て大合戦有之足に少々鐵砲瘡を蒙候得共淺手にて何も子細は無之大幸之事に御座候御存知之通軍好之事に御座候得共現事に望候ては二度は望度無御座候實に難義のものに御座候御笑察可被給候其節之功にて御刀並御陣羽織迄拜領被仰付冥加至極末代迄も面目を施し候仕合殊に御感狀頂戴仕候當時にては珍敷譯にて御悅可被下候牢屋にて朽果候事と相考居候處戰場迄も試み生前之本望此事に御座候委細之様子も申遣度候得共自慢咄と相成候ては兼て之素志も水之泡と相成候間態と省略いたし候軍咄は御方へ早々相咄度直様相考候ばかりに御座候兼て申居候言葉と戰場之事と少しも相違は不致候間夫丈は御安心可被給候引續き

長州征伐に差越候正月十五日宿許へ歸付候へ共直様上京仰付られ當分相詰居申候牢屋よりの御厚恩旁々御一禮不申遣實に薄情之者と相考被成候半眞平御免可被給候此旨乍略儀如斯御座候以上

三月二十一日

西郷吉之助

政照様

【按】此書沖之永良部島より召還されたる後の行動を土持政照に報じたるなり

月形洗藏に贈る書

(慶應元年四月二十五日)

薄暑相向候得共彌以御壯剛奉敬賀候陳ば尊藩へ罷出居候節は始終御丁寧之御會釋實に難有奉厚謝候扱倉八君杯御上京相成相樂居候處豈圖らんや御歸國之事に相成残念此事に御座候此度は御一掃之期と渴望いたし居候處存外之事ともに御座候畢竟筑薩一致之處幕府にて大に嫌ひ居候事と相見へ如何にもして離間の策を用ひ度との腹中より大音等の奸吏を餌にいたし喜んで策を施し候ものと被相聞申候是非弊國之處孤立之ものに爲すの策十分有之と相見得申候近來關東に於ては再長征之儀を促し候向も相聞申候此

度は幕府一手を以可打との趣に相聞申候勿論弊藩杯は如何様軍兵相募候共私戦に可差向道理無之候間斷然と斷り切る賦に決定いたし居候實に拙なき次第に立到申候御遙察可被成候私にも無據用向有之暫之間歸國之賦にて出發仕候得共至極差急ぎ候付乍残念罷出兼候付宜御汲取可被下藤井罷出候間宜敷御談合偏奉希候此段御厚情御禮旁如此御座候恐惶謹言

四月二十五日

西郷吉之助

月形洗藏様

【按】三月上旬隆盛福岡藩士早川養敬等と上京し五卿の復職を計らんとし密に時機を待つ會々福岡藩吏倉八権九郎等藩主の命を奉じて上京し五卿の事につき質議する處あらんとす幕府大に薩筑の舉動を疑ひ福岡藩の佐幕黨大音兵部等をして倉八等を歸國せしむ爲に隆盛等の計畫齟齬するに至る既にして隆盛は幕府長州再征の令を發するを以て家老小松清廉等と藩論を決し四月二十二日京師を發し歸藩す此書途中大阪より藤井良節に託したるなり此書に依れば幕府長州再征の令京師に達するや隆盛等直に出兵拒絶の議を決し態度を明にせんとしたるを知るべし

小松帶刀に贈る書

(慶應元年閏五月五日)

尊書難有拜見仕候如尊諭存外之洪水弊屋都而浸頓と難澁仕候次第に御座候右に付御丁
 寧之御紙而厚御禮申上候扱昨夕町便來着之由に而御紙而御廻被成下得と拜誦仕候處彌
 發足之様子自禍を迎候と可申幕威を張ところの事に而は有御座間敷是より天下の動亂
 と罷成徳川氏之衰運此時と奉存候三年も浪花城に罷居とは何と申迂説に而御座候哉一
 年も六ヶ敷御座候半何は扱置此節進發爲天下雀躍此事と奉存候尙參上之上可奉厚謝候
 得共其内不取敢以書面御禮答迄如此御座候恐惶謹言

又五月五日

西郷吉之助

帶刀様

御侍史

【按】同五月上旬大將軍進發の報鹿兒島に達す小松之を隆盛に廻送すよりて之に答書したるなり此書に依れば隆
 盛等長州再征は幕府の自滅を早むるものと爲し却て喜びたるを知るべし

黒田嘉右衛門に贈る書 (慶應元年五月二十六日)

別紙筑前脱走人京師にをひて吉井方に差出候由右脱走人は北小略を斬姦之賦に出掛候
 向と被相聞申候間有志之者共に相違無之ものに御座候正黨兩立之形歎息之筋に相見得

歎ヶ敷次第に御座候正氣不突立候得者毎もかくの通の事に御座候へども何分御含置被
 下候而御教解奉希候御進發之一條に付筑も自然相迫勢ひに御座候間此機會を以一致之
 道如何様共相立事と奉存候間宜敷御周旋奉願候筑米之兩藩は力を盡し候得者其益必可
 有之事にて片腕には相成藩に御座候間何卒御手を付置可被下此段御願申上候以上

五月二十六日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

別紙

筑前藩

黒田播磨 矢野相模 大音因幡 加藤司書

右家老

梶原喜太夫 河村五左衛門 齋藤五六郎

右大目附

衣斐茂記 熊澤三郎兵衛

書翰

右小姓頭

建部武彦

右用聞

岡部 蔭 梅澤幸一

右勘定奉行

繩 正 小金丸 兵次郎 喜多岡勇平 進藤 登

中村 到

右御用部屋

筑紫 衛 月形洗藏 河合茂山 尾崎安之允

淺香一策 鷹取養巴 今中作兵衛 森 金作

伊丹新一郎 安田喜八郎 早川養敬 萬代安之允

森 安平 林 盡 野村助作 月形修平

右無官之有志者

久留米藩

幽囚 木村三郎 池尻茂左衛門 早川與一郎 樋口伴四郎

山田彦三郎 青木主馬 大鳥居次郎 柴山文平

佐田素一郎 山本 登 內藤新吾 淺田節三郎

大鳥居菅吉 角照三郎 樋口幸太郎 姉川英藏

黑岩種吉 前田九市 西川 湊 下川元三郎

新山舍人 宮崎槌太郎 宮武助左衛門 木原貞助

園田三津次 樋口廉吉 古賀和吉 狩野左京進

奸物

不破左門 本庄仲太 久德與十郎 松崎誠藏

松村辰之丞 梯讓平

對州藩

奸黨

〇〇勝井五八郎 〇立花郡兵衛 〇高田小十郎 〇三井田好右衛門
〇大東菅之助 小茂田貫助 小茂田徹助 〇八坂順之助
梅野唯佐 高島辰之助 〇阿比留喜助

【按】黒田清綱太宰府より歸藩し再び筑前に出張せんとす隆盛乃ち筑前藩の脱走人が京師に於て吉井友實に呈出したる筑米對三藩の正好人名表を贈り筑米兩藩周旋のことを依頼したるにり

大久保一藏に贈る書 (慶應元年八月二十三日)
箕田傳兵衛

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳者大坂之形勢も運行事には無之專閣老會一之密議にて若年寄邊より下には全不有響と之由にて軍議之次第不相分候へ共別紙小倉へ及談判候書面を以考候處此度之再征は全名もなきものと相成條理を失候儀と成行益先き暗き方に陷申候いづれ理を失ひ候はゞ勢を以押へ懸らす候ては致方無之候へ共勢相挫け居候幕府一手を以戦は出來不申諸藩之兵を募ると申ても名の立様有之間敷理勢共に失ひ候ては尾のとれ候處如何可相成哉最初名義を正しく不致候て胸算を以

諸藩可應事と輕卒に動立候故行先拙策に陷候事にて大坂中之人氣は彌増に惡敷惡計被行笑止千萬之事に御座候徳山岩國之兩所も何か故障付候と相見へ清末にても長府にても萩の家老にても不苦との令を替候是以最初より大きに打開出し不申候ては不相成處又外供は兵庫迄内供は西の宮迄にて只兩人の供列にて大坂出懸候儀達替も有之紛々之計にて實に阿放を極申候事に御座候蒸艦御迎船之儀待に待候處今日迄も着不致如何之事と按煩候儀に御座候就ては守衛御引拂之御策も不被行事か此機會を御見居無之候ては御大策相立兼候半かと日々御左右相待居候事に御座候少々之御盡力にては逆も此形勢にては詮立候儀無覺來事と奉存候諸郷守衛人數之儀交代前差掛候此内より過分流行病にて人氣迄も挫居候次第にて戻風頻に吹立居候間中途代りの處を以一隊も御差立相成候付交代參候時宜に相立候て是迄之通之振合を以取計申可候付大坂之船繰を以順々御差立相成候間左様御舍可下被候右御取引に付ては邸中之議論も一致に無之候ては跡以船々異議も難計當分にては全く左様之譯は無之候へ共念を入衆評に出し候處全く異論之譯は無之候間爲御心得差上申候付御覽可被下候いづれ共其元の御吟味は相決居候

半かと相考居申候小倉へ相渡居候幕大目附塚原但馬守會藩諏訪常吉と申者皆歸坂いたし居候由畢竟長より談判六ヶ敷夫が爲に罷歸候半かと申説に御座候長よりの談判杯之儀至極秘し居候由藝藩杯にも岩國より使節參候一件悉く秘し居候筋と相見へ申候大坂にては來月廿七日限に長州より不罷出候て人數御線込相成候其心得罷在候儀段々と幕役へ達に相成候趣木場より申越候初之議論にさへ負を取候て戦は尙更出來間敷尤をかしな事に成行申候會の諏訪海江田方へ參候て初に再征と被仰出候儀誠に失策との咄いたし候由夫は畢竟長より條理を以及談判故昨年之所置を出し候儀も不相調再征之儀言崩され名なきに込て尙更自分にこしらへて再征をいとひ候筋與相見得申候頓と策を失ひ候と見へて薩州より周旋は有之間敷哉杯と吹聴いたす様子と相聞れ申候尾州老候を又引出すとの噂も有之候由どふも仕方可無之色々工面を替候事と相見へ申候佛人より中立候は是迄之條約は本當の譯に無之候間幸大樹公にも大坂滞在と承候故攝海へ相廻一定之約書を得度候付談判可致申立幕役心配いたすとの風説も之有候へ共突留候説はいまだ得申不候別冊中路權右衛門より聞合申出候書面差上申候間御覽可被下候頓首

八月二十三日

西郷吉之助

大久保一藏様
蓑田傳兵衛様

【按】閏五月二十二日大將軍入京參内し長州再征の事由を奏す是より先大久保利通再征の不可を京紳に説く朝廷よりて大將軍に諭して長州の處分は猶衆義を盡して公平に處置せしむ大將軍乃ち大坂滞陣し一橋慶喜守護職松平容保及關老等屢々謀議して先づ吉川監物、毛利淡路の兩人を大阪に召致し糾問せんとし廣島藩をして命を傳へしむ然るに兩人幕命に應ぜず當時薩藩のみならず尾張越前藤堂等の親藩亦再征の不可を建言すよりて諸藩の人心益乖離の狀あり幕府爲に種々の策を講ず此書隆盛幕府の近狀を在國の大久保等に報じたるなり

大久保一藏
蓑田傳兵衛 贈る書 (慶應元年八月二十八日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悦之御儀奉存候次に御揃御壯健御勤仕之筈珍重奉存候陳者風説書並攻懸之書而諸藩へ相廻候由如何様幕府にて内評共有之候ての事哉方々へ流布いたし候向に被相聞申候つまらぬ事は觸廻候得共頓與評議之模様相分不申由に御座候當年中も大坂へ滞在相成候はど内亂大變を醸し候半か膳所之一舉にさへ幕人多數相加候趣と相聞へ候付内輪混雜推て知られ候事に御座候段々承候得ば幕人諸浪士と結

合候者過分之由江戸城を二篇焼候も幕人内應之者より火を擧候説に御座候幕中之有志は悉く被退其上浪士抔與内を謀候位之事に候得ば自らたをれ候儀無疑事に御座候此度戦も不出來所置も不立候て引拂相成候はゞ迎も諸侯へ令する事も何も相叶申間敷第一策を失ひ候儀は外夷餘程幕政の邪なるを惡み人心相離候向にて益々勢を失ひ候ものと被相聞申候夫故異人へ機嫌取に兵庫開港を始め候かも不被計候取々之風説故突留たる説一向承得不申候此旨奉得御意候恐惶謹言

八月二十八日

西郷吉之助

大久保一藏様
蓑田傳兵衛様

別紙

先日定式飛脚被差立候以後大坂も些動立候形勢に御座候長州よりは再征被仰出候處え罷出候儀不相合昨年之御所置振に付ての儀に候はゞ是非罷出候て如何様共御汰沙振可承事との趣藝州へ爲申入様子に御座候得共藝にて餘程秘事にいたし候向と被相伺申候

是以幕府より沙汰いたし候事歟と被相察申候先づ長州にては大坂までは不出掛向に相見得申候畢竟威の掛方かは不知候得共來月廿七日限不罷登候はゞ斷然之御所置可相成との趣にて大坂におひて諸藩へ相達し御達を以て御國元へも人數手當いたし置候様阿部公用人より相達候由に申來候付勢之儀は國家の大事件に候得者可討之罪を鳴し屹と御書付を以て御達不相成候ては御國元え懸合出來不申候旨答候様申遣候處書面えは書取がたく段返答相成再押掛候儀も出來不申夫形頼込候位に御座候間幕命を以相募候儀は迎も出來申間敷如何にもして朝命を申下し候手筋も難計候得共名に立候廉益無之様罷成候故期限を誤候事のみを申立候外は有之間敷哉と被相察候得共斷然之所置を付るとの事に候得者無暗に戦を仕掛候かも不被計事に御座候戦を始候ても益々尾はとれ申間敷事に御座候殊に下手な事には關東にては長州家之墓を悉く廢候由大坂にて兵を屯し置長州えは彌増策を與候と申者其上人情不可忍之幕廢をいたし始終下手が先廻に相成候次第可笑事に御座候右様苛酷之手廻か先達候故(脱字)筑前は崩立居候に付五卿邊え手を掛候策有之間敷ものとも不被圖候に付一隊か二隊かは警衛として御差出相成

候はゞ宜敷は有御座間敷や若し哉欺謀を以捕られ候ては御國之信義に相拘事に候間不容易場合に御座候譬右之策有之候共御國元より御人數被差出候へば決して手出し相成申間敷事と奉存候筑前之情實奈良原幸五郎より得と承候處中々六ヶ敷勢ひにて候得ば此機會を以俗論を救候場も可有之事と奉存候付得と御吟味之上此圖を不拔之御計策奉願候いづれ此度の一舉にて公卿方之儀如何様とか捌可申候付決して長ひ事には有御座間敷候御人數被差出義に御座候はゞ慥成人不差出候ては相濟申間敷儀と奉存候

【按】此書幕府の内情と長州處置の形行とを報じたるなり筑前云々當時筑前藩俗論黨大に勢を得月形洗藏等志士皆閉閉せらる隆盛よりて五卿の身邊を顧慮し守衛兵の増遣を希望したるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應元年九月十七日)

兩度之御問合之趣致承知候愈昨日夷船來着早く情實を得可申含にて百方手を盡候處未だ細事相分り不申今朝小蝶丸乘頭へ相達異船へ爲乗込動靜爲相伺候様相達候處只今別紙之通申出候來着之時分より坂本並中路兩人者兵庫へ相廻し置候得共未一左右も無之表通黒田彦左衛門探索方として兵庫へ御留守居方より差出候吉井幸輔には越前邸へ參

候得共委敷不相分木脇權兵衛は幕吏へ聞繕方爲致候處今日天保山沖へ碇泊之船一艘有之候故右船へ兩町奉行並御目附乗込候趣に候間來着之趣意相尋候處日本語を以御方なとへ難相咄頭役ならでは談判難出來乍氣之毒と挨拶致候故閣老小笠原爲差越由候得共未だ何事も相分不申明朝に相越候由候得共其趣未だ模様相知不申今通之向にては幕奸より相進めども不被窺候得共油斷は不相成候夷船は都合九艘にて英船五艘佛船三艘蘭船一艘にて候其内佛船一艘は天保山沖へ懸居候外八艘は兵庫へ相廻居候皆蒸汽船にて御座候由只今迄之形勢相分候而已申上候明日に相成候はゞ何分相分り可申速に申上候様可仕候今日參内之儀御延引に及候儀承及候如何之譯にて相延候哉不審之事に御座候何れ幕手を相離れ朝廷約定之御願申上候者何れ各國之諸侯被招呼天下之公論を以て至當之御處置不相成候ては不相濟只幕府より申出候計にて兵庫開港勅許共相成候様之事に陥り候ては皇國之御辱此上も無之事に寄り堂上方之例の恐怖心にて義理も分別も有之間敷か不堪歎息儀に御座候此段早々形行迄申上候以上

九月十七日

西郷吉之助

大久保 一 藏様

【按】九月十七日英佛蘭三國軍艦九艘攝海に入り開港條約の勅許を迫る是より先隆盛大久保利通等と議し大藩諸侯を京師に集會し以て外交及長州問題を解決せんことを策すよりて外艦の將に攝海に來らんとするの報あるや隆盛は直に大阪に下り種々の手段を講じて外艦と幕府の情實を探る此書外艦入泊のことを報じたるなり書中坂本は龍馬を云ひ中路は榎右衛門を云ふ

蓑田傳兵衛に贈る書

(慶應元年十一月十一日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳者守衛之人數御繰込相成候處大に勢を張進退去就之速なる處出沒不被計との趣大に申觸らし恐れをなし候模様は御座攝海異人之談判と申ものは餘程奸計爲有之由に相聞れ申候表通兵庫開港之儀は御差止と申事故是を絶ち切るにはいづれ三港丈けは御免し無之候而は逆も不相叶と申譯を以申立内輪兵庫も異人とは取究居候由に被相窺候其上港を開丈けは勅許に相成條約之儀不宜廉も有之候に付衆評被聞食候上に御所置可被遊との事に候得共條約は取結候趣と被相聞申候皆跡事に相成次第言語に絶し候譯に御座候一會桑之作明も皆崩れ立天下之心も相離れ無致方處より頻に會人此御邸へ出で媚び候事共不堪笑候是迄幕府之術強藩

と申せば直様嫌疑を掛色々之流言をはなち内輪混雜を成さしめて其虚に乗じ言を以解破候手段に御座候處今や手術を失ひあきれ果たる様子と被相聞申候長征之事に付而も頓と策を失ひ永井主水正等廣島迄差遣結局は不相叶伏罪致したるとの一言を爲謂度との賦にて段々媚を求め候様子に御座候一向宗寺之光西寺とか申坊主は長家へ由緒有之寺にて御座候處是以橋會より相頼伏罪いたしたるとの一言を申て吳候儀相頼候由御座候得共坊主不肯由に被相聞申候此夏時分被召捕候長人赤根武人等之者を永井は召參たる由に被相聞申候是等は至極幕中之秘事と被相聞申候實に危然たる向にて橋會桑困窮之事に御座候由いづれ大樹公にも大坂より逃下る模様と被相窺申候橋會より關白殿下へ大坂より被罷下候方に申上候との説も有之事に御座候大坂にをひて糧食も乏敷當年中相支候儀も六ヶ敷況や西に兵を進め候儀逆も無覺束と被相聞申候攻口等之儀各藩へ通達相成候得共人數を繰出せと申儀は無之手數迄之計にて退く之謀と被相察申候此上戰を初出し候はゞ直様紛亂之勢ひ眼前に相見得申候幕府にをひて攝海異人之談判に益不條理を顯し朝廷を欺き人心之憤怒を重ね長征にて兵勢之衰を示し條理を失ひ且勢ひ

を失ひ候ては如何之作明を用ひ候ても不被行如何なる智者ありとも引起候儀は無覺束次第に御座候間此時に當りては理を盡して進み勢を詳にして動べき事と奉存候尙中之處一言發すれば名分大義を明にして義を以立確乎として不動諸藩を壓倒いたし候姿も有之候變に入る入らぬの境肝要之場合にて至極謹慎を加へ評議を盡し候事共に御座候此旨大略如此御座候小説紛々に御座候得共取に不足事共にて文略仕申候頓首

十一月十一日

西郷 吉之助

蓑田 傳兵衛 殿

【按】外艦の義に攝海に入り開港條約の勅許を迫るや大久保利通朝廷に建言して極力兵庫開港の不可を以てす朝議幕府を慮りて容易に決せずよりて隆盛は大阪より一旦歸京し大久保と議して諸侯集會の事を遂行せんとし大久保は越前に往き隆盛は歸藩す既にして大久保松平慶永の承諾を得て歸京するや朝議俄に大久保の議を納れ外人談判の爲大原重徳を勅使と爲し大久保等薩兵多數之を護するに決す然るに一橋慶喜等之を不可とし開港條約勅許の止むを得ざるを主張す是に於て朝議また變じ遂に三港の開港條約を許し兵庫開港は之を許さざるに決す各國公使は之を肯ぜざりしも幕府密に兵庫開港の内諾を與ふるにより漸く攝海を去る隆盛は鹿兒島に歸りて諸侯集會のことを藩主父子に建議するや藩主之を納れ將に兵を率ゐて上京せんとす會々外艦攝海を去るの報至るを以て家老小松清廉藩主に代りて上京するに決すよりて隆盛は小松と海軍兵を率ゐて上京す此書開港勅許の真相と長州處分につき幕府の失策とを報じたるなり

黒田 嘉右衛門 に贈る書 (慶應元年十一月十四日)

田沼玄蕃頭蒸艦より攝海へ乘廻候由事柄不相分候得共兵庫開港之義欺謀を以異人と約條いたし候故關東に於て大に物議沸騰之様子に被相聞候付其等之事か又は迎船共にては無之候哉御探索被成下度奉合掌候大樹公上洛とかの説は御當地にても流言いたし候得共是は虚唱と被相察申候此段奉得御意候頓首

十一月十四日

西郷 吉之助

黒田 嘉右衛門 様

【按】田沼玄蕃頭上坂の事情を知らんとし當時大阪にありし黒田に其探索方を依頼したるなり

境金 一郎 に答ふる書 (慶應元年十一月二十一日)

芳翰辱拜誦仕候如貴諭寒威嚴敷御座候得共彌以御壯剛之由珍重奉存候隨而小弟無異罷在申候間乍憚御放慮被下候陳ば日々形勢も相變頓と見留も付兼候世態と相成幕威も相衰來候處再討も譯之分らぬものと相成苦切て有る様子と相聞申候就而は事情御隔絶に

而潜行の趣被仰越委細承知仕候一大事の場合御苦心の程御察申居候事故態々御計策を被廻御登被下候はゞ詳に御談話も可仕候付弊邸に於て何も差支無御座候付其段は私より御返詞申上候様家老共より申付候儀に御座候間宜敷御汲取可被下候態々御書面を以御尋被下御念入たる次第突然御來訪被下候而可宜義に御座候處痛入仕合に御座候乍然當分は大に天幕之嫌疑を蒙り居候間其段は御舍居可被下候至今嫌疑を顧る時節にては無御座候付少も不相構罷在候間御安堵可被下候此旨御返詞迄如此御座候恐惶謹言

十一月二十一日

西郷吉之助

境 金一郎様

追啓上小松へも御紙面を以御懇切之御會釋被成下候由別啓不仕候付私より厚く御禮申上候様申聞候付乍憚宜敷御汲取可被下候

【按】岩國領主吉川盛物の巨境金一郎書を隆盛等に寄せ交を修め潜に大阪の薩藩邸に訪問せんことを以てす此書之に答へたるなり

蓑田傳兵衛に贈る書

(慶應元年十二月六日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候貴兄にをひても寒冷無御障御勤仕之筈珍重奉存候陳者江戸表御役所等御引拂之一條如御尊諭政府より表通御問越相成候趣疾くに承知仕候此一條に付ては専私主張いたし候事にて御座候天下之事情不貫徹の御事歟決て果斷抔と申御扱にては無御座時勢相當之御事此御方様より先に立て御始め被成候儀之譯なれば御懸念之御事も可有御座候得共各藩には後れ候事に御座候親藩すら御主殿迄も國へ引取定府も不殘引拂候次第に御座候勿論大奥は不被召立置候ては天璋院様御方へ御情義にをひて被爲疎候譯も可有之候得共如何程大粧に被召立候迎唯御取次迄之御事日々御用共相勤候議も無之唯費用を重候迄之事に御座候御主殿迄國に引取候義と親疎之情義を以大小輕重之處如何可有之哉左すれば唯費用を増候計と相成可申他邦へ御縁邊之御方々様にをひても大方御國元へ被爲入候御事にて是以御疎遠之筋に被爲當候御譯合も無御座大圓寺等之義も御役所不被召立置候ては不相濟儀も有御座間敷御元祖様御靈屋と申は何百年も戦争を経て鎌倉へ被爲在候御事に御座候得者は以被爲届兼候場に難申上いづれ君公も御出附不被爲在日に至り御役場召立置候御譯合無之一

一條理を以論じ詰候はゞ何も角之立候御事にも無之唯嫌疑を恐れ候迄に相成可申當時は幕威相衰候故嫌疑をさけ候所に少し手之見得候得ば盡嫌疑を重候場に陷可申四方嫌疑を掛候世上に候得ば是以中々行届可申様も無之是迄幕府之仕打と申者は色々流言を放て嫌疑を掛て内之混雜を見て俗論を助て立崩し候儀妙手に御座候當時之處全く手を引て名義を明にし條理を正し樞要之場に建言相成候故却て俗眼之嫌疑と見る處は幕府之一策と相成もふは自分之失體を改不申候而は不相濟ものと相成日々變革に心を向候趣に御座候右様事情之不通より裏はらに相成ものに御座候間御熟考可被成下候尤岩下吉井氏下着相成候付右邊之所相分居可申事とは相考候得共尙又上村下着相成候はゞ江戸表之事情巨細御分相成可申候間には私情を以嫌疑説を唱候ものも有之向に御座候拜借等自由に相調隨意に面白かり江戸へ行たしとの念不已候て物議相起候事も不少哉に相聞得申候間必俗論に御沈被下間敷天下割據之姿に相成いまだ戰を不始計に御座候處因循之説を以て諸方へ大に費用を増し候義有眼之もの可耻事には有御座間敷哉實に無用を省き有用を事とする時節小事に拘り區々たる譯には無之事と奉存候上村より委敷

御聞取得と御推察奉希候若事實相當之譯と思召に候はゞ政府へも宜敷御辨解可被成下候不相當之譯に相成候はゞ其罪は私蒙申度天地に正して恨無御座候付少しも御遠慮被下間敷候如何様共御汲取奉願候爲其貴兄迄申上候間公平を以御汲可被下候頓首

十一月六日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛殿

別啓仕候御當地之形勢も暫時は不動些靜まり候鹽梅に御座候得共兵庫開港一條六ヶ敷成立再攝海へ廻艦之説紛々と相起候得共彌相迫との義は不相分大に失策を働候儀と一橋杯後悔之向に被相聞幕府にをひても私意を以朝廷を欺き候後難之恐を慮り此機會にやり付置様之計謀も不知處に御座候若右様之計にて攝海へ相迫候はゞ又一機會も相生じ此節は意之儘には參兼可申事歟と奉存候此度之所置を失ひ候付因備邊之處も頓と一橋侯には兄弟之親も相離人望絶果候向に御座候幕府よりも大に嫌疑を掛居候處全嫌疑を遮る賦にて相働候事皆々嫌疑を重十計斷果候向に被相聞申候兵力はなし如何とも致し様無之様子當分辭職之儀も御申出に相成候由是は畢竟是迄は一ヶ月一萬六千兩づゝ

幕府より續來候處昨年來全不相候付京都町奉行切手を以一萬五千兩づゝ月々差續居候處將軍上洛以來此手も相離一切續料も無之十萬石限之事と相成十方に暮候處より關白殿下至極之御ひいき故攝津邊御宛行之儀も御達相成候得共閣老之處誰も受續人も無之此辭職に付願之趣不被聞食候様會津より殿下へ申入候處海防手當相成候丈は御宛行之道不相立候ては御差留之處も六ヶ敷譯に候段御沙汰相成候處決て何之備も入る事には無之陸地に引上げ接戦より外に策も無之候故刀一本にて相濟候譯と申切全相拒候由に御座候就ては閣老邊之處は格別差留向に無之候得共其下之處一橋侯を惡み候儀甚敷只今之處難を不生は閣老之不應迄にて今日を過候事と被相聞申候つまり此間に變じ候儀相違有之間敷と申説に御座候實に兵力は無之危き事と被察申候天下之人望は相離可頼處更に無之様子に御座候會桑之處は少しはつるばり候處も可有之候得共餘は全手切に罷成候由に被相聞申候

一長州之儀も永井戸川杯先月六日大阪出立廣島迄參候得共一段病氣と稱し井原引取候後不參いまだ談判も無之由に被相聞申候若哉不出來候得者如何可致事哉と又心配之

向に被相聞申候中途迄段々と人數も操出し居候得者是以何となく引揚候儀も出來申間敷實に大笑に堪不申事に御座候全體永井等へ含之趣は領地取上大膳父子之處も退隱と申義を申出させ候得ば山陵之一條に付大赦被仰出に相成賦に候間其廉を以是迄之通何も差支なく被仰付との諭有之賦と申説に御座候得共長州より不出來候而は何之策も不被行込入候事と被相聞申候

一板倉小笠原之兩人御登用相成候得共いまだ何も相變候儀無之是以因循之様子と被相伺申候畢竟幕吏之黜陟も相始候含と被相聞申候得共若哉沸騰を生し候ては我身も危しと申事にて川越侯之上阪を相待居是より事を始候得ば物議も相起候は都而川越侯へ打歸せ申可胸算と申説御座候右様身構を先に致し候位に御座候得ば大概程が知れ候事に御座候可歎世態と罷成申候此衰運を立直し候儀餘程豪傑にあらずんば出來申間敷事と奉存候會藩杯之處もいつれ明賢侯御來會と申場に不相成候ては逆も天下之治りは付申間敷と近來致方なく議論も相立候様子に御座候詐術權謀を以諸藩を愚弄致そふとは餘り氣強き仕方にて御座候見込通不參と相見得近來は餘程媚を求候次第

實にをかした事に御座候此旨大略申上候宜敷被仰上可被下候恐々謹言

十二月六日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛殿

【按】隆盛時局の推移に鑑み江戸の藩邸を不要と爲し引拂はんことを進言す藩廳幕府を慮りて逡巡す隆盛よりて引拂の至當なる所以を述べ之が爲責任を負はんとしたるなり別啓は一橋慶喜の不人望を告げ大監察永井尙志等長州差遣の事及び幕府の内狀等を報じたるなり蓋し隆盛は藩主父子をして王政復古の決心を強固にせしめんが爲かくは屢々幕府の失政衰運の狀を報じたるものならん（蓑田は當時側役なりしを以て隆盛の書は皆藩主父子に申告す）

本書送す（慶應元年十二月比か）

別啓長州談判として永井主水正等廣島表え出張いたし近日歸阪に相成候處如何之應接に及候哉至極秘事にいたし居候故頓と不相分長州より書取を以申出候趣も有之由に被相聞候得共不相洩段に承候へは永井等此度之談判は大に長人より愚弄せられ候世評に御座候夫故秘密にいたす譯與も申事に御座候いづれ追々に相分可申候間後便より委敷可申上俗説紛々御座候得共慥成論も不承又々永井等も廣島表へ出張可致との趣に被相

聞申候間此度之談判は決而不相調儀は相違無之此談判も又々長引候儀は無疑事に御座候近來細川侯之議論も相變上田休兵衛林新九郎之兩人は國元え被打下井口呈助與申者交代として被差出此人は餘程着實之人に而御座候由上田第一會津之手先に而御座候處國中におひて議論相起右之次第に及候由御座候細川正義に立替候はゞ頓與頼方無之もの與相成可申儀に御座候人數操出し等之儀も細川は御斷相成候由柳川も同斷之向に被相聞申候右兩藩は當月十日限には先手操出候儀は御達御座候由細川さへ右次第之事候得ば外藩は決て動き申間敷可討勢無之戰は出來不申事故此度之再討與申は橋會より主張いたし此時機に及候次第長え説込却而長を懷込候趣と被相聞申實に幕人恐しき術策驚計に御座候以上

【按】此書も長州使節及肥後藩に關する風説を報じたるなり別啓のみにて本書を送するを以て何人に贈りたるものなるや不明なるも十二月頃蓑田に贈りたるものならん

蓑田傳兵衛に贈る書（慶應二年正月五日）

新年之御吉慶御兩殿様御機嫌能被遊御越年恐悦之御儀奉存候陳ば長州御訊問之次第今

に至秘し居候故巨細分兼候別紙眞偽難計候得共手に入候付差上候全く愚弄せられ候姿にて一段此談判にて勢ひを却て墜し候時機に御座候迎も所置を立付候にも相當之儀は出來申間敷案に相違の向に被相伺申候幕府之見込通何も出來兼候様子に御座候益諸藩は動き不申勢ひ相成實に失望之姿に御座候近日大久保越中守上阪仕候付決て大策を立可申か若不被行候得ば此人物は只官路に上げて餌を以繋止候儀は萬々出來申間敷道不被行候はゞ必引込可申此大久保之進退舉動に付て幕府之運は定可申何迄に運立候哉大事之場合に御座候越前よりも中根雪江近來上京國論も儘に居付尊幕は屹と取止にいたし名分條理を以突立候由に御座候親藩さへ右様相離れ候勢ひ御推量可被下候此旨大略迄如此御座候頓首

正月五日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

【按】大監察永井等舊臘廣島より歸阪するや隆盛長州糾問の顛末を知らんとせしも幕府之を秘密にするを以て其眞相を知るを得ず漸く風説書のみを手に入るとを得て之を贈りたるなり

蓑田傳兵衛に贈る書 (慶應二年二月十八日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之儀奉存候陳者御當地之形勢も格別相變候儀無之藝州表之談判も未だ不相分當月八日比着之賦にて御座候由彌伺通之所置を以て參り候得ば決て承服不仕事は幕府におひても疾存知之譯と相考申候乍然戰を始候様子更に無之就ては何ぞ細工を致す賦かも不知事に御座候先此所置は表通之譯にて大赦とか何とか申者を以て至極寛大なる所置に出候も不被計事に御座候何れ當月中には様子相分儀に御座候間相知次第直様急飛を以申上候様可仕天下之形勢も此一舉に變替可致事と奉存候諸藩之模様も餘程相變幕威之衰弱を眞に知兼疑を被掛候ても思わ敷ないものと合點いたし候様子被相伺申候大道を相建候所いづれ心服可致世態とは相成人心之場合はより外に無他次第に成行申具眼之人は大に道而起し可申時と奉存候若哉戰相始候はゞ諸方に蜂起可致甲信二州の邊にも其崩相顯候由一度動立候はゞ瓦解可致事と奉存候大阪に於ても大久保越中守屢建言致候得共頓と相行れ不申病と稱し御暇願出候由東歸之含

と被相聞申候板倉侯は随分御宜敷小笠原候も今日の事に於ては是と申御失策は無之候得共何分御斷じ被成候處兩侯共乏敷込入との趣越前中根雪江へ相咄候由御座候其上板倉侯には腹心の臣に奸智の者有之此人專事を任し居候由是が第一之邪魔を致すと申居候由御座候勝安房守如き人物は只天下にをひて上等の人に可有之處却て氣違之様に幕人は申居候由大久保之建言も一向不通由に被相聞申候是位の急難に迫候ても人物を欲せざる事に御座候得ば衰運極り候事に御座候御苦察可被下候江戸表にをひて岩下君二度談判も有之候由英人は餘程打解け候由佛人の處至極幕吏と結居候間いまだ十分には參兼候半乍然佛より大に依頼の向相見得居候間必やり付可申との趣申來候何分近來幕吏大に横濱夷館に立入候儀を相禁じ御國人は尙更付添居候由にて存分の咄合出來兼候向に御座候必ず御世話被遊譯は有御座候間敷と相考申候此旨荒々奉得御意候頓首

二月十八日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

【按】慶應二年二月上旬幕府閣老小笠原長行等を再び廣島に差遣し長藩を處分せんとす然るに長藩は素より之に

應すべきにあらず從來幕府の長藩處分は事毎に失敗に歸し却て諸藩を制御するの實力なきを世に示し諸藩は時局の形行を傍觀して殆んど割據の狀あり隆盛等夙に時局の大勢を達觀し大久保利通等と密に畫策する所ありしが正月二十一日を以て長藩の木戸孝允土藩の坂本龍馬等と京師に會合し遂に薩長同盟を協定するに至るこの事當時未だ秘密に屬せしを以て蓑田には報せざりしものならん

桂右衛門に贈る書 (慶應二年三月二十九日)

近日暑氣相催候得共先以御健榮被爲成御座恐悅之御儀奉存候陳者委敷御咄申上置舍御座候處卒度失念仕居候處蒸氣船來る五日出帆之筈御座候段承候付考出候故荒増以書面申上置候扱中川宮様御附中村源吾儀は餘程御氣にも叶居候由にて一昨年比は暴客より大にねらはれ候儀も有之如何様武田等之妄物と懇意之譯有之右様之次第とは是迄は相考居候處出立前石川誠之助^{本州}相咄候は八幡之何と歎申僧に被爲託御祈願之御祈禱被爲命其使者源吾相蒙今にも毎月御代參勤居候儀は存居候次第に御座候處本土州人因州之人と兩人兼而八幡之僧へ不審之譚有之源吾家來と名乗り右之僧へ面會いたし後々密談仕掛候處彌疑心無之者と汲受候姿故恐多くも天位を被爲踏候能々御祈禱御願被遊候旨

申掛候處兼而其儀は深く相心得明暮相祈居候段相答候付右兩人は彌無相違密命を蒙居候儀と相心得是より大阪迄差越候付歸掛又々立寄可申と會釋いたし大阪之用を仕舞兩日過候て右僧へ立寄候處源吾殿へ書狀相認置候付相届吳候様にと一封差出候故相受取其場引取候而右之書面開封いたし候處彌不審之趣も相見得候付此儘差置候而は有害到來可致とて右兩人中途より立戻右之奸僧を誅戮いたし候由に御座候石川杯は右之書面は爲見由に御座候へ共全是と差て書認候儀は不相見得乍併何歟不審之譯とは相見得居申候兩人之内土州人は京師の戦に死候得共因州之者は今にも存生之由慥に相咄候儀に御座候宮様之思召には何ぞ御祈禱の筋被爲在右僧へ被命候事を右兩人源吾家來と唱へ段々申掛候故其邊之祈禱歟と右之僧輕々敷受取返答爲致歟も不被計候得共夫にも致せ誠に奇怪千萬之次第に御座候何分當時宮様之惡評散々之事に御座候間大久保へ談し置中村も左内も兩人共御國元へ引留置可申候間宮様之御方は宜敷申取置候様談し置候間此度蒸汽船よりは又々登京之含歟も不相知候付何と歟御工夫被成下御差登無之方御宜敷は有之間敷哉全體左内は不相拘候へ共第一之御歸依にて御座候故若哉右等之者が失

謀之事共御座候而は直様御國之者と相成其人限にて不相濟事候間御勘考被成下度此等之儀は書面に而は能く通じ兼御疑惑被爲在候事も可有御座と奉存候へ共一先申上候處宜敷御勘考可被成候いづれ御直に細事は可申上候頓首

三月二十九日

西郷吉之助

右衛門様

御侍史

【按】文久三年十二月土因兩藩の浪士等八幡の僧如雲が尹宮の内意を受け主上を呪咀すと爲し之を殺す隆盛中岡慎太郎より其事情を聴き當時宮の附士たりし中村源吾永山左内兩人の進退を顧慮し上京を差留んことを照會したるなり桂は當時の家老石川誠之助は中岡慎太郎の變名なり

大久保一藏に贈る書 (慶應二年五月十日)

御細翰忝拜誦仕候彌以御安康御勤務之由珍重奉存候陳者大坂御下にて細事御聞糺御申越相成候處湯治中にて旅先へ相達早々相廻奉達御聽候處餘程御安慮被遊候次第にて御座候左様御思召可被下候藝地破れとやら、之阿放事、迄も皆貴兄方御捕之事故ちつとも不動安心いたし居申候若哉相變候儀も御座候はゞ蒸艦貳艘も參居候付

直様御飛せらる筈と吞込居申候いづれ人數丈は先御見合相成候半與御察申上居候蒸艦出帆之節は湯治中にて御返事も不仕甚不埒之仕合に御座候此度之交代人數には決而驚出し候半十分勢も張れ候事與奉存候其許より之飛脚御見合相成居候處いまだ着不致爰許も夫故延引いたし申候先月廿一日限之期限を以御呼出との趣小笠原侯決戦之舍與申事相聞得候得共何分軍の出來候丈けに無之又寛々打替候半歟與被相察申候近來何方も使無之事情不相知候得共破立候は自然相知れ候筈御座候得共爲何様子も不相聞候付而は決策は相違いたし候半歟與被相考申候如何之形勢相成候半歟與日々御待申上居候事に御座候嘸御配慮之筈與奉存候○近衛御父子様より御兩殿様へ御狀參り梅券院儀京都へ被止置候様御靈前御祭をも被爲成度左様無之候而は内府様御孝道も不被爲立與の趣御願申來候得共全體わるものゝ儀に候得ば如何にも被止置候處不宣事故御返書之儀は御一通にて委細貴兄より御聞取被下候様被申上筈御治定相成候付貴兄へは私より委細申上越候て程能御斷申上御暇相成候様御働被下度御願申上候貞君様も被爲入其上梅券院を以御祭不被成候而は御孝道不被爲立との趣却て御不孝道之譯御母君様を餘人を

以御祭らせ被遊候趣御孝道に逆候御事與奉存候中將様にも思召には相逆候譯に候得者婦人之奸は一番恐しきもの候間御暇相成候方却て御爲にも可宜委敷貴兄へ申遣候様御汰沙被爲在候間宜敷御計可被下候御當地も御變革御手初も有之御家老方々御受持相立是迄之御月番廻は相變じ譬御出勤無之共宅におひて御聞かせられ至極御振はまりにて初掛候付追て道も相開け候半と相樂居申候仰出等之寫は長藏より差上候由承候付相省き申候いづれ俗論も可相起候得共當日迄は何も不申觸様被聞込申候何とも云わぬ様にとは決して不出來ものに御座候間目當を定是非仕途までは不動譯に御座候いまだ申上程之愉快は無之近々御聞に入れ候程之事もあれかすと祈入申候其御許之儀はどふても動き之付候はど早々御申遣可被下此旨荒々御報迄如斯御座候恐惶謹言

五月十日

西郷吉之助

大久保一藏様

追啓上煙草一包差上申候間内田氏と御配分可被下候

【按】隆盛既に長藩の木戸等と薩長聯合を協定すよりて藩論を決せんとし二月下旬小松帶刀等と歸藩し先づ藩政

改革及陸海軍擴張の急務を進言すよりて五月藩政の改革あり隆盛時に大番頭にて側役の職にありしが改革の結果大目付を命ぜらるる然るに隆盛は再び上京して大に爲す所あらんと期せしを以て之を固辭し只管時機の至るを待つ此書湯治中大久保の書達したるを以て之に答へたるなり梅券院は曾て島津家より嫁せし近衛忠熙の故籙中郁子附の老女ならん隆盛梅券院の性質よからざるを以て久光に乞ふて歸國せしめんとしたるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應二年五月二十九日)

兩艦より之御細翰忝拜誦仕候御兩殿様益御機能被遊御座御互恐悅之御儀奉存候次に御宅におひても御一同御様元氣被爲在候間少しも御懸念被下間敷候小弟隨而異儀相勤罷在候間左様御放慮可被下候陳者出兵之一條各藩へ相達候由逆も達は相成間敷與相考居候處案外因循過激を發し驚候次第に御座候就而者閣老へ建白書御持參にて御討論之段乍每貴兄之御持前とは乍申雄々敷御論實に御兩殿様御満足被遊餘程大久保か出來たと御意被遊我々共に到り難有雀躍此事に御座候御建白之書面と云ひ御議論と云ひ相對して優劣無之誠に天下之耳目を御定有之候儀御國家之美事後世青史に正著たり幾度も感誦此因循國も正論國與相變じ候心地にて鹿兒島が廣き様覺申候御察可被下候○五卿方之一條御書面は勿論海江田よりも委敷承候處護送之暴命を下し候由相驚候譯に御座

候最初筑前俗論之者より醜候譯は御案内通之事候處夫には大に力に致し候譯も有之肥後直次郎へ尻舞いたし候處より俗論雷同いたし候由護送と申日には御國許より蒸艦を相廻杯との事迄も言出居候向に被相聞熊本邊よりも懸念に相考候位之趣に被相聞申候既に監察乘入與申段に相及候處飛而御國許へ直次郎は立歸て黒田嘉右衛門踏込説破いたし候處監察も屈服其上肥後藩古賀富二國許へ立歸筑前之形勢得と言上に及候處薩州之議論正敷尤之事にて餘程後れを取り候逆有志中より責を受候位にて再筑へ參候節は打て替て正論を立込國論を以監察へ責付如何に臺命與申ても護送之儀は不相成とまで申立候由夫に付監察より臺命、、、押詰候處何ぞ、與申譯には無之幕府之失體に相成候儀を行ひ候而は失體を助ると申もの故幾度も陳奏いたすと相答候由に御座候左程まで議論を張詰居候末之事に御座候へば此方より不變候へは頼ぬ肥國と申ものよもや變じはなるまい與被相察申候夫位肥薩の論一致いたし候處肥前も初は兩端を持し罷在候得共皆同體に歸し久留米は初より護送之儀君命與持出候故今更持直しも出來兼はじまらぬ景氣に御座候山監察もあぐみ果再達しもならぬ模様與被相聞申候此算盤より

押へ候より九州一致可致糸口と相成筑前之俗物を打破候へば必一致に趣候向と見込黒田罷歸候儀に御座候故折角評議中に海江田立歸其御許へは詳に事情も不相通事故少しは趣も相變候へ共御兩殿様達御聽其上海江田は中將様へ拜謁言上相成委細御聞取相成候上先づ筑前に而今形しつと踏占居候而尾藩へ最初より之扱も有之事故得と情實申入周旋爲致候はゞ可宜との御沙汰に相成筑前へは吉井幸輔御遣に相成候儀に御座候只今筑前之處は纔監察之一人筑之俗物も早櫛橋杯之類は悔悟いたし山城之黨は大に五卿方へ通じ少し有志之ものは内にて起り纔に道に立候はゞ一變可致勢も相見得居候由に御座候夫に付ては監察へ此筑前に於ひて五卿邊之處又は各藩之見込等は御熟覽被成候故一先づ大阪に御歸之上今一議論被成是非各藩見込候處御周旋被成度與追掛候處餘程恐怖いたし是非引取度情と相見得候へ共何分夫形被相退候而は全筑前より被欺候場に相當り且幕府之機嫌を挽申候與筑前之俗物見込む處も有之無理に引留居候様子に御座候由只此監察一往歸阪いたし候與大計ても筑之一變は機相見得候由に御座候夫に付得と相考候處大阪に於ひて貴兄之大正論に疵を付候ては不相濟此五卿方之處も小事とは申

ものゝ王家を起すの一端にて勤王家之欣慕する御方々に候へば大に人心に關係する譯にて纔之事より大正論之疵と相成候ては不相濟儀と苦慮此事に御座候處今通にて筑にては變を引出す様之事には至り申間敷若尾張より之周旋は出來不申との事にて幕府之方へは黙し被下候而宜敷は有御座候間敷哉幕府より命を下し候而も不奉與責候はゞ國元へは直様申遣置候處如何様とも其御方へは不申越候付國元之見込一向不相分與御すれ居被下候へば宰府之處は隨分此方にて可相働與吟味仕動かし杯爲致間敷候付左様御含可被下候今之處で大阪へ出掛候へば動出すは早かろふと相考居申候木戸より品川へ之書面中に妄舉妄動は彼の欲する處と相見得候幕之勢衰弱を以欲する譯更に無之いづれ名とするものを失ひ候故今一つ曲を與へ是を以外國之應援を頼むならん與推察仕候於外國戰を起には餘程條理を立候付是位之償金を與へ候故應援を頼む杯と云れもせず受も致さん故究策より出候半畝與相考申候如何○五卿方大坂に於ひて動き立危きに臨み相成候得ば長州も情義に於ひて安閑與いたし居不申いづれ打破可申候付妄動を欲するの策に陷候而は不相濟事與相考候付存分見込之處申上候間宜敷御勘考可被成下候何

分海江田君より御聞取可被下候恐惶謹言

五月二十九日

西郷吉之助

大久保 一藏様

追啓上英國志與申書物御探被下貳部計早便御下可被下候いまだ君公には御覽不被遊由御座候間御願申上候

【按】曩に小笠原閣老廣島に至り長藩の重臣及び三支侯を召喚するや皆病と稱して應せず既にして長州脱藩中倉敷の代官所を襲ふ是に於て幕府遂に征長の令を諸藩に下す然るに薩藩は大久保等征討の理由なしとし大阪留守居木場傳内をして出兵を拒絶す當時薩藩の進退は諸藩の屬目せし所にして征長の舉に至大の關係ありしを以て幕府大に之を憂ひ板倉閣老大久保を召喚し出兵を内諭す大久保驛を裝ひて大に幕府の不當を痛論し斷然之を拒絶す大久保其顛末を隆盛に報するや隆盛答書して大に推稱したるなり五卿云々是より先幕府目付小林甚六郎筑前に至り將に五卿を引致せんとす藩廳よりて黒田清綱をして兵を率ゐて太宰府に急行せしむ其形行を報じたるなり

蓑田傳兵衛に贈る書 (慶應二年六月十三日)

此度英人御饗應向に付夷人與慢り配膳向輕蔑之振舞共若哉有之候而は不相濟譯に御座候間其邊之處我々共より書付を達置吳候様木藤角太夫より承候付草稿相認御相談申上

候付可宜與御思食候は今日磯に於ひて右之趣御達置被下御而は何様有御座哉此旨早
早申上候以上

六月十三日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

達書の草稿

此節遠客御招請に付而者皇國之爲深思召之譯被爲在萬國普通之禮節を以御會釋被遊候付而者配膳向至極念を入決而輕蔑之振舞無之御高儀奉感服候肝要に可被相心掛候此旨分而相達置候様

【按】六月十七日英國公使パークス軍艦三艘を率ゐて鹿兒島に来る蓋し佛國の野心を抑へんが爲め薩藩と親交を結ばんとするなり隆盛英人の接待につき禮を失せざる様豫め諭達の必要を認め草案を作りて蓑田に贈りたるなり

帖佐彦七に贈る書 (慶應二年六月十八日)

今日も御出勤珍重奉存候陳者英人と談判之儀に付書付取調方御願申上度御座候に付九

時過より下會所へ相集其上英艦差越賦に御座候就而は松木安右衛門え引合不致候而は不相叶儀有之何卒御出被下度四ツ後參り候様相違候に付乍御苦勞御來訪之處奉希候以上

六月十八日

西郷吉之助

帖佐彦七様

【按】隆盛パークスと應接せんとし談判につき豫め書類取調の必要あり乃ち寺島宗則に出會を依頼したるなり下會所は町の取締所松木安右衛門は寺島の前名なり

岩下佐次右衛門に贈る書 (慶應二年)

一兵庫開港之儀は上天子より下萬民を欺て外國と約定相結候儀萬國普通之條約與難申候付右之譯を以幕府を相責候様向て及談判候處政府與約定いたし候譯に候得者内輪之混雜は決而外國人之差構事にも無之勿論勅許與申儀も相望候事に無之與申募餘程幕具有之破談之勢に成立候處得與日本之情實を申解其上利害得失委敷申聞候處初而會得いたし夫より彼之底意不殘打明候向に而大に幕府之失體を申出候場に立到候而

全熟話之都合に成行候事に御座候左候而彼等申聞候にはいづれ右之事件外國人に存いわれ無之候付何方より承候與不申而は相濟申聞敷其節薩摩之名目を出し候而は決而不都合之儀も有之候半彼等も出したくは無之與申事故其邊は少しも差障無之薩摩にて承候旨を以幕府に相迫候様申聞候處夫こそ本道之議論與申ものよと大に悦び候事に御座候然共直様突掛候向與は不相見得候へ共幕府之不條理なる次第にてあくみ果候様子に御座候間時機に依ては申立候も不被計候得共極て申立とは不申聞事に御座候

一兵庫港え異船渡來之節勅使を被差向候様子如何之見込を以相盡候哉與承候付其節は薩摩之人數 勅使之御供に而異船え乗込期日を引延し是非諸侯を京師に集會し全幕府之手を相離し朝廷より之御所置に振替候含にて罷居たる由申聞候處如何之譯に而其策崩候哉與申事故其節幕府より頻に相迫朝廷より之御所置に相成候而は辭職仕候外無之段申募終に勅使を繰止候付皆策致相違建白之書面與相離候故如此疑迷之譯に立到殘念之旨申聞候處實に悦び候而彼等も大に殘念がり候事に御座候

一 朝廷之御所置與相成候て公卿衆之御談判與相成可申哉是迄政府閣老邊え引合之場如何可致賦歛與承候付其節は朝廷より五六藩之諸侯に被命專引受兵庫港之運上は朝廷に相納め萬國普通之條約を以相結信義之交其時こそ可相調只今之如き幕吏之賄賂を貪不廉之次第與は大に違ひ外國におひても都合可宜勿論日本におひては是より相開本道之事に成行可申與決定いたし居候旨申聞候處至極尤之議論與申事に御座候

一 右通之次第外國より開立候而者大ひに不都合到來いたし日本之人も不服之譯も出來候半いづれ其邊之處は急速取掛候ては宜間敷候付能々機會を見合是非相盡吳候様申事に御座候

一 三港之稅三分一丈けは是非天子に相納候様度々英國より幕府に申立候趣申聞候左様無之候而は大君與相唱候儀不相叶日本におひては兩君有之姿に而外國えは決而無之事に候いづれ國王唯一之體は不相居候而は相濟間敷與申事故頓と日本人外國之人に對して無面目事與申置候

一 日本條約之五ヶ國は諸藩に勝手に相交候儀觸達相成候様政府に可申立左候へば大に

難澁可致事に御座候勿論政府之欺謀は不被行様成立自然政府之不條理なる儀も外國之人可相分申聞候處大に悦び候事に御座候

一 江戸え相詰候人に何篇打明相談可致人物は不罷居候歟與相尋候付決而無之段申聞候處何卒慥成人物差出吳候儀は相調間敷哉與申事故隨分差出可相成與返答いたし候處合符を渡し是を持參之人なれば不疑與申置候事

【按】隆盛十八日寺島宗則とパークスに應接し兵庫開港のことにつき日本の國體を説き大に幕府の處置の不當なるを告ぐパークス漸く朝廷と幕府の關係を知り爾後朝廷の爲めに盡さんことを誓ふ此書によれば隆盛等の眞意は兵庫開港を絶對に不可としたるに非ず大藩諸侯を集會し朝廷の手に移して堂々と萬國普通の條約を締結するにありしことを知るべきなり此書宛名不明なるも七月十日大久保に贈りたる書に依れば岩下方平に報じたるものならん

大久保一藏に贈る書 (慶應二年七月十日)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀御互難有奉存候陳者長防之戰爭大概宰府出張之方より山田孫一郎を被差遣承合候形行申來候て早相分候に付早速御人數被差出候賦にて一陣御手當相成候處三邦丸着帆能都合にて御座候正治より番兵二組被差遣候筋に

申來候得共最早一陣は御手當相成居候故其儀も被差出賦に候處船廻出來兼些痛損有之に付三組丈此節被差出都合に相成跡三組は一七日計は後れ可申候得共却て一時に着坂より兩度に着候方勢を張候半かと奉存候乍然痛處有之無據ちと手數には候得共宜敷勢に相成大幸之事に御座候出兵御斷之御建白書御名前之處早速御許容被爲在候得共英人着涯之事にて大混雜中殊に機會を以其運は御許可にて可相付段申來居候少しも不取急事に御座候又朝廷迄之御建白書中將公御自身様御添削被遊御手自御認相成御差出之都合に相成御互に難有次第に御座候英人來着段々談判之始末は岩太夫に申上越候に付文略仕候大概見込通やはり付候賦に御座候得共欺かれ候得は無致方隨分幕手を英は打離候賦に御座候何分にも能都合にて大幸此事に御座候

長州に於て此度之始末餘程出來候事にて端を開く所から破た處迄間然する處無御座候此處第一之譯と相考居候處十分やり應し候に付今之處にて如何なる佛人たりとも應援可致道相絶申候半諸藩に於ても益々出兵は致間敷是より王室之興時來候半と雀躍此事に御座候

熊本藩森惣四郎使節として入來候に付應接に私立候處全くの幕論にて致方無之に付少は論詰置申候彼之御方より手扣書持參にて鶴崎へ御人數被差出候に付何篤御教示御頼被成との趣に御座候依此御方様よりは大阪に於て國論を以て御建言相成候通之事にて其御方に於ては御出兵被成候はゞ此度之處天下競て討入申場合に到兼候半其節は御動搖不被成始より終迄能御貫相成度態と御使者を以被仰進故一言申置との趣を以御返詞相成候處案に相違致候向にてすこゝ引取申候決して説客に參候半京都之人數は一種の論を立御國元之處は尊幕之論と肥後藩にて多く申觸居候由に御座候故大概説伏候賦にて參候半と存申候肥後論之危事實に可笑次第に御座候

水戸より之書面相達候に付開封候得共差したる事も無之其儘差上候間御落手可被下候

七月十日

西郷吉之助

大久保一藏様

書翰

二六七

【按】六月二十八日幕兵遂に長藩兵と衝突し愈戦を開き廣島口は互に勝敗ありしも石州口及小倉方面の幕兵は連戦連敗するに至る幕長開戦の報鹿兒島に達するや藩廳は直に京都守衛兵を増派し藩主父子は朝廷に建言する處ありたり此書此等の事を大久保に報じ且つ熊本藩使節應接の事を告げたるなり此書によれば隆盛が長藩の捷報を如何に歡びたるかを知るべし書中岩太夫は家老岩下方平を云ふ

大久保一藏に贈る書 (慶應二年七月二十八日)

御兩殿様益々御機嫌能被遊御座御互恐悅之御儀奉存候陳ば小倉邊の事情等川村より細事御聞取被下候税所にも上阪いたし候付何も文略仕候其御地之形勢日々思ひ出し居申候今當分にては逆も罷登程合も不相分貴兄には餘り強欲と奉存候稀には交代も仕度御相談申上候藝國之御使者參り候得共皆因循先生方に而是迄藝國にて盡力之次第を爲御知に相成與の譯にて格別譯も無之候其御地之詰合之者は矢張幕論と被相聞嫌疑説を申送候由にて夫故動搖いたす譯も有之由に被相聞申候叱も不相成位にて尋も不致論は猶以之事に御座候只咄さへ恐ろしかり候て双方不差障やうに相咄居候先生方なれ共小笠原閣老には少し角を立て被相咄申候伯州が和議を宍戸杯へ相謀候説相唱候由夫の名と

いたし紀州杯は引掛候様子に御座候小倉邊同様之譯にて大物議相起候由可笑な事に成行大慶之事に御座候勝先生上阪にては少し可見所も出來候半歟と相考一左右御待申上居候事に御座候此旨荒々奉得御意候恐惶謹言

七月二十八日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】廣島藩使節到來のことを報じたるなり此書によれば當時隆盛が時局の推移を見て攸々と藩國にのみ居るを遺憾としたるかを知るべきなり

黒田嘉右衛門に贈る書 (慶應二年九月二十五日)

御安康奉賀候陳者小弟不快有之暫は平癒之體に無御座候間被相下置候陸軍方の諸書付類貴兄へ御願申上候付伊勢様へ差上被下度奉合掌候此旨乍略儀以書中御願申上候頓首

九月廿五日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

要詞

【按】黒田は當時軍賦役頭取にて陸軍掛を兼ね此書陸軍方の書類返戻方を依頼したるなり伊勢とあるは家老島津伊勢を云ふ

小松帶刀に贈る書 (慶應二年十二月九日)

其後は御動靜不奉伺候處先以御安泰可被成御座恐悅之御儀奉存候陳ば大坂表砂糖私方へ御振向相成候様御差分之一條殊の外六ヶ敷何分急速運兼候得共次第々々に議論も相縮候向にて至て大慶奉存候いづれ一同不安心の處にては又々煩も相生候譯に御座候得ば最早御手を被下候節細々吟味を盡し安心の所先決議相成候處と奉存候付御渡相成候御書付もいまだ相下げ不申議論中に御座候乍然最早央に至掛候へ共全議論相定候處に至兼候付得と吟味を盡し其上御發相成候様取計申候付兩三日は相滯可申儀と奉存候扱一昨朝五代才助より承候へば英艦兵庫碇泊相成通辨官薩道と申者より小松太夫並私滯京之趣承候付是非面會いたし度且御國許へ差越横濱へ歸掛にて「ミニストル」より被託候趣も有之候に付大阪御屋敷迄罷出京師より御下阪迄相待候而誰ぞ御兩人之間一人へ面談致し度趣聞聞丸乗頭井上新左衛門へ相付申達候由全體右之軍艦へ御國元開成所へ

罷出居候本藝藩人林謙三と申者航海修行にて乗組居候而旁周旋いたし候趣に御座候就ては幸私下阪いたし居候故早々兵庫之様可參候付其港へ相待吳候様申遣五ツ時分より打立船にて參候處早五代よりの返書相達薩道には陸地に相待居候處故早速小豆屋へ呼入談判に及候處第一の趣意は英國にをひても幕府は日本國中の政權を握候處と相心得條約を結候次第に御座候處近來幕府熟考仕候へば御國の英國との戰爭並に長國との取合等皆幕府より所置いたし可申之處却て外國と互の争と相成夫のみならず長國の再討より開兵の始末前後いづれも譯の分らぬ事畢竟長州より京師にての暴發の節は不敬の譯故薩州も幕と俱に相戰暴動を挫候事に有之伏罪の道相立候處譯もなく戰を初諸藩も不應時機に相成候處討破の力無之に依りては又々譯も立ぬ止戰をなし候次第委敷相考候へば完て攻亡之止戰と相成候ものと相見得申候ヶ様に譯の立ぬ戰を致すなれば皆諸侯を討すしては相成ぬものに可相成道理又長州一國を攻亡しかたきものか如何して政事を旋し可申哉是にて顯然と相分り候儀に御座候へば如此空權の者と條約を結居候ても實に無益の譯に有之英國におひては何ぞ政府と計ひ條約を取結譯には無之日本權握

の方向方なり共可結儀に御座候得共さらばと申て權握の人も無之如何致して宜敷ものにや歸する處を不知乍然外國人より權の立様に諸侯に力を添候儀は決して可有道理に無之と獨歎息の意を以我國を振起さんとくれぐれ誘いたし候事故幸「ミニストル」よりの口氣も有之候付薩道の意底を探らんが爲少し猶豫の色を顯し段々皇國の爲に可盡力賦にて是迄相働候得共頓と寸功無之のみならず却て政府の威權を挫くとのみ汲受善言却て惡言と相成候次第唯今にては朝を我ものに致し成し候故手の出し様も無之場合に立到候故兵庫の開港に付てももくろみも有之候得共致し方無之に付兩三年も傍觀して居可申賦に御座候と返言に及候處大に驚き三年とは何事と餘り氣長事には無之哉來年は攝海も開港之期限に相成長州之儀も今通にては相濟申問敷何とかきまりを付可申候付此兩條の處を以て何とか働様も有之そうに被思候と申す事に御座候右の次第を以能々相考申候處佛人幕府へ計を相結び私を營み夫より不平を生じ候儀には相違有御座間敷と愚考仕居候何分面白口氣に御座候間佛人は追付隔絶の色を顯し可申と奉存候付此機を見て何とか策も有之事の様に被思申候是て英人の好處に計心に向候て動立候へば

必ず佛へは怨を合候事に至可申此隔絶の場合に「ミニストル」交代共相成候て先達より御咄の人共參候へば我國の力を得候譯にて矛盾のものと不相成兩國の力を得候好機會も出來候半かと相考候事に御座候其外小事の儀共段々相咄候得共兩三日中御直話可仕此一條決て御悅被下儀と奉存候付荒増申上候小松大夫へ「ミニストル」より宜敷御禮申上吳候様との趣再三申問候間左様御合置れ可被下候此度一左右迄奉得尊意候恐惶謹言
十二月九日

西郷吉之助

御侍史
帶 刀 様

【接】是より先長嶽の戦争は遂に幕府の大敗に歸し加ふるに大將軍は七月十九日大阪に死す是に於て幕府は解兵を令し一橋慶喜等また從來の態度を一變し諸侯集會國是決定の議を主張し朝廷より諸侯の上京を促す然るに當時京師に於ては幕府黨再び勢力を得到底勤王黨の意見行はるべき形勢にあらざるを以て薩藩は久光上京を辭退し隆盛小松帶刀と代りて上京す此書は隆盛砂糖交易の用を帯びて大阪に下り會々英公使の通譯官サトーと會見し其の顛末を在京の小松に報じたるなり書中に薩道とあるはサトーの事なり

大久保一藏に贈る書 (慶應二年十二月十一日)

明朝六ツ前時分より小室山狩に小松太夫御出の筈にて貴兄御同伴の思召にて御座候間

決而爲御知參候事與相考候得共爲念申上候付必御氣張被成間敷哉出立掛御誘引に上り可申候以上

十二月十一日

吉之助

一 藏 様

上置

【接】在京中遊獵を誘引したるなり

大久保一藏に贈る書

別紙内膳殿より被相廻候間御覽濟之上は御返納御願申上候以上

三 日

吉之助

一 藏 様

大久保一藏に贈る書

別紙今日江戸飛脚より到來いたし候間差上申候御覽後は太夫へ御廻可被下候以上

二十八日

吉之助

一 藏 様

大久保一藏に贈る書 (慶應二年十二月三十日)

御不快之由折角御加養奉祈候扱別紙之趣近衛様御方より申來候由如何返答可致哉承候付いづれ貴兄へ御談合可申上旨申置候付御平快之上何卒御參殿被成下候而得と御申解不被下候ては難相濟御座候間御序を以御氣張被下度奉願候此旨卒度奉得御意置候頓首

十二月三十日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【接】近衛家よりの書を廻送し參殿を求めたるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年二月晦日)

御分袖以來不能御音信候處彌以御安康奉賀候陳者當月朔日安着いたし候處三四日は病氣に而引入居御上京之説は直様言上不仕一同之評議に掛一決之處を以言上之舍に而御座候故形勢見合居候處不罷歸内に御大故之時を以御上京可被爲在事と段々建白之向も

有之候由に而執政方も難澁被致候趣に御座候三五日も相過候付一同御會議相窺候處備後殿初執政中御側役中都而出席相成山内イチ、は湯治に而御座候故罷歸候様申參相揃候而議論持出候處案外老先生方之御議論盛なる事に而速に御上京之儀相決大慶之事に御座候此度之衆議不相決候歟又は御決定不被爲在候得者退身之合御座候故強く申建も不致候得共案外之事に而我輩は飛揚此事に御座候御遙察可被成下候夫故翌日は桂家諷訪家御兩人與私も御前え罷出具に言上仕候處直様御承諾被遊候付十三日夜半より出帆いたし容堂候へ御使者相勤候而罷越巨細申上候處氣味能御返答に而生再不罷歸與迄被仰候由至極之御決心出來被爲難有次第に而御座候三月中を限與御定相成私之滯在中に御上京御廣め相成餘程御はまり出來候段福岡杯咄有之候夫故昨日御發し別紙之通被仰出候間いづれ三月廿日比に御發途之御賦に御座候間其御許之御手當等は宜敷御願申上候宇和島は餘程因循之御説に而御上京被成與は御返答被爲在候得共無覺束被思申候嘸御待長御座候半與案勞仕居候得共無致方延引罷成申候小松太夫えは別段不申上候付宜敷御執達奉願候頓首

二月晦日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】昨年十月隆盛等の上京するや幕府黨の勢力益盛にして山階宮及大原重徳以下二十二人の京紳罪せられ十二月五日一橋慶喜愈大將軍を拜す然るに二十五日孝明天皇崩御あり隆盛等大に之を哀悼し益時勢を悲觀せしが一月十五日に至り有栖川宮以下の勤王黨多く大赦に依り宥免せられ尋きて三條以下の五卿もまた宥免歸京を命ぜらる是に於て隆盛等機會至ると爲し小松大久保等と議し愈大藩諸侯の集會を計らんとし二月上旬歸藩す當時藩には猶佐幕家ありしも有志の士は大に奮起し既に久光の上京を建言せし者ありよりて直に藩論を決し且つ久光の承諾を得て同月中旬土佐より宇和島に赴き山内容堂伊達宗城等の上京を促して歸藩し三月二十五日愈久光を奉じ陸海軍の兵士七百餘人を率ゐて上京す此書歸藩後の行動を在京の大久保に報じたるなり。書中山内は作次郎、イ、チは伊地知壯之丞、桂家は家老桂衛門、諏訪家は家老島津伊勢を云ふ

大久保一藏に贈る書 (慶應三年五月二十三日)

御懇書難有拜見仕候陳者大中二卿へ順序區別の次第は委曲申立に相成候方可宜乍然兩卿之參内は三藩之御不參にて六ヶ敷又御進め申上候儀は出來不申譯に御座候得共兩卿之御決心にて御參内被爲在度思食にて御止め可申上譯に無之事に御座候間其邊は兩卿之御趣意に打任置候て宜敷は有御座間敷哉何卒貴兄御氣張被下度奉合掌候頓首

五月二十三日

吉之助

一 藏 様

【按】五月二十三日長州處分及兵庫開港問題につき朝議あり當日大久保利通大原、中御門二卿へ建策の事ありて之を隆盛に計る隆盛よりて之に答へたるなり是より先久光松平慶永、山内容堂、伊達宗城等と議し朝廷に人材の登用を建議し大原、中御門等の諸卿を推選す然るに二卿は既に王政復古に同意し岩倉具視等と通じ居たるを以て攝政二條關白等二卿を過激家と爲し排斥す隆盛二卿の參内を不可としたるは之が爲なり久光等また幕府に建議して長州處分兵庫開港の二問題については先づ長州處分を先に決すべきを以てす然るに當日の朝議に大將軍急に久光等の參内を促す久光等幕府の眞意當日の朝議に兵庫開港問題を先決せんとするあるを知り三藩（薩、越、宇）議して長州處分の事決せざる間は參内を辭せんと約し敢て參内せず書中三藩の不參とあるは之を云ふ

大久保一藏に贈る書（慶應三年五月二十八日）

今夕より柴山同行に而小松太夫之所へ參り横濱英人へ申含方之儀打合申度御座候間貴兄も何卒御出懸被下度奉合掌候頓首

五月二十八日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】柴山良助をして英人へ交渉せしむることにつき會合を求めたるなり

後藤象次郎に贈る書（慶應三年七月二日）

昨日者遠方迄御來訪被成下奉深謝候明日御發足之段小松へ申聞候處差掛御煩數事と奉存候得共今日四時頃より木屋町柏亭におひて離杯献し度御座候付先日御出會被下候御人數は勿論此度御上京相成候御兩人様にも何卒御誘引被成下度寛々御面會いたし置度舎に御座候故御同伴被下候處偏に奉希候いづれ以參右旁可申上筈御座候得共乍自由以書面奉得貴意候頓首

七月二日

西郷吉之助

後藤象次郎様

安詞

【按】是より先後藤象次郎長崎より上京し隆盛等と會合して王政復古の説を賛成し盟約を締結す後藤等よりて歸藩して藩主を説かんとし七月三日京師を發す其前日隆盛後藤等を招待して離盃を酌まんとし旨を通じたるなり

大久保一藏に贈る書（慶應三年七月二日）

今日の離別會には是非可參舎に御座候處腹痛不相止難儀いたし候付何卒御助合被下度奉合掌候將又昨日後藤より承候趣も有之參上委曲可申上相考居候處其儀も不相調不本懷之仕合に御座候今朝太夫へ詳悉申上置候付とうぞ御聞取被下度は又乍自由以書中奉

得御意候頓首

七月二日

西郷吉之助

大久保 一藏様

【按】病氣の爲め後藤等との離別會に參會し得ざる旨を通じたるなり

山縣 狂介に贈る書 (慶應三年七月七日)

御一別以來不能御音信候處強暑之砌無御障可被成御座珍重奉存候陳者御堅約申上候後土州後藤象次郎長崎表より參來容堂侯御歸國甚殘念がり大に發憤致し大論を立茲元御合手は雅俗共に同論に歸してしまひ其上死を以て可盡と盟を立候て弊邸へも談判有之候儀にて實に渡りに船を得候心地致し直様同意致候事に御座候夫故色々日間取に相成遅引に及び候儀甚不相濟嘸御案勞の筈と是のみ苦心仕候事に御座候延引之次第何卒御海恕可被成下候右に付ては後藤より盟約書相認是を以て議論一決致候手段に御座候故右之書面差上候に付得と御覽可被下候後藤にも當月三日出足歸國致し候に付國論決着

の成行は一左右有之賦に御座候間相分次第又々可申上候得共御出立後相變候手續の次第申上度に付右様御含可被下候別紙後藤よりの書面御異論之處も被爲在候はゞ何卒村田へ被仰聞可被下候尙御國論之處も不苦分は御洩被下度奉希候餘は細大村田より御聞取被下度文略仕候是非小生可罷出筈之處難事紛々難相逃不得止次第に御座候間宜敷御汲取可被下候此儀荒々奉得貴意候恐惶謹言

七月七日

西郷吉之助

山縣 狂介様
品川 彌二郎様

別紙

薩土兩藩盟約書

約定之大綱

一國體を協正し萬世萬國に亘りて不耻是第一義

一王政復古は論なし宜しく宇内の形勢を察し參酌協正すべし

一國に二帝なし家に二主なし政刑唯一君に歸すべし
一將軍職に居て政柄を執る是天地間あるべからざるの理なり宜しく侯列に歸し翼戴を
主とすべし

右方今の急務にして天地間常有之大條理なり心力を協一にして斃て後已ん何ぞ成敗利
鈍を顧るに暇あらんや

皇慶應丁卯六月

約定書

一方今皇國の務國體制度を糾正し萬國に臨て不耻是第一義とす其要王政復古宇内之形
勢を參酌して下後世に至て猶其遺憾なきの大條理を以て處せむ國に二王なし家に二
主なし政刑一君に歸す是れ其大條理我皇家綿々一系萬古不易然るに古郡縣の政變じ
て今封建の體と成り大政遂に幕府に歸す上皇帝在を知らず是を地球上に考るに其國
體制度如茲者あらんや然則制度一新政權朝に歸し諸侯會議人民共和然後庶幾は以て
萬國に臨て不耻是以初て我皇國の國體特立する者と云ふべし若二三の事件を執り喋

喋曲直を抗論し朝幕諸侯俱に相辨難枝葉に馳せ小條理に止り却て皇國の大基本を立
つ今日堂々諸侯の責而已成否顧る所にあらず斃而後已ん今般更始一新皇國の興復を
謀り奸邪を除き明良を擧げ治平を求天下萬民の爲に寛仁明恕の政を爲んとて此法則
を定る事左の如し

一天下の大政を議定する全權は朝廷にあり我皇國の制度法則一切の萬機京師の議事堂
より出を要す

一議事院を建立するは宜しく諸藩より其入費を貢獻すへし

一議事院上下を分ち議事官は上公卿より下陪臣庶民に至るまで正義純粹の者を選擧し
尙且諸侯も自ら其職掌に因て上院の任に充つ

一將軍職を以て天下の萬機を掌握するの理なし自今宜しく其職を辭して諸侯の列に歸
順し政權を朝廷へ歸すべきは勿論なり

一各港外國の條約兵庫港に於て新に朝廷之大臣諸太夫と衆合し道理明白に新約定を立
て誠實に商法を行ふべし

一 朝廷の制度法則は往昔より律例ありといへども當今の時勢に參し或は當らざる者あり宜しく弊風を一新改革して地球上に愧ざるの國本を建てむ

一 此皇國興復の議事に關係する士大夫は私意を去り公平に基き術策を設けず正實を貴び既往の是非曲直を不問人心一和を主として此議論を定むべし

右約定せる盟約は方今の急務天下之大事之に如く者なし故に一旦明約決議之上は何ぞ其事の成敗利鈍を顧んや唯一心協力永く貫徹せん事を要す

六月

【按】隆盛等義に薩、越、土、宇四侯の上京を計り王政復古の目的を達せんと期せしが久光等の上京するや幕府黨は依然として朝廷の實權を握り毫も久光等の意見行はれず加ふるに四侯の意見まに一致せざるを以て隆盛等到底平和の間に目的を達すること能はざるを知り長藩と聯合して斷然兵力を以て目的を達せんことを久光に進言す久光も今は大に決心する所ありて隆盛等の議を納る是に於て隆盛當時藩邸に在留せし長藩土山縣品川の兩人を久光に引見せしむ久光よりて兩人を親しく引見し京師の形勢を説き二藩聯合して大に盡力せんことを以てし之を藩主毛利敬親父子に告げしむ隆盛等もまた山縣等と協議する所あり即ち山縣等は先に出發して國に歸り隆盛は後より長藩に到りて交渉するに決す然るに偶々後藤象次郎等上京して薩、土兩藩盟約の議起るに及び隆盛は長州行を止め村田新八をして代りて行かしめ即此書を贈りたるなり

大久保一藏に贈る書

(慶應三年七月二十四日)

只今別紙之通相廻來申候好機會之事に御座候速に上阪可有之儀と奉存候如何

一 先刻毛利恭助參兵之助公子御病氣に付歸國御暇願出被成度御存寄は有之間敷哉尤宇和島へ御相談申上候處君公へ被仰談可被成候間此方へも申談置候様との趣承候付後藤氏よりも只今御在京之人數は御引取候儀御引替被成との趣も承右之御手數に相運申候へば却て可宜と申置候勿論宇和島より何とか御申入被成候半と相考候付早速御前へは右之趣申上置候委細は明朝御直話に仕候頓首

七月二十四日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】別紙は不明土佐藩公子歸國のことを其藩士毛利恭助より申出たる旨を報じたるなり

大久保一藏に贈る書

(慶應三年七月二十五日)

御建白書等之もの見合相成分は柴山へ讓置候に付定て持參いたし居候事と相考申遣候處荷物へ入付置候處長崎より御國元へ差廻愛許へは不參由承候付何卒心得に相成候様

之ものは思召を以爲書寫御遣被下度伏て奉願候今七つ時分より差出候賦に御座候間其内何卒奉願候間に不逢候て跡より兩三日中に御遣し被下候ても宜敷御座候將又神戸におひて大極丸水主殺之一條今朝石川方より返事參望月清平、毛利恭助之兩人今曉より下阪いたし候由にて大坂にて引合可有之との趣申越候間大阪にて談合いたし宜敷取計可申候付太夫へも其段申上置可被下候此旨乍略儀以書中奉得御意候頓首

七月二十五日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】建白書類の寫方を依頼したるなり

大久保一藏に贈る書

(慶應三年七月二十七日)

昨朝六つ時分着阪仕英人之旅宿尋候處當春參居候節罷在候寺え宿いたし居候趣相分候付早速薩道に懸合いたし今日何時に參候而可宜哉尋遣候處七時に可參旨申來候付右刻限差越候處只今寢覺候處にて御座候故二階に伴行候に付「ミニストル」着阪之段御承知

被遊態と使者を以て時候安否御尋として被差遣候段一と通挨拶申入候處今日は本國え飛脚差立候付十時過に相仕舞十一時半頃より登城之由承候付格別要事有之儀にては無之只着阪之祝儀旁見舞之爲に參候事故多忙中却て煩敷候間面會は不致候付宜敷「ミニストル」え申入吳候様申述候處「ミニストル」には是非面會いたし度候得共至極取込居候間今日は御斷可申入との事に御座候今兩三日は滞阪之賦と申聞候處是非逢度との事に御座候間兩三日中には面會可致も不被計候來月二日には爰許出帆いたし江戸の様罷歸賦與被相聞申候扱薩道え逢取見候處全已前通之譯にて格別何も相替候向とは見得不申依然たる次第にて柴山之疑惑とは大に違ひ申候故先日より御話申上居候通大阪商社佛人と取結大に利を計候趣委敷申聞佛人之つかわれものと御話之通急掛些腹を立させて見度賦に御座候故佛に憤激いたし候様説込候處大に能く參り思ひ通に爲被發候段々意底を話出し申候間左之通御座候

一佛人より日本之形勢を論じ試度申掛候付隨分議論いたし度薩道より返答に及申候處佛人中にはいづれ日本も西洋各國之通政府一般のものに相成大名威權を不除候ては

不相濟候付第一長薩の二國を打亡し度候付俱に打平候方宜敷は有之間敷哉と申掛たるよし其節薩道より相答候には先度之再討之次第を以可見繼之長州一國さへ打てざる政府にて諸大名之權を除杯と申儀は顯然不相叶事に御座候左様之弱きものを如何して助らるゝものに候哉と申述候處一言もなく夫形論は不出來と相咄居申候右等之論を公然と仕出す事に候間必政府を相助候而諸藩を打之策を廻し候儀は相違無之兩三年之内金を集め機械を備へ佛之應援を頼み戰を始め候所存と被相伺申候間其節は必佛も軍兵を發し應援可致候間いづれ相對する所之大國を應援に不備置候而は危き事に成行候半其節は英國におひて同じく軍兵を押し出し守護可致と申觸れ候へば佛之援兵は決而動かし候儀は不相叶候間前以能々相結候處肝要と相咄事に御座候第一英國之所存は日本國王政柄を握らせられ其下に諸侯を置て國體之立方英國にひとしき制度に相成候儀專一に願居候譯にて此度も英國王より日本國への書翰を幕府へ差出候由右は全體先帝崩御之儀承候て御悔狀差出候趣と相聞れ申候是もいづれ帝王へ幕府より被差上右之御返翰無之ては不得事に候へ共いまだ返翰も無之と申居候夫程日

本皇帝之處主張いたし候得共京都に而は其思召は更に無之京地に異人を入れ候而は汚れ候杯との説のみのよし右等のものにては不相濟候付萬國へ被對確乎たる政體を以交際の處も普通のものに不相成候而は相濟間敷と申居候何ぞ英國に御相談被成度儀も御座候はゞ承知いたし度く申掛應援相頼候へば引受可申との口氣に而御座候故日本政體變革之處はいづれ共我々盡力可致筋にて外國之人に對し面皮もなき譯と返答いたし置申候

一佛人横濱におひても利を貪り自分勝手に取組候始末一圓不承知と相聞れ申候全英國は商法を以相立候國柄にて此商法之妨をいたし候儀はどこ迄も不承知と至極憤激之體に御座候

一長崎におひて英人船頭を兩人殺し候もの有之いまだ相手不相知候由全土州人の仕業と申觸し候趣に被相聞申候餘程土州を惡しく申含候向に被相聞候薩道杯越前より陸行之節も伏見邊へ土州人待伏居候杯其外京師にて亂妨いたす杯又は博徒を集候杯との説餘程言込候向に被相聞申候長崎之異人殺も土州人共にて御座候と大に害を成す

事と苦察いたし居申候

一越前に參候節は誰人も出迎無之田舎にては郡奉行杯出會いたしたる由御座候へ共城下に而は全誰も不出候て洒肴杯の馳走は餘程いたし候由薩道不合點と相見得居申候右之通要用迄荒々如此御座候明日は十時より薩道此方に參との事に御座候間尙又咄も可有之と相考居申候今兩三日は滞在可仕候間右様御含可被下候至極薩道之口氣は幕府を罵居申候委敷は御直話と申殘候恐々謹言

七月二十七日

西郷吉之助

大久保 一 藏様

【按】幕府密に佛國と結托し其勢援を借りて諸侯を制服せんとするの說あり隆盛幕佛の結托は王政復古の爲めに一大障礙なるのみならず外國干涉の端を開き國家百年の大害を醸すものと爲し大に之を憂ひ大久保等と議し英國に倚りて幕佛の間を離隔せんとし七月二十六日大阪に下り英國公使の通譯官サトーと應接す此書其結果を在京の大久保に報じたるなり

由比 猪内 佐々木三四郎 贈る書 (慶應三年七月二十九日)

唯今承知仕候蒸汽船之儀乗頭召呼取調候處「バッテリー」之儀者間違にて爰許へは相廻

居不申趣に御座候間早速兵庫本船へ乗頭は參候様相達候に付明朝者別段迎船を不差上候間何卒兵庫迄は其御許より御乘廻被下度彼方にて御待申上居候て本船御乗込相成候はゞ直様出帆の都合に決し申候に付左様御含被下度御約定之趣と少し相違致候に付此旨早々奉得御意候頓首

卯七月二十九日

西郷吉之助

由比 猪内 佐々木 三四郎 様

要詞

【按】是より先長崎に於て福岡藩士金子某英艦の水夫を斬る時に海援隊の洋船大極丸同地より解纜せしを以て幕府加害者を海援隊士と爲し土藩の京都留守居に命じて加害者を出さしむよりて當時上京中の土藩參政由比猪内大監察佐々木高行等下阪して隆盛を訪ひ其始末を告げ處置につき教を乞ふ隆盛よりて英人と談判に就ての注意を與へ且つ薩船三邦丸の借用を諾す由比等乃ち三邦丸より歸國す此書乘船に就ての便宜を通じたるなり

桂右衛門に贈る書 (慶應三年八月四日)

太守様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候中將様御儀漸々御快方被爲在昨日は陣幕

等之角力も御覽被遊候位之御事にて誠に難有儀御座候御同慶可被下候陳ば土州之憤發近來國論も相定後藤象二郎大議論も容堂侯御許容相成候段は一左右有之一同決着相成候而又々不意に容堂侯御登京之御賦に御座候最初之處實は御着眼不相立御猶豫之念相起候事與相見得申候天地間大條理を以制度に懸け大論相發候事に御座候はゞ一度此論を聞て不同意は不被申譯幕府におひても凌は出來不申儀に御座候先月中には是非後藤杯登京之筋申來居候へ共いまだ着不仕決而議論相變候譯に而は有御座間敷長崎におひて英國人殺害に逢ひ土州人え御不審有之由にて段々六ヶ敷由に被相聞申候就而者先月廿一日方より追々之着阪に而英國人並佛蘭西人「ミニストル」參候付廿五日夜より川下いたし私被差下候付廿七日英人旅館え參り談判仕候次第帶刀殿より申上越候様承知仕候間大略申上候付宜敷御含可被成下候扱其日は「ミニストル」には多忙中に而面會不相調薩道え逢取候付得與談判仕候次第左條之通に御座候

一最初より「ミニストル」を立腹爲致度賦に而御座候故十分喧嘩いたす含御座候處得逢取不申候付無致方薩道え喧嘩しかけ申候儀に御座候畢竟英人も幕吏より説付られ候

新聞も有之又柴山良助近來江戸表え面會仕候處已前相替候説も御座候付此度至極叩込賦に決着仕居候處十分叩上げ候賦に御座候最初立腹爲致候廉は兵庫開港に付而は英人至極骨を折開港之上佛人利を得候手段を以見候へば全英人は佛人のつかわれと見受候旨申聞候處大に起り決而佛之下に届し候英國に而は更に無之何様之譯を以かく卑下して申聞候哉憤激して懸候付先づ得與開候へ開港之道開をいたし候は英國にして商賣之利得を占候は佛國にて御座候其譯は大阪の豪商を談らひ身分を上げ扶持を出し兵庫交易方の掛を命じ大に商社を取組全大阪の金を圓め諸侯の手を縮利を幕府え占付候手段いたし候是は全佛國與相談いたし幕府の奸策を絶し候事にて兵庫の交易は佛與幕府與にて商權を掠候ものに相成候付英國はにがきを喰佛國は甘を喰ひ候譯に可見候へば全佛のつかわれにては無之哉與論じ懸申候處大に佛に憤を發し意底を吐出候事に成行申候而却而我の大幸に相成申候其譯は横濱におひても兼々佛は獨利を貪英は憤居候折柄大阪商社の手段專英を疎じ候始末にて可憤條件に御座候夫に付薩道より申述候には此度横濱にて佛人より日本與形勢を論試度との事故承候處

唯今の姿にて幕府は日々衰行諸侯の勢ひは益強相成候付英佛杯の様幕府計に相成諸侯は無きものに制度を不相替候而は逆も治りは相付申間敷第一諸侯の内にも長薩の二國は強大の故早く不亡候而は不相濟候付英佛合して打破度との相談有之候付薩道より申答候には此度長州征討の様誠に柔弱の次第に而彼の一國さへ不破得幕府逆も日本を制御可致道理も無之ヶ程弱ひものを援らるゝものに而は無之與返答致候處佛人一言の答も出來不申與相咄居申候右等の論判を仕懸候次第にて幕府より能々佛國え結込佛の應援を以諸侯を打挫の策萬々無相違唯今金を幕府え占付諸侯の手の延ぬ様にいたし機械其外の要器は幕府一手に占上げ諸侯の窮する處を見て可打挫との策に有之候故拾年を不出して諸侯の災害は差見得候付唯今より其策略を不用候而は實に危次第に成行候半歟いづれ右の奸策を挫候には佛與可相抗強國與親を結不置候而は相濟間敷候へば譬佛の援兵を相發候時は英國より押付候儀は相調可申其節は英國におひても戦争の爲警護出兵いたす與申觸し同敷軍兵を差出候へば必佛國の援兵は差出候儀は相叶不申候付右の御相談も候はゞ可承與却而彼方より申出し候付是

は大幸の譯至其時機ては御相談可申與相答候ては又英國に使役せらるゝ譯に相成候而已ならず全受太刀に落來議論も鈍此末の處下馬に相成候儀自然の勢ひに御座候故うんと返答いたし置處と相考申候付日本の國體を立貫て參上に外國の人に相談いたし候面皮は無之この處は十分相盡す賦に候間宜敷取吳候様相答置申候最初より英人に腹を立させ憤激させ候趣向は他事に而は無之偏に佛與引離し却而佛の應援を押させ候策に御座候へ共右様彼より應援の相談承度與申處え乗込候而は不相濟一大事の處故道を以辭し候處彼等には尙可愛等敷相成候模様相見得申候第一此儀は安心の事に御座候

一先月廿四日將軍下阪與申事にて御座候へ共實は廿三日夜下阪いたし候由此度全佛人え親の專用の譯にて御座候由薩道より申事に御座候英の「ミニストル」も面會には相成候へ共格別の談は無之相濟候由其節閑叟候御歸國掛下阪中に而城中におひて一緒に面會相成候由に御座候此人も大に英人は疑ひ居申候將軍は佛の軍艦えも乗組に相成申候餘程親む模様相成候

一土州の處近來國論皆正義に歸し候付餘程幕府より嫌疑を掛俗論に打歸度賦與相見得色々離間策を廻し候様子に御座候處長崎の英人殺害に付「ミニストル」よりは幕吏に兼而憤居候故一向相責候處を以是を幸にいたし英人を以土州を打挫の策被相見得此度「ミニストル」歸帆掛土州へ相廻候手段に相成殘念の仕合に御座候乍然土州におひては却而結を付候策に御座候如何あらんかと大に懸念いたし居申候彼大策も是か爲に崩候様相成候而は不相濟事與苦思仕居申候右に付私下坂中之の事故色々相談も承候付先づ幕吏は置て異人に直に應接可被成其上六ヶ敷成立候て私も同伴可致候付是非直談の處に相成候様申置候處板倉閣老與談判而已晝時分夜八つ過迄議論いたし前を慮り後を顧毎の御役人論故大阪にて喰留候手段不相調とふ々々本國迄參候場合に相成殘多次第に御座候幕吏も外國奉行一人御目付兩人差越申候右等の事發り候處餘程世話に相成候向に而「ミニストル」より申遣候は此度の様之事到來いたし候而はかく迄親睦いたし居候兩國の間も忽瓦解可致事候間能々其處汲受吳候而壯士輩えも手堅申論至極相届候様可致吳旨申遣候事に御座候譬一書生の業にもせよ必國君の罪に

歸し候事故其處委敷可論吳段承候付右の次第は御賢慮を以人々相心得候様御諭被下度奉合掌候若哉御國共に右様の事有之候へは私ば御同伴に割腹いたし不相謝候而は是迄の親睦は水に相成候事と決着仕居申候此度の土州の談判に相加りて私の首の質物を差出置合に相決居候處是以相違いたし申候唯異人を壓倒すべき事は唯一つ可有之與兼而存居申候異人は自刃いたし候儀は出來不申由御座候間目前にて見事に割腹いたし候得ば少しは膽を寒し可申歟與相考申候

一越前國を此節英人通行いたし候節は宿屋杯之馳走は餘程念を入候而誰も應對之人は不出合候由誠におかしの仕業與異人笑合申候全幕府之嫌疑を遮且異人之機嫌取をいたしたるもの與相見得實に姑息之計に御座候

二「フロイス」と佛國之戰爭も如何成行可申哉とふか近來は相止候様子に承候與申掛候處薩道相答候には先比の便には相治候趣申來候得共近日の便に又々戰爭に相向候趣申來候此度はいづれ戦に可相成與の説に御座候此兩國に戦を發し候へば大に日本之爲には大幸與天心を以は甚以罪ある譯ながら唯我國之難儀の餘りには却而彼等之戦

争を欲し候淺間敷心に御座候若戰に相成候へば佛えは幕府よりは是非一向應援之兵を相頼居候處に御座候へば唯聞捨には相成間敷其節に臨み援兵を不差出候へば必佛人にも見限られ候半與相考居申候

右之通形行大略申上候間宜敷御舍可被成下候恐惶謹言

八月四日

西郷吉之助

右衛門様

御侍史

追啓上三邦丸土州のもの兩人急速之歸國に付拜借相願當月朔日夜出帆仕土州迄被差遣候相届候へば直様歸阪の賦に御座候

【按】此書英國公使通譯官サトーと應接の顛末を在國の桂に報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年八月十六日)

中將様御機嫌能御着阪被遊尙御通り御鹽梅も不被爲替候段承知仕恐悅之御儀難有奉存

候陳ば御交代之場に運候得者朝廷へ被爲對候而も同盟之諸侯へ被爲對候而も名分實義相立無此上も御場合に到可申と是而已相祈居申候御堀耕助も明日爰許可致出立との事國許に於ひても餘程相待居候由に御座候間差立候様可致候間其許におひて宜敷御計可被下候別段御留守居へも不申遣候に付宿業之儀も宜敷御下知可被下候扱御堀一人昨夜私宅へ參り先一人之存慮と申譯に被申立候趣は幸此度は末藩等上阪被命候に付一舉之期限相定候はゞ三日前に上阪いたし候都合に仕向候はゞ如何可有之哉與申事に御座候間邸中も一同右之處希居候事與相答申候右之處に相決し罷歸可申尙國許におひても得與談合いたし取究置可申との事に御座候間左様御舍居可被下候決而此處は相違は有御座間敷と相考居申候全體右邊之處打合可申ために上京いたし候筋と被相伺申候此旨奉得御意候頓首

八月十六日

西郷吉之助

大久保一藏様

別簡

今朝福岡藤次參り昨夜土州よりの一左右有之たる由にて英船之談判も一と通相濟都而奸策を可破との趣意に被相聞申候去る六日英船洲崎港へ着相成直様英船へ參候處何れ談判に付ては幕府へ引合之上ならでは手順も不相立事故土州と英國と計にては不相調乍然是迄懇信を結居候譯柄にて情實は可相咄との事に御座候由全此節之處疑念之相手相知候得ば土州を疑居候事故戰爭相始打破て英之疑念を可晴との趣にて御座候由就ては後藤より返答致候には全事跡不相分疑念を以て可戰條理も有之間敷勿論右様之戰を相始め候ては各國へ對し英國之耻辱にては有之間敷哉乍然戰は不好譯ながら是非可致との事候得ば道に於て可決戰得と取調候様申置候て其日は相止候處同夜薩道上陸致し後藤と懇信之處を以て談判候處横笛と申風帆船と小軍艦とに疑を掛候ものと被相聞候付幸小軍艦者土國へ繋居候間右之船將とを引合可申候に付委敷可承旨申置翌七日幕役を始異人目前にて列座之上長崎を出帆致候而汐掛等の次第詳に申聞候處全く長崎の風説とは大相違致し土州は氷解之様子に御座候何れ此上は土州よりも尙又相手探索可致に付長崎に於て取調若し土州之者暗殺致候はゞ可然處置可致との約定に相成早々長崎

へ向け同九日には洲崎港を出帆致候由幕船は土州より歸阪之賦に御座候處英人より被相迫是も同様長崎へ相廻り土州よりも阪本龍馬等數人乗組にて薩道を乗せ長崎へ相廻り候由「ミニストル」には横濱へ罷歸候向に被相聞申候薩道は跡に残り候故城下之方浦戸へ相廻し城下におひて容堂侯御逢相成候由「ミニストル」には未談判不相決候故御斷申上候由に御座候長崎におひては後藤杯の留守を窺ひ肥州邊か又は幕夷共奸夷共奸策を施し候事と土州に於ては引受候向に被相聞是非幕府の探索不出來内相手を土州より探し出べしとの心組と被相聞候付願くは相手知れ度事に御座候然れ其相手不相分と申ても土州と戰爭に相成る氣遣は無之處迄には相運候筋に被相聞申候薩道へ御逢相成候一條は餘程土州中之議論相起候て役人大心配致候筋に相見得申候此報知之爲に蒸汽船參りたる由御座候得共是は兵之助公子を御乗せ候て歸國致し夫より直様後藤杯上京と申都合に相決居候由に御座候間不遠上京相成事と待遠事には御座候得共先づ一と安心は致候事に御座候此旨荒々申上候御都合を以て達御聽候儀共は宜敷御取計可被下候頓首

八月十六日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】隆盛等既に長藩と聯合して王政復古の義舉を斷行するに決し久光もまた之を容るよりて出兵を鹿兒島に促し久光は疾により藩兵の着京と同時に歸藩して忠義と代らんとし八月中旬大阪に下る此書長藩使節御堀耕助と交渉のことを大阪に在る大久保に報じたるなり別簡は英人殺の事につき土英談判の形行を報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年八月二十二日)

今朝渡邊清左衛門より國情之譯も有之只今御差出相成居候右討勢皆々引取候姿を以拾七人丈は是非相殘され度其内九人丈は邸内へ召置吳候様との事承候得共何分込合居候邸中之事故御即答は出來兼候間得與取調いたし何分御返詞可申上旨申置候全體嫌疑を遮候手段と被相伺申候故不殘總體御引拂被成候事宜敷は有御座間敷哉と問掛候得共是は得出來不申由に候實情御國へ依頼之向は相見得居候事には御座候得共長崎邊之小説を以相驚役人中心配之筋に被相聞申候いづれ明日より下坂可致候付貴兄へ御談し置可申候付尙御引合被成候様申置候付左様御含置被下宜敷御取計被下度奉合掌候別封大阪

より參候に付差上申候御落手可被下候此旨奉得御意候頓首

八月二十二日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】大村藩渡邊清より依頼の事につき照會したるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年九月七日)

此度着阪相成候人數丈は迎も滞在相調間敷候間備後殿丈け御滞阪相成餘は皆次第々々に上京被仰付候方宜敷は有御座間敷哉左候而兩日中には後藤之引合も可有之候付決議之上はいづれ成御伺に相成候而御決定之御運に相成事候付其節は太夫御下阪被成下御定策を以御跡之處全御委任被爲在候へば何篇都合可宜と愚考仕候付又々卒度乍略議以書中得御意候頓首

九月七日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】隆盛八月二十三日大阪に下る九月五日鳥津珍彦兵一大隊を率ゐて着阪す隆盛乃ち兵士のみを漸次上京せしめんことを大久保に計りたるなり書中備後は珍彦後藤は象次郎太夫は小松帶刀を曰ふ

大久保一藏に贈る書 (慶應三年九月二十七日)

兩日は不奉得鳳眉候處彌御安康奉賀候陳者世良より御取替之儀願出罷出候て御相談可申上相考居候處家内病氣兩人臥居候て不得罷出自由之事御座候得共以書中御相談申上候先日も品川より御取替相願候由同人着迄之處百五十圓丈翻譯書板木相頼置候處金子不差遣候而不相濟由品川着いたし候へば持參之賦に而其内御取替被成候處頻に歎願之事に御座候間暫時御取替に御座候故鐵砲代も相圓居候付其内より御取替被成下候ても宜敷は有御座間敷哉何分御賢慮伺試申候何卒御返詞可被下候將又別紙到來いたし候間差上候付御落手可被下此旨奉得御意候頓首

九月二十七日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】長藩士世良修藏より金子の立替方を願出でしに付之を大久保に計りたるなり書中品川は彌二郎を曰ふ

大久保一藏に贈る書 (慶應三年九月二十九日)

御不快之由甚以御不音いたし居申候折角御養生可被成候扱土州之後藤より又々御相談之趣御座候由太夫御宅へ貴兄之所より歸掛け參候而尙又申述候由御座候間貴兄御賢考之通今日は建白書差出候様御返答相成申候間左様御納得可被下候此旨乍略儀以書中奉得御意候頓首

九月二十九日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】大久保利通大山綱良と長藩に至り復古義舉の大策を協定して歸京す會後藤象次郎上京して大政奉還の建白書を提出せんとし隆盛小松大久保等を訪ふて討幕の不可を説き大に調和論を主張し之に同意せんことを求む隆盛等止むを得ずして建白書提出の事に同意すと雖土藩の到底事を共にす可からざるを知り斷然土藩と絶ち藝藩と謀を通ずるに至る此書小松が建白書の提出に同意を與へたる旨を報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年十月三日)

今日は御鹽梅如何御座候哉漸々御快方とは相考候得共折角御加養被下度合掌候別紙昨夜到來いたし太夫へも入御覽候て差上候間御覽可被下候以上

十月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

田尻務に贈る書 (慶應三年九月二十九日)

中將様御機嫌能被遊御着尙風土も御替相成益御快方之御事と恐悦之御儀奉存候貴兄方御揃無恙御安着奉賀候陳者其後御當地之形勢も格別相變候儀も無御座候長々遅引致し候故少々心付候廉も御座候得共何分差急候事、、、井伊之人数共操出し大垣も同様大阪邊へ守衛として相固候趣に御座候大垣杯は自ら大阪守衛を願出候向此守衛を申立にいたし大阪之土地を相望候由に御座候いまだ軍氣も矢張平常之心を不失仕合之事

に御座候幕吏餘程紛紜之様子夫故十分手當も出来兼ね候事も可有御座と奉存候關東之形勢も近日土藩諸生兩人着京之由に而承候處一擧之人数も追々夥敷相成五千と申事旗本之士多分相組申候由に御座候關東は益人氣相離無致方次第に成行候由御座候義擧之人数は逆も猶豫は出来兼不日一發いたし候向と被相聞申候其外何も格別之事も無御座平に無事に御座候此旨荒々御安着之御祝儀迄如此御座候恐々謹言

九月二十九日

西郷吉之助

田尻務様
蓑田傳兵衛様

【按】此書久光歸藩後大阪及江戸の状況を報じたるなり田尻は蓑田と同じく側役なり

中島作太郎に贈る書 (慶應三年十月十九日)

芳翰忝拜誦仕候陳ば乗船折角取掛居候に付追時御荷物等積入方として人足差上可申候間其節積入場へ御出掛被下度此旨御報迄如此御座候頓首

十月十九日

西郷吉之助

中島作太郎様
小澤庄次様

貴酬

【按】十月十八日隆盛小松大久保等と討幕の密勅を奉じて歸藩せんとし大阪に下る時に土藩士中島作太郎及三條實美の附士小澤庄次同船の約ありよりて二人乗船の時刻を問合す隆盛之に答へたるなり中島は信行小澤は今の男爵尾崎三良なり

大久保一藏に贈る書 (慶應三年十一月十一日)

今日嵯峨行としまり候由にて吉井方より申來候間早々御出懸被下度奉合掌候頓首

十一月十一日

吉之助

一藏様

黒田嘉右衛門に贈る書 (慶應三年十一月二十七日)

別紙之通三田尻に而談判相成候右者約束に而候間爲御見合差上申候外に白紙之書面は

世子君の直書を以御渡相成候ものに御座候間是又差上申候此旨乍略儀以書中得御意候頓首

十一月二十七日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

別紙

慶應三年丁卯十一月十七日

一時機變遷して處す不可に於者細密復考其宜に叶候様取計緊要之事
一兼而定置候通

勅諭を奉戴し條理名分を正し輕舉不謀に不陷事

一機密四方に露顯せし由に付尙深く廟議可入念事

右委細之儀者黒田嘉右衛門に申付置候事

慶應三年丁卯十一月十八日

一至尊を奉守護候事者申も乍疎大事件に付精々心配十分手筈を合せ遺算無之様肝要之

事

一此度の義實に

皇國之一大事に付此方出先者どもえ氣附之筋有之候節は萬端存分に教示之儀相頼候事

慶應三年丁卯十一月十八日長州三田尻に於て

執筆 廣澤兵助

薩長合議書

一三藩とも浪華根據之事

一根據爲衛薩藩二小隊へ長藝之内相加候事

一薩侯御一手は京師を守任とす

一長藝の内一藩京都と應援す

一薩侯御着阪廿一日にて廿三日御入京廿六日三田尻出浮之兵出帆廿八日西の宮着薩藩より京都之模様報知之上進入之筈

一〇之儀は山崎路とり西の宮へ脱詰り藝州までの事

【按】隆盛等十月二十六日鹿兒島に歸着し直に藩主父子に謁して討幕の密勅を呈し忠義の上京を促す當時藩國に於ては尙多少の佐幕家もありしも隆盛等の歸藩するや斷然藩論を決し十一月十三日忠義を奉じ兵を率ゐて鹿兒島を發す(小松は國に残り大久保は土佐に使す)十七日三田尻に上陸し忠義は長藩の世子元徳と會見し隆盛は毛利内匠等と薩長藝三藩兵の部署進退を協定し二十三日京師に着す隆盛其協定書を黒田に送りたるなり書中〇は鳳輦を隠稱したるなり

品川彌二郎に贈る書 (慶應三年十二月六日)

先刻承知仕候事件大久保とも相談仕候處於朝廷參内被仰出御評議相成候向に被相伺先歸國可致との御論も相起り又は何分御沙汰被爲在候間は可相控との兩議不被相決筋に相聞れ候由に御座候夫故三五日中之處大きに可宜との事に御座候處強て御勸め申上候筋にては無御座暫時之間譯も相立候事かと相考候儀にて別に仔細は無御座候間先づ御見合之方御宜しくは有御座間敷哉誠に相違之儀に御座候得共明後日と相成候ては機會も相後可申事と奉存候間左様御納得可被下候此旨乍略儀以書中奉得御意候參上仕候て可申上候筈に御座候得共無據差懸候故卒爾の働御宥免可被下候

十二月六日

西郷吉之助

品川矢次郎様

【按】長藩兵攝津西宮に至るや當時山崎關門の警衛に任ぜし藤堂藩は書を朝廷に上り朝命なき間は斷然長藩兵の入京を拒絶すべきを以て朝廷より朝命を待たしめんとす然るに幕府黨は歸藩せしむべしと主張し議決せず隆盛乃ち之を品川に報じ暫く上京を見合すべき旨を告げたるなり

黒田嘉右衛門に贈る書 (慶應三年十二月七日)

御安康奉賀候陳者明日より大阪へ被差越事情探索方可被成御内定相成居明朝表通可被仰付候間其合にて御仕廻被下度細事は明日可申上候に付爲御心得奉得御意候頓首

十二月七日

西郷吉之助

黒田嘉右衛門様

【按】幕府内狀探索のため大阪差遣のことを豫め内報したるなり

品川彌二郎に贈る書 (慶應三年十二月八日)

別紙之通今晚四時分相知れ來り候付勿々足輕のもの兩人^{大阪}大急にて阪元邊御陣所へ向け差遣はし候事に御座候自然藝藩より御申越相成りたる事かと奉存候得共明朝山崎關門御通行之節故障付申間敷相考候に付左様御納得可被下候今曉之處いまだ參朝之方々御引取無之卯の刻少々延は致し申間敷かと此のみ殘懷の御仕合に御座候いづれ丑の刻頃には何分知らせ被下候筋に御座候得共未だ何とも報知無之相待居候儀に有之候此旨荒々奉得貴意候頓首

十二月八日

西郷吉之助

品川矢次郎様

【按】十二月八日長藩處分及五卿歸洛のことにつき朝議あり徳川慶喜等參朝せずよりて朝議夜に入りて未だ決せず隆盛此事につき顧慮せしを以て特に使を遣して朝議の形行を報じたるなり

山田市之允に贈る書 (慶應三年十二月八日)

呈一翰候今夕景別紙之通被仰出候付明朝關門御通行之節御談判之御用にも可相成と相考候付早々寫取を以て差上申候自然藝藩より御通可相成敷も難計候得共爲念如斯御座

候恐々謹言

十二月八日夜

西郷吉之助

山田市之允様

朝令之寫

今度大樹奉歸政權朝廷一新之折柄彌以天下之人心居合不相付候に於ては追々復古之典も難被行深被惱宸襟候且來春御元服並立太后追々御大禮被爲行且又先帝御一周に相成候に付猶更人心一和專要に被思召候間先年來防長之事件彼是混雜有之候得共寛大之御處置被爲在大膳父子末家等被免入浴官位如元被復候旨被仰出候事

【按】此朝令は八日終夜の會議にて決し九日の朝發令ありたるものなるに隆盛の書中に「今夕景」とあるは一見甚だ惟むべきが如くなるも隆盛等豫め岩倉と密議の上起案したるものなれば朝議の紛々たるに拘はらず必ず斷行すべきものとして其寫を贈りたるものなり市之允は故伯爵山田顯義の前名當時長藩隊長なり

品川彌二郎に贈る書 (慶應三年十二月二十一日)

別紙之通只今申來候付相分り候儀卒度御書附被下御知被下度奉願候頓首

十二月二十一日

西郷吉之助

品川矢次郎様

【按】別紙不明文意簡短なるを以て真相を知るを得ず

楫取素彦に贈る書 (慶應三年十二月二十六日)

別紙御懇書昨夕御返却可仕之處甚以不埒之仕合御座候右之御文面は而決而違存は無御座候付返上仕候間御落手可被下候以上

十二月二十六日

西郷吉之助

楫取素彦様
要詞

【按】別紙は不明なるも何か隆盛の同意を求むる事ありて照會したるに答へたるなり楫取素彦は長藩士なり

養田傳兵衛に贈る書 (慶應三年十二月二十八日)

中將様先以御快方可被遊御座恐悦之御儀奉存候陳者爰許之儀墓々敷運兼徳川氏鎮撫之爲下坂相成候處尙更模様惡敷相成根據を占候場合にて淀伏見邊へ人數を繰出し彌不平之色を顯し候様子に被相伺候處尾州侯憤發にて御下坂と申時宜に罷成候越前侯杯御談合與相見得御兩侯より御建言之趣被爲在候間惣御參内被成度趣御申立に相成り其節は早尾州侯へは御下坂御暇被下候折柄に御座候處又兩侯より之御建言與相成候次第御打合せ相成候事と相見得申候然處兩侯より被仰立候趣は畢竟是迄延引之儀は御盡力不被爲届處斯迄遅々罷成候儀對朝廷無申譯儀と奉存候間此上は御沙汰書を以て被仰達候得者右を以申諭其上承服不仕候はゞ無致方儀御座候間速に追討之命を被下候はゞ親藩たりとも親を絶て可打との言上に相成誠に立派な御口上にて御座候然るに御沙汰書に御注文有之領所は矢張徳川氏のものにいたし置御政務に附ては御用途丈差出との趣意に被相伺申候土藝此説を助け頻に御周旋相成候處朝廷に於ては確乎として御動不被爲在候處頻りに歎願いたし別紙之御沙汰書に相成申候右御受之有無は正月元日中と期限被相立候間其内には相分り可申此儀は必定御受之都合に相運候半と被相察申候是より慶

喜を議定に引出し何とか策を廻し候半與大に苦心仕候事に御座候乍然五卿方も昨日御着京相成餘程朝廷上に於ても御力附候譯に御座候間後藤之奸策も被行申間敷與奉存候此度こそ朝威光輝不仕候ては不相濟時に御座候間偏に渴望仕居候人心之歸向は誠に奇妙なるものにして王政を願候儀に御座候紀州侯も上坂相成居候處是も勤王を始掛勤幕巨魁田中善一郎を誅戮し其餘五六人攢斤し京都へ相詰居候三浦休太郎與申者も打ち下し國論餘程相變じ此上者實行を擧て衆人の疑惑を晴すとの論にて大阪より御暇に相成候處朝廷より御免相成惣體大阪御引拂に相成申候是は徳川氏に於ては餘程之痛與被察申候彦根藩に於ても是迄幽閉被致候人々被召出正論被相行候模様にて國中も半方勤王論に相變じ是以始め掛候儀に御座候備前は確乎として正論相居り君公此廿四日御發足與申す譯に御座候處只今御登相成候ては尾越之論に説き込まれ候半與之壹岐長門杯議論相起り暫く上京は御見合相成候由今日に至り王事に勤勞致候様朝廷より御達相成申候因州杯も段々勤王説を唱へ出しそろ／＼直掛り候勢に御座候近畿之小藩は多くは歸向仕候趣に相見得申候土州之論は勤幕か勤王か譯は分り不申候肥後之溝口孤雲津田山

三郎並に高崎左京此三人は參與戸田大和守は議定に被仰付候様容堂侯より御建言相成り決て參與には御聞せなく議定許にて被相決候様御申立直様相運候儀に御座候高崎丈は太守様へ御尋與申譯に相成候故御斷に相成り一人丈は相残り外は皆被仰付申候肥後之論是迄與は大に相違候趣に被相聞候へ共全反正のものには無之候處悉く後藤に説き込まれ同論之味方を驅出候手段と相見得申候乍然追々長人も出來り五卿方も御着相成候故少しは後藤も落膽可致事與相考申候國中に於ては一人も後藤に服し候者も無之乾等へ寄り正論を立候者にて御座候得共全體臆病もの故戰を恐れ奸策を施し候次第殘懷之仕合に御座候御笑察可被下候桂太夫小松太夫御兩人共御召しに相成御兩人ながら御登相成候ては御國元之處不相濟儀與奉存候間小松家早々御登相成桂家には御見合相成候方宜敷は有御座敷哉御一人御京着之上右邊之處宜敷御願相成候得者朝廷之處者如何様共被成方は可有御座與奉存候いづれ桂家には御國元へ不被爲在候ては相濟間敷與奉存候全體朝廷より御召之譯には御座候得共國を以て被爲盡候ものなればいづれ國の本堅く不相立候ては被爲濟間敷と奉存候に付宜敷御周旋可被成下候朝廷向之處は如何共

盡力可仕候に付其段者御含可被下候細大詳なる儀は大久保より可申上候に付文畧仕候當分者晝夜寸暇無之朝議者毎々徹夜中々難儀之次第に御座候少し道か相付候者御暇仕候て罷下度御座候へ共一向募取り不申苦心此事に御座候御推察可被成下候恐々謹言
十二月二十八日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

追啓昨日土藝長薩の調練叡覽に相成冥加至極難有次第に御座候日の御門前にて御座候徳川氏處分の朝令(別紙)

一 今般辭職被聞召候付而者朝廷辭官之例に倣ひ前内大臣と被仰出候

一 政權返上被聞召候上は御政務用途之分領地之内より夫々取調之上天下の公論を以て御確定可被遊候事

右兩件心得迄御沙汰候事

【按】十二月九日王政復古の大號令煥發あるや朝議徳川慶喜の將軍職辭退を聞き肩け且つ官位を鵜退し土地人民を返納せしむるに決し徳川慶勝松平慶永をして之を慶喜に傳へしむ慶喜麾下の人心激動の故を以て猶豫を請ふ

慶勝よりて旨を奏し退官納地の二事を二人に一任せられんことを請ふ隆盛等大に之を不可とせしが朝議は姑く二人の言ふ所を聽す慶勝等乃ち麾下激徒の氣勢を緩和する爲め慶喜に勸めて下阪せしむ慶喜よりて十二日夜に入り松平容保松平定敬等及旗下の兵を隨へて大阪に下る既にして退官納地の事は岩倉等と慶勝慶永容堂等との間に異論ありて容易に決せず隆盛よりて大久保岩下等と議し朝令の案文を起草し大久保をして岩倉に呈出せしむ二十四日に至り朝議遂に大久保の呈出せし案文中二項「返上候様可被仰付候事」とあるを「御確定可被遊候事」と修正して發令するに決定せしものなり此書によれば當時紀州彦根、備前、因州其他近畿の小藩多く朝廷に歸順の兆あり加ふるに三條等五卿も歸洛朝廷に列したるを以て隆盛目的の順次達せらるゝを見て稍々得意の色ありたるを思ふべし書中乾は板垣退助を云ふ

蓑田傳兵衛に贈る書 (明治元年正月朔日)

昨夜出羽秋田藩高瀬權平楠英三郎と申者御留守居方附役遠武橋二方え參申出候は兩人之者共外に五人君侯御上京之論偏に相立候處用人之奸物相拒逆も勤王之道不相叶終に及斬奸身を御邸内に相投じ田町御屋敷え潜匿いたし候而蒸汽船之出帆を相待罷在候處二十八日出帆被相究右折柄二十五日朝關七郎參申聞候者只今酒井左衛門尉手勢並歩兵上屋敷を取巻御留守居え面會致度段承候就而は此内より御屋敷内に被相置候浪人共可引渡との事と相見得候付穩に談判可致含には候得共如何様被引出候も難計此上は七人

之御身大事を抱居られ候御方之事故暫邸内を相逃吳候様承候付無據相逃候折柄早田町え掛候時分より砲聲相起品川邊に參候節は最早火之手も起候付直様上京仕候次第に御座候外五人之者共には跡之成行得と見届候上罷登候様申付罷越候との趣にて大に驚駭いたし候仕合に御座候右様之變動故一左右可申越道も有之間敷畢竟二十三日御城出火翌二十四日迄燒通し候由に御座候就而は右出火之起浪士共に不審相掛候儀歟甚暴動之次第に御座候得共何分様子不相分候付品々探索之者差出候儀に御座候江戸におひて諸方え浪士相起動亂に及候趣に被相聞候間必諸方に義舉いたし候事歟と被察申候京師におひても相響候趣と被相聞爰許にて壯士之者暴發不致様御達御座候得共いまだ譯も不相分何れを可正筋も無之其内決而暴動は不致段御届申出候儀に御座候全體九日以來之處大に舊幕之輩相怨居候儀に御座候へば早く江戸之浪士を倒し候策歟と被相察候儀に御座候百五十人計罷居候而暴舉いたす賦とは不相見得京師之舉動に依り如何様共可致との様子にて御屋敷罷在候趣は近頃迄相聞得居候處右等之恐有之先をいたし候もの歟殘念千萬之次第に御座候何分細事不相分候付委敷相分候はゞ又々可申上候其内荒々相

知候丈申上候間左様御舍可被下候蒸汽船之儀は其節に出帆いたし候共又は焼亡に及候共申事に御座候へ共虚實不相分事に御座候

正月一日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

【按】是より先薩藩士伊牟田尚平益満休之介等江戸に至り薩邸留守居篠崎彦十郎等と謀り關東及信越の志士を糾合し一朝事變起らば直に兵を關東に擧げ東西相應じて幕府を討たんとを策す偶十二月二十二日西丸火あり幕府之を以て薩邸に集合する浪士の所爲とし二十五日庄内以下數藩の兵を以て薩邸を圍繞し火を放つ伊牟田等乃ち志士數十人と一方を斬り抜け品川に至り薩艦に投ず其他邸内に殘留せし者は或は闘死し或は縛せらる而して薩艦は幕艦三艘と砲戦を交へ後伊牟田等は紀州より上陸して京師に入り薩艦は正月二日兵庫に着す書中にある高瀬權平楠英三郎の兩人は晝夜兼行して十二月三十日夜着京し之を薩邸に報ず此書隆盛江戸の事變を鹿兒島に報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月朔日)

別紙之通申來候彌相違は有之間敷昨日出羽秋田藩之者潜伏いたし居候處俄に立去候様夫形上京いたし候由にて中途に出懸候處早砲聲を聞て參候様に御座候當分之處にて迎も御國者にては江戸へ出懸候儀も相調間敷候へば海江田手先之者探索方として江戸迄

被差遣候儀は如何可有御座哉御船も二十五日出帆之處二十八日に延居候との咄に御座候是以相失ひ候歟も不被計候間此旨早々奉得御意候頓首

正月朔日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】大阪留守居木場傳内江戸の事變を届出づ隆盛之を大久保に廻送し探索方の差遣を促したるなり別紙は木場の届書なり

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月二日)

別紙只今到來仕候明朝は長州之廣澤等え引合其上帥宮えは委敷申入度様可仕候付貴兄は何卒岩公え御出被下度五ッ前に御返答申上候様承知仕候大雲院之儀は佐次右衛門様え御問合被下候而形行御申出可被下色々歎願申上候由に而別に御見立可被成との事に御座候間宜敷御願申上候以上

正月二日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】要旨不明なるも文意により考ふるに薩藩大雲院に陣營を置かんとしたるに該寺に於て願出たる事あり他に變更したるものならん別紙は不明廣澤は眞臣、帥宮は有栖川宮、岩公は岩倉具視、佐次右衛門は岩下方平を云ふ

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月三日)

今曉伏見出張之坂本廉四郎より問越候趣は會並松山志州鳥羽之人數戎装にて着伏相成登京之模様有之候付土州長州と相談いたし一應可及談判勿論何分朝廷より之御沙汰被爲在候迄は相控候様可取押候へ共押而罷登候はゞ防戦に可及との趣申遣候付早々出殿様子相待居事に御座候いまだ長州引合候處に而は無之二之手繰出し等之手配にて御座候早々御出勤可被下候いまだ如何模様は不相分形行は朝廷に御届申上候右様御舍可被下候

正月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】正月二日徳川慶喜大目附瀧川具和(播磨守)に命じ討薩の表を齎らして上京之を奏せしめんとし在坂の麾下及諸藩の兵を部署し會津桑名二藩の兵を以て先鋒となす蓋し舊臘薩藩三田邸闘争の報江戸より至り城中の諸隊益々激怒し慶喜に逼り其出師を促すを以てなり乃ち聲言して曰く召命を奉じて入朝すと兵を分て鳥羽伏見の二道より北上す老中格松平正質(豊前守)鳥羽街道の兵を督し陸軍奉行竹中重固(丹後守)伏見街道の兵を督す三日拂曉伏見に着し重固書を同地警衛の薩軍本營に提出し慶喜前衛の諸隊上京する旨を告ぐ薩軍乃ち長土兩藩と議し答書を與へて朝命を待たしめ軍賦役坂本廉四郎之を隆盛に報ず隆盛よりて旨を朝廷に稟申し同時に應援の兵を派遣し又之を大久保に報じ出勤を促したるなり

揖取素彦に贈る書 (明治元年正月三日)

御返書忝拜誦仕候陳者鳥羽街道えも出懸候半歟與相察候付彼方へも手配仕候付御舍置可被下候尤戎装に而登京之儀は何分朝廷より之御沙汰有之迄は相扣候様巡邏之三藩より談判に可及趣は只今御届申上置候付左様御納得可被下候此旨又々奉得御意候頓首

正月三日

西郷吉之助

揖取素彦様

要詞

【按】鳥羽街道出兵のこと及朝廷に稟申のことを告げたるなり三藩は薩長土を云ふ

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月三日)

井上別紙相認參候間正治へも談合いたし何も異存は無之との事に御座候少々異同も有之候得共其邊は宜敷御辨解可被下候一發直様國を移候儀は大に人心にも關係可致候間暫時は御見合相成候方宜敷は有之間敷かとの趣に御座候西の宮へも長兵四百計備兵二百計大州之兵も罷在候付是に而踏止候而は甚不利之譯に御座候付西の宮之兵悉く繰上一發するや否丹波之笹山を突候手筈に御座候尾之道之兵速に張出し姫路を落し候策又長國之兵は速に藝地へ繰上候様手筈可致との事に御座候間其段御舍居可被下候此旨早奉得御意候頓首

正月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】長藩と謀議したる策戰の計畫を告げたるなり別紙は不明井上は馨、正治は伊地知正治を云ふ

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月三日)

今日は御叱を可蒙と相考候得共戰之左右を承度處よりたまり兼伏見迄差越只今罷歸申候初戰之大捷誠に皇運開立の基と大慶此事に御座候兵士之働も實に感心之次第驚入申候追討將軍之儀如何に而御座候哉明日錦旗を押立東寺に本陣を御居被下度候得者一倍官軍之勢ひ増し候事に御座候間何卒御盡力被成下度奉合掌候頓首

正月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】三日隆盛戰況を知らんとし伏見に赴く既に賊軍敗退すよりて歸京して之を大久保に告げたるなり第一戰の勝利に隆盛が如何に歡喜したるかを知るべし

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月五日)

今曉より淀城へ取掛賦にて二十柵二挺昨夜申來候故差遣申候間速に燒落し可申與奉存

候付淀之賊兵退散いたし候はゞ直様八幡山崎之御固は官軍へ繰替被仰付候様御達相成候處御盡力被成下度御願申上候

一伏見之儀只今一二小隊を以相固候由に御座候得共只夫迄にては不相濟事に御座候間鎮撫之者、、様にても、、是を助けて如何様共鎮撫之道は相立可申、、にても君公出張致居不申候而は土地之人心安堵も六ヶ敷候付誰様にても宜敷御座候、、様には何も不被仰付候、折角之御願も御座候由に被相聞何歟、被成度との事御座候間卒度申上置候

一大阪より一人飛脚參申出候は御屋敷も自ら火を掛詰人數は都て御當地へ罷登來候由御座候道筋は丹波路歟大和路歟之間にて御座候由申出候二日大阪より平運丸出帆之處徳川船二艘を以砲發いたし候付兵庫港へ乗入候由御座候此旨荒々早々奉得御意候頓首

正月五日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【按】四日嘉彰親王を征討大將軍に任じ錦旗節刀を賜ひ東寺を本陣と定めらる五日拂曉官軍淀城を攻撃す隆盛乃ち諸隊を指揮す既にして淀藩歸順し賊八幡に退却すよりに官軍淀城に入る此書淀城の攻撃を報じ且つ伏見附近の鎮撫を策問し大阪藩邸吏の去就及平運丸砲撃の情報を通じたるなり

岩下佐次右衛門に贈る書 (明治元年正月五日)

速日戰居候二隊爲休息唯今歸陣仕候今朝掛之合戰は餘程難儀いたし候得共悉く打挫淀城迄追詰候處賊兵より橋を絶淀之城の中より仁和寺宮え歎願之趣有之城には砲丸を打込不申候町家之賊巢を燒落堤には番兵を殘し置外休息爲致候間右之形行は御申出置被下度奉合掌候頓首

正月五日

西郷吉之助

佐次右衛門様 御侍史

【按】此書も淀城攻撃の戦況を報じたるなり

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月七日)

書翰

兩日不得御意候處昨夜者御出張之由途中に而御行逢爲申由御座候へ共跡以承事に御座候東寺の方は先づ穩成譯にて懸口等之令を下され候譯にも無之却而軍之模様は如何と御尋共參候位之事御座候間貴兄御滞留は無益之事と奉存候間先づ御歸り被下度八幡山崎之要所を占候間今迄之手筈にては不相濟候付得與必算を定夫より追々責付候方可宜與相考候に付當分之處は番兵を居へ一應人數も繰上其上相掛候筋に申遣候間右等之處を以今日は御引取被下度奉合掌候頓首

正月七日

西郷吉之助

大久保一藏様

【按】六日夜大久保征討大將軍宮の命を以て東寺に至り軍參謀と爲る然るに同夜隆盛は淀より歸京し大久保の東寺出張を開き之を不必要とし歸京を促したるなり

本田勘解由に贈る書

(明治元年正月七日)

去る三日不計も賊軍より兵端を開き一時は混雜致候得共終に打挫日々戦争官軍毎に勝

利を得昨日迄八幡之賊巢を責拔橋本迄打拔候事に御座候就ては此上は華城一段に相成候間得與廟算を立責掛候賦に御座候間唯今其許に屯集之兵暴舉に及び候ては大に官軍之人氣に相掲り候に付京地之官軍と一時に手筈を合し俱に責寄せ候様仕度御座候間何卒期限を定め可申上候間其内必御動搖不被爲在様御申上置被下度態々以書面奉得貴意候間宜しく御取成被下度御頼み申上候以上

正月七日

西郷吉之助

本田勘解由様

【按】六日官軍賊を八幡橋本に追撃す藤堂藩官軍に應じ賊大敗して大阪に退く是より先鷺尾隆聚内勅を奉じ浪士を率ゐて高野山に屯集す隆盛書を贈り戦争の結果を報じ屯集兵の動搖を注意したるなり本田は土佐藩士にて鷺尾に附隨しきたるものなり

桂右衛門に贈る書

(明治元年正月十日)

中將様益御機嫌能被遊御座恐悅之御儀奉存候陳者去る三日徳川暴舉之振舞先日申上置候通に御座候六日迄は八幡へ押詰難なく攻落橋本迄追詰候處山崎御固は藤堂に而御座

候處是も官軍に屬し共に相戰候故譯もなく攻落追卷り候處牧方迄も足を止候儀不相成勿論牧方え出張之兵も共崩いたし大阪え逃去候處大阪城大恐怖を懷一足もたまり得ず薩長之兵今夜押寄も不被計與の事にて騒立取る物取あへず逃支度を成し七日朝より八日迄に相掛一人も不殘大阪城中を逃去越前藩大阪詰之者を招呼別紙之書面を相渡早々薩長之先手に寫を以相告呉れとの頼み急撃を免れ度との事而已に御座候三日より六日迄之連戦一步も不退少々の敗なく勝通しの軍は未曾有之ざるの戦にて御座候爲皇國御悅可被下候人數多少を比較いたし候得ば賊軍は五増倍之事に御座候得共かくの如き勝利はいまだ不聞儀に御座候京攝之間餘程人心を失ひ居候事にて今日に至りては伏見邊は兵火之爲に焼亡いたし候得共薩長之兵隊通行度毎には老若男女路頭に出て手を合せて拜を爲し難有々々與申聲而已に御座候戰場にも路々糧食を持出し汁をこしらへ酒を酌て戦兵を慰し國中之人民よりはまさりて見へ候事に御座候淀城は前より賊兵を城内え不入付城下迄押詰候處歎願有之焼落不呉様との事に御座候而城内よりは一發も不打出候故城は不焼に市中之賊巢を焼拂て賊を追落候處其後は餘程世話いたし呉大に都

合能き事に御座候近畿之諸侯は皆官軍に屬し又兩端を懷き居候藩も方向相定官軍日々盛大に罷申候御安慮可被下候山陽道は姫路賊に與し居候故長兵備前と合し打卷く賦り御座候必ず不日勝報可有之與相待居申候山陰道は西園寺様惣宰にて薩長之兵を率御出張相成候處是は戦は不致三丹を御説得相成候て官軍に被屬候御策に而御座候龜山は早く相隨ひ候趣申來追々官軍に屬し候向與被相聞申候大坂之通路を久敷被塞候而は大に困窮可仕與相考居候處案外急速に相開天幸無事に御座候今日は征討將軍宮錦之御旗を押立浪華迄御出張にて昨夜牧方御泊にて御座候皇威輝與は今日之事に御座候御遙察可被下候いまだ混雜中にて不能詳悉候得共大略勝軍之一左右迄如此御座候恐惶謹言

正月十日

西郷吉之助

右衛門様
御侍史

尚々江戸御屋敷を燒崩され大坂之御屋敷燒失此兩件實に殘念之仕合是丈けか負に相成候事に御座候

【按】賊七日より八日に至り全部大阪を撤し江戸に遁走すより十日征討大將軍宮諸藩兵を率ゐて大阪城に入る。是に於て近畿以西の地略平定す此書戦争の結果と諸藩歸順の狀を報じたるなり

蓑田傳兵衛に贈る書 (明治元年正月十六日)

中將様益御機嫌能被遊御座恐悅御儀奉存候陳者大坂落去以來追々軍威盛に相成土藝等皆服し居り形勢大に相變じ只手を合せて薩摩大明神様と唱今にては勤王之士と相見得申候容堂公には岩倉卿より大議論を被成夫より降伏之姿に御座候第一臆心之者は成敗之上に惑を生じ成敗定り候得ば決着出來候儀は常人之事とは乍申餘りに鐵面皮之事多く御座候御笑察可被下候官軍之勢日々盛大に罷成り大垣小濱等は賊軍に興し居候得共是以て歎願いたし東夷征伐之先鋒を被命實行相顯候處を以て前罪を被免候筋に相成申候宮津杯は君候兩人首級を差出候なりとも可致候に付不及滅國様にと之儀迄も申出候由俗論と申すものは實におそろしきものにて不可忍ものを忍び候事に御座候得ば如何様とも轉變仕候決て膽を消し候次第に無御座候伊豫松山も征伐被仰出候得共是以頻りに歎願之由に被相聞候松山高松は土州より願出追討を被命候桑名は細川彦根外に兩三

藩に征討被命近々發足之賦に御座候只今にては追々西國は相定り候模様には御座候會津は上杉、佐竹、南部へ被命出討之賦に御座候上杉佐竹等は内々相願候向に御座候仙臺も近々京着と申事に候東國之官軍に屬し候趣に相見得申候當分東國之諸侯は勿論民心を離し候策第一之譯に御座候間早々説客を被差出候儀に御座候東國は勿論諸國之内是迄徳川氏之領分旗下士之知行所共王民と相成候得ば今年之租税は半減昨年末納之物も同様被仰出積年之苛政を被寛候事に御座候此一儀にても東國之民心は直様相離れ可申儀と奉存候彼賊を孤立さするの策は早く相用ひ不申候ては不相濟夫連も酒井等之者は必賊と生死を共に可致儀とは奉存候得共討安き事には成行可申事と奉存候關東へ逃歸り候てより人心如何に御座候哉探索も追々差出置候得共いまだ一左右も無之定て内亂相生じ候半かと被相察申候是迄之人氣にては沸騰も生し可申かと奉存候東兵は薩長之兵少寡を漫り器械之不足を見て暴發之事に至り候向に御座候得共却て數千之屍を重ね大敗を取候事に御座候得ばもうは頼もの更に無之餘程落膽いたし候ものに御座候只頼みに相成ものは海軍而已に御座候故に朝廷に軍艦四艘を御調之賦にて談判被仰出候事に

御座候左候得ば貳艦つゝ薩長へ御預相成筋に決定相成居申候乍然いまだ御布告には不相成内備前兵庫に於て英人と及砲戰備前は散々に打成され英人大に立腹いたし大難事到來之儀に御座候堂上より東久世卿宇和島侯後藤並岩下君早々下坂に相成り御布告之上萬國之公法を以て御處置相成賦に御座候誠に失策を仕出し苦心之儀に御座候白山此節は一と通ならず王室之爲めに盡力いたし佛之「ミニストル」杯も説きかせ實に幸之至御座候各國公使も京都迄御呼び登之都合に相運居候間此度社を朝廷之外國人と相成候儀と相考居申候一昨日は太守様にも不容易御褒詞被爲在一同奉恐悅候右等之事は御家老衆より委細御問越相成候に付文畧仕候御互に大慶此事に奉存候尙軍威相振ひ一層之勢を増し申候御遙察可被下候此旨荒々奉得御意候恐々謹言

正月十六日

西郷吉之助

蓑田傳兵衛様

尙々主上にも昨日御元服被爲在恐悅此事に御座候又京伏見大坂町々より毎日酒肴を捧げ勝軍を奉祝候儀過分之事にて是程丈幕會は被惡居候事かと今更驚く許りに御座候十

文字之御旗を以て軍威盛に相成り士藝等之人も見候計にて老若拜をなし手を合せ薩摩大明神様と唱候事にて難有々と申す聲而已に御座候民心悅服いたし候儀實に王師とは此様之事を申すものかと奉存候幸一戰爭後は米之直段も下落いたし人民尙ほ悅をなし申候天幸此事に御座候

【按】此書も諸藩歸順の狀及爾後の策戰備前兵と英人の衝突等を報じたるなり書中民心悅服し薩摩大明神云々を繰りかへし書連れたる隆盛が如何に得意なりしかを知るべし

大久保一藏に贈る書 (明治元年正月二十三日)

別紙會追討之策精微に取調候ものと奉存候全體東國へは一人も堂上御出張無之追討使被差向候儀肝要と奉存候仙臺一手に被命候共必追討使なくては不叶事に御座候京都より東國へは只今路絶候得共外國船御借入には海路より仙臺迄御廻相成候得者無造作事に御座候備前之所置さへ相濟候はゞ必外國人は應諾可仕事と奉存候左候はゞ綾小路様なりとも東國之浪士を御率被爲在候而御差向相成候はゞ大に官軍に勢力を張兵氣相進